Jilin Univ.

Sungkyunkwan Univ.

Okayama Univ.

# CAMPUS Asia

# キャンパス・アジア事業 総括成果報告書

The Five-Year Experience and A New Horizon for Cooperation



岡山大学キャンパス・アジア事務局

# CAMPUS Asia

# キャンパス・アジア事業 総括成果報告書

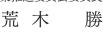
The Five-Year Experience and A New Horizon for Cooperation

# CONTENTS

はじめに	—— 004
キャンパス・アジアの成果と新地平 ―――	005
1. プログラムの目的と実施概要 ————	006
2. 成果の概要	008
(1)3国教育連携システムの構築 ————	
(2)高いモビリティの実現	—— 01C
(3)「東アジア型グローバル教養教育システム」の構築 -	
3. 特色あるプログラム ――――	018
(1)留学プログラムと学生指導体制 ————	018
(2)共通善教育と共通教科書の編纂・利用 ————	021
(3)効果的語学教育システムの開発 ―――――	
(4)ナノ・バイオコース	026
(5)自然系セミナー	029
(6)中韓留学ワークショップ	038
(7)サマースクール	039
(8)リージョナル・カンファレンス ―――	044
(9) 多言語セミナー	048
(10)シェアハウス	051
(11) 質保証を伴った教育システム ――――	053
(12)キャンパス・アジアコミュニティーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー	054
(3)アジアンクラット育成システムの構築	
4. 今後の展望	057
5. 資料 ————	058
大学の世界展開力強化事業	
キャンパス・アジア成果報告国際シンポジウム ―――	058
出版物一覧 ————————————————————————————————————	—— 104
キャンパス・アジア学生サークル新聞『ハレジア』 ―――	—— 108
キャンパス・アジア事業推進委員会名簿 ―――――	—— 116
キャンパス・アジアプロジェクトチームメンバー名簿 ――	—— 117
キャンパス・アジアの歌 ――――	—— 118
6. CAMPUS Asia Joint Final Report ———	—— 120
岡山大学キャンパス・アジア長期派遣学生 ――――	—— 155
執筆者一覧 —————	158

## はじめに

岡山大学副学長・理事(社会貢献・国際担当) キャンパス・アジア構想責任者 キャンパス・アジア事業推進委員会委員長





大学の世界展開力強化事業キャンパス・アジア中核拠点形成支援が採択されてから5年が経過しました。岡山大学は、吉林大学(中国)、成均館大学校(韓国)とともに「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」を推進してまいりました。この間、プログラムをご支援いただきました文部科学省および中韓の高等教育機関、協定校のスタッフ、学内スタッフ、およびプログラムを支えてきた学生諸君に心から感謝いたします。

このプログラムの柱は、共通善に基づく東アジアのグローバル人材育成でした。国際的な視野を持ちながら、同時に地域の文化に精通し、そして深い伝統的な教養をもったアジアンクラット(アジアの共通善に資する地域行政、民間組織の指導者)を育成することが大きな目標でした。結果的に、地方で活躍する公務員や研究を目指す大学院生など、東アジアの安定と成長を視野に入れて活躍する地域中核的人材を三国が協力して継続的に輩出するシステムができつつあります。また、5年間に500名以上の学生の長・短期での派遣・受入を行うという、極めて高いモビリティを実現して裾野をしっかりと広げることもできました。

しかし、当初から順風満帆だったわけではなく、出発点においては大変難しい問題がありました。とりわけ、共通善をどのようにして教育の中に埋め込んでいくか、またその教育を通じて学生をどのように成長させていくかという課題が大きく立ちはだかっていました。この5年間の試行錯誤の中で、私たちは共通善を探求するひとつの大きな方策として、学生たちを現場に連れ出し、その中で教師と共に学生自身を成長させるという道を選択しました。そのことによって、学生たちの中に「共通善というのは若者の心にある」という意識まで導き出すことができ、私たちのプログラムはひとつの大きな道標を獲得しました。

こうした5年間の成果は、東アジア型グローバル教養教育モデルとして集大成されました。この「キャンパス・アジア事業成果最終報告書 The Five-Year Experience and a New Horizon for Cooperation」は、5年間の歩みと今後の展望をまとめたものです。これからのキャンパス・アジア事業のさらなる発展と、東アジア共通教育システス構築の参考になれば幸いです。

## キャンパス・アジアの成果と新地平

キャンパス・アジア事業推進委員会副委員長 キャンパス・アジア プログラムマネージャー

田口雅弘



「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」の主要な課題は以下の通りであった:

- 1. 日中韓大学間のモビリティを高める仕組みを作る。
- 2. 日中韓大学間の教育交流の枠組みを作る。
- 3. 日中韓大学間の単位互換、共同学位認定システムを構築し、質の保証を確立する。
- 4. 日中韓大学間の学生交流における学生サポートシステムを確立する。
- 5. 日中韓大学間の共通教育プログラムを作成する。
- 6. 日中韓大学間の共同教育体制を確立する。

モビリティの向上については、魅力的なプログラムの開発、事前指導や学生主体のサークル支援、入門コースとしての体験型研修プログラム開発とそれを長期留学につなげる仕組みの開発、などで活発な派遣・受入事業を推進した。教育交流の分野においては、共通授業の開発、共通教科書の作成を通じた教員交流に加え、単位互換や教育連携などの仕組みを開発する上で、実務スタッフの密接な交流と信頼関係の構築ができた。学生サポートについては、Skype 面談やマンスリーレポートによる日常的なサポートから、シェアハウス、学生サークルの支援など、オリジナルな指導システムを確立した。共通教育プログラム、共同教育体制の分野では、試行錯誤の末、様々な試みを「東アジア型グローバル教養教育」として体系化し、3大学の個性豊かな教育を体系的に繋ぐシステムを構築した。同時に、医歯薬系のナノ・バイオコース、自然系のオータムセミナー、ワークショップなど、分野に応じたオリジナルなプログラムを開発した。また、リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、サマースクール、中韓ワークショップなど、アクティブ・ラーニングをふんだんに取り入れ、3国の学生自身が地域体験とディスカッションから学ぶメニューを数多く立ち上げてきた。

今後の課題は、これらの経験をモデル化して広く共有すること、より質の高いプログラムにするため、学位を伴ったプログラムにこれまでのメニューを組み込むこと、3校の経験をより広い大学コンソーシアムに広げること、および東南アジアとの交流に広げること、などである。

政治環境の厳しい時代に、このキャンパス・アジア事業が存在したことは、極めて大きな意義があったと考える。教育の分野で途切れず地道に3国の信頼関係を支え続けてきたことは、今後の3国関係を発展させる上で大きな礎になるであろう。このプログラムに採択されたことに感謝するとともに、今後もキャンパス・アジアをアジアの教育ブランドに育て上げるように尽力したい。

# 1.プログラムの目的と実施概要

2011年に、岡山大学は文科省補助事業「世界展開力 キャンパス・アジア」事業に採択された。これは、日中韓が1校ずつパートナー校を設定し、3校が留学生の相互派遣と相互交流を行うことを通じて次世代の優秀な人材を育成するプログラムである。岡山大学のパートナーは、吉林大学(中国)、成均館大学校(韓国)で、プログラム名は「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」である。

この事業は、岡山大学、吉林大学、成均館大学校が、相互単位互換制度、共通善教育、長期・短期留学制度、 サマースクールなどを通じ、相互を理解し、共通の価値観を持って、協力し課題を克服できる次世代の中核人材



を育成することを目的としている。具体的には、国際的な視野を持ちながら、同時に地域の文化に精通し、そして深い伝統的なうット(アジアの共通・資する地域行政、民間組織の指導者)、地域医療をリードする医療人、技術関発、生産、販売のすべて面で3国の協業をリード

できる企業中堅幹部候補、また環境、エネルギー、循環型社会の構築など、現代社会が抱える問題でリーダーシップのとれる人材の輩出を目指してきた。

教育制度においては、これまで様々な実験授業を立ち上げ、効果的な国際共同教育システムの構築を目指してきたが、最終的に「東アジア型グローバル教養教育システム」という体系にこれまでの試みが集約された。この体系の中で、とりわけ中国・吉林大学では歴史・伝統教育を、韓国・成均館大学校では伝統・思想教育を、日本・岡山大学では共通善・現代東アジア学を分担して教育してきた。また、幅広い分野の履修科目が認定され相互単位互換ができるシステム、また短期留学においても単位が付与できるシステムを構築してきた。さらに、最高水準の語学習得システムを構築してきた。岡山大学においては、学部・大学院と連続するキャンパス・アジア教育制度、それぞれの分野に適した教育プログラムの開発、全学に共通した共通善教育プログラムを開発してきた。吉林大学においいては、キャンパス・アジアのための独自の授業やプログラムを開発してきた。成均館大学校においては、このプログラムの基礎となる東アジア伝統・思想の集中的な講座に加え、フィールドワークを含むアクティブ・ラーニングを開発してきた。

人材育成においては、長期留学の学生に対する事前指導、長期留学後のスキルアップ指導(ディスカッションを中心とした多言語セミナーの開発、スキルアップ語学指導の継続、学生独自のイニシアティブによるキャンパアス・アジア活動の支援、等々)をはじめ、大学生活を通じて継続的にキャンパアス・アジアプログラムに参加するシステムを構築し、長期的な視野に立った人材育成を行ってきた。これらの学生の中から、大学院に進学する学生、教員に採用された学生など、将来地域を担う学生が育ちつつある。

学生支援の面においては、3校の事務局が連携をとり、学生の研究・教育支援を推進してきた。

派遣学生に対しては、Skypeを通じて定期的に面談を行うほか、マンスリーレポートを義務付けて学生の生活や

プログラムの進展状況を把握している。

また、シェアハウスの運営を通じ、相互サポートを推進し相互理解を育んだ。シェアハウスの目的は、日中韓の学生たちが生活を共にし、お互いの生活習慣や文化、価値観を相互に理解することを基礎に、本音で議論しあえる人間関係を築くことである。シェアハウスは、そこに住んでいない学生の交流の場にもなっており、大きな教育効果を上げているといえる。

また、学生の自主性を重視したサポート体制を構築した。具体的には、CAMPUS Asia同窓会、CAクラブ、キャンパス・アジア学生新聞の刊行などの活動を通じたサポート体制の強化である。これらの活動は、すべて学生たちのイニシアティブで運営されてる。CAMPUS Asia同窓会は、キャンパス・アジアプログラムで仲間となった学生・院生たちが、卒業後も連絡を取り合いながら東アジア地域中核人材として活躍し、情報を交換する場である。新しいキャンパス・アジアプログラム生のサポートも行っている。CAクラブは、キャンパス・アジアプログラムの広報、大学・地域イベントへの参加などを行う。



中華人民共和国教育部直属 の国家重点大学で12学部を 擁し、学生8万人以上。日本 との関係が深く、岡山大学と の交流も以前から活発。





## 成均館大学校

14世紀末に設立された朝鮮王朝の最高教育機関である成均館を母体として発展してきた。東アジアで最古の大学を称する。プログラムに参加する文科大学は、儒教思想の研究・教育では東アジア有数のレベル。



# Implement the "Common Good"



#### 岡山大学

全学部、大学院が参加してこの プログラムに臨む。新入生から 大学院生まで一貫して指導する プログラム。学生数約12,000 人、11学部、7研究科を有する 我が国屈指の規模の国立大学。



# 2. 成果の概要

## (1)3国教育連携システムの構築

岡山大学、吉林大学、成均館大学では、それぞれキャンパス・アジア事務局が各大学の活動を企画・実施している。3校間では、日常的にメール、電話等で緊密に連絡を取りながら、連携して事業を推進している。また、定期的に(年に1~2回)事務局会議を行い、それぞれの成果と課題を報告し合うとともに、プログラムの共同実施、相互調整、相互チェック、単位互換制度の確立などについて協議を行っている。また、不定期で3校代表者会議等を開催し、日中韓3校教育・研究連携について協議を行ってきた。

岡山大学では、全学でプログラムを企画・実施できる体制を構築してきた。各部局の副研究科長またはそれに相当する代表によるキャンパス・アジア事業推進委員会を最高意思決定機関とし、日常的な運営は実際に活動を担っている部局教員、キャンパス・アジア事務局スタッフによるプロジェクトチーム会議がこれを担当している。プログラムの実施は、キャンパス・アジア事務局が担当している。さらに、プロジェクトチーム会議の下に様々なワーキンググループがあり、学生支援、語学教育推進、共通善教育、共通教務システク開発、ジョイント・ディグリー制度設計などを専門に担当している(図2-1)。

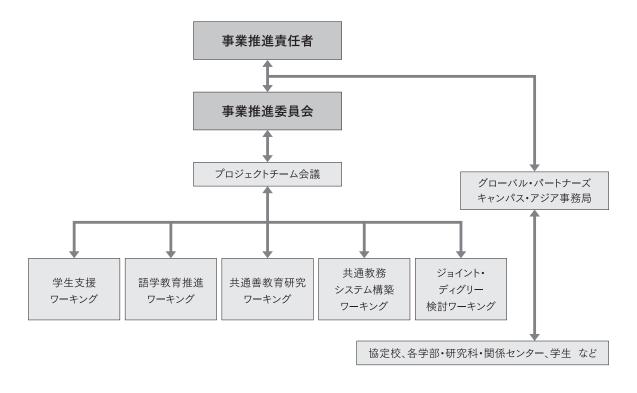


図2-1 岡山大学キャンパス・アジア事業実施体制



スタートアップカンファレンス(岡山)



韓国キックオフ会議(ソウル)



日韓代表者会議(成均館大学校)



日中代表者会議(吉林大学)



外部評価委員会(岡山大学)



3大学事務局会議(成均館大学校)



3大学ピアレビュー(岡山大学)



3大学代表者会議+日中韓三国協力事務局(岡山大学)

## (2)高いモビリティの実現

このプログラムでは、極めて高いモビリティを実現した。562名の留学生が長・短期で日中韓を移動しながら学んだ(岡山大学における吉林大学・成均館大学との受入・派遣)。また、中韓の交流(吉林大学・成均館大学間交流)も含めると、600名以上の学生がこの3校のプログラムに参加している。さらに、キャンパス・アジアの様々なプログラムには、学生だけで延べ約1,200人が参加した。

派遣・受け入れ留学生数の推移(累計) (人) 600 500 ■短期受入学生 161 ■長期受入学生 短期派遣学生 ■長期派遣学生 300 89 派遣 322名 200 受入 240名 275 22 235 合計 562名 23 100 149 47 40 H24年度 H25年度 H26年度 H27年度

図2-2 岡山大学キャンパス・アジア

表2-1 キャンパス・アジア実施プログラム統計(1)

2016年2月1日現在

年 度	No.	プログラム名	期間	参加学生人数	参加者数
	1	日中韓三大学合同会議@岡山	2012.1.17		16
	2	キャンパス・アジアスタートアップカンファレンス	2012.3.3		103
	3	長期派遣(吉林大学)	2012.3~2013.2	4	
平成23年度	4	   長期派遣(成均館大学校)	2012.3~2012.8	2	
(2011年度)	4	区别, () () () () () () () () () () () () ()	2012.3~2013.2	3	
	5	短期受入(成均館大学校生)	2012.1.29~2.20	12	
	6	自然系ワークショップ	2012.3.4~3.6	10	
	7	共通善フォーラム	2012.3.26~3.28		18
	1	長期受入(成均館大学校生)	2012.4~2013.3	5	
	2	長期受入(吉林大学生)	2012.10~2013.3	6	
	3	サマーセミナー2012	2012.8.30~31	9	
	4	長期派遣(成均館大学校)	2012.9~2013.2	1	
			2012.9~2013.8	1	
			2013.3~2014.2	4	
	5	長期派遣(吉林大学)	2013.3~2014.2	5	
平成24年度	6	短期派遣(吉林大学)	2012.8.4~9.2	10	
(2012年度)	7	短期派遣(成均館大学校)	2012.8.5~8.25	12	
	8	キャンパス・アジアサマーセミナー	2012.8.30~31	17	
	9	自然系サマーセミナー2012	2012.9.13~14	30	
	10	留学支援セミナー「留学経験を整理しながらキャリア形成を考えよう」	2012.9.19	25	
	11	リージョナル・カンファレンスin高梁「地域復興:経済と人材育成」	2012.10.27~28	15	
	12	まちなかキャンパス   (後楽館高校訪問)	2012.11.20	8	
	13	ナノ・バイオウィンターセミナー	2012.12.10~12	10	44
	14	まちなかキャンパス川「環境再生の視点から地域開発を学ぶ」	2012.12.13	19	

年 度	No.	プログラム名	期間	参加学生人数	参加者数
	15	まちなかキャンパスⅢ「幸せな発展とは ~高度経済成長が伝統的な暮らしに与えた影響~」	2013.1.18	20	
	16	短期受入(成均館大学校生)	2013.2.2~2.22	12	
	17	自然系ワークショップ	2013.2.13~16	10	
	18	岡大-名大合同交流会	2013.9.19	30	37 <sup>(2)</sup>
	19	自然系ワークショップ @成均館大学校	2013.2.14~17	10	約126
平成24年度 (2012年度)	20	特別講演会「孔子思想がもたらした人類文明への貢献」	2013.2.26		約30
(2012十尺)	21	日中韓三大学合同会議&ピュアレビュー@ソウル	2013.3.4		9
	22	共通善教育研究国際シンポジウム	2013.3.5~3.6		19
	23	ナノ・バイオ短期派遣(成均館大学校)	2013.3.5~ 7	1	
	24	寺島実朗講演会「アジアの真の安定のための視座」	2013.3.13		142
	25	外部評価委員会	2013.3.15		17
	26	中・韓派遣体験ワークショップ	2013.3.17~23	19	
			2013.4~2013.9	5	
	1	長期受入(吉林大学生)	2013.10~2014.3	5	
			2013.4~2014.3	3	
	2	長期受入(成均館大学校生)	2013.4~2013.9	2	
			2013.10~2014.9	2	
	3	留学支援セミナー「留学が与えてくれるもの ~ことばと人から世界を眺める~」	2013.6.3	19	23
	6	リージョナル・カンファレンスin牛窓 「-瀬戸内海・牛窓における日中韓三国間の経済・文化交流-」	2013.6.14 & 6.22	18	
	7	自然系サマーセミナー	2013.9.19~22	19	
	8	短期派遣(首都師範大学)	2013.8.5~8.31	10	
	9	短期派遣(成均館大学校)	2013.8.4~8.25	12	
	10	サマースクールin岡山2013	2013.8.7~19	31	
	11	前期学生フォーラム	2013.9.4		約20
	12		2013.9~2014.8	1	
平成25年度 (2013年度)		長期派遣(成均館大学校)	2014.3~2015.2	4	
(2010年及)	13	長期派遣(吉林大学)	2014.3~2015.2	5	
	14	ナノ・バイオ短期受入(吉林大学生)	2013.10.20~27	4	
	15	リージョナル・カンファレンスin津山「『東洋』と『西洋』の文化交流・融合」	2013.10.25~26	18	
	16	自然系オータムセミナー in岡山	2013.11.29~12.2	21	
	17	ナノ・バイオ薬学シンポジウムin岡山「the 1st Japan-Korea Joint Symposium on Pharmaceutical Researches」	2013.12.11~12.13	11	
	18	留学支援セミナー「僕たちの"留学"」	2013.12.18	11	
	19	ナノ・バイオ受入(吉林1・成均館1)	2013.12~2014.2	2	
	20	自然系ウインターセミナー in岡山	2014.1.22~1.25	27	
	21	みずしまフィールドワーク「環境学習で、人とまちと未来をつくる」	2014.1.25	12	
	22	短期受入(成均館大学校生)	2014.2.2~2.23	12	
	23	後期学生フォーラム	2014.2.13		約30
	24	中・韓留学体験ワークショップ	2014.3.1~3.8	22	
	25	ナノ・バイオ短期派遣(成均館大学校)	2014.3.17~21	5	

年度	No.	プログラム名	期間	参加学生人数	参加者数
			2014.4~2014.9	5	
	1	長期受入(吉林大学生) 	2014.10~2015.3	5	
			2014.4~2014.9	1	
			2014.4~2015.3	2	
	2	長期受入(成均館大学校生) 	2014.10~2015.3	1	
			2014.10~2015.9	2	
		日中韓三大学合同会議&ピュアレビュー@長春	2014.4.8~4.10		13
	3	まちなかキャンパスin水島・豊島 「高度経済成長の光と影 生産から廃棄、公害問題の現場に学ぶ」	2014.5.23~24	20	
	4	リージョナル・カンファレンス I 「野崎武左衛門と近代日本の塩業」を学ぶ」	2014.6.27~28	24	
	5	短期派遣(首都師範大学)	2014.8.7~8.31	10	
	6	短期派遣(成均館大学校)	2014.8.3~8.23	10	
	7	サマースクールin岡山2014	2014.8.4~8.15	37	
	8	前期学生フォーラム	2014.8.21		約30
	9	  長期派遣(成均館大学校)	2014.9~2015.8	1	
平成26年度	9		2015.3~2016.2	4	
(2014年度)	10	長期派遣(吉林大学)	2015.3~2016.2	5	
	11	ナノ・バイオ短期受入(吉林大学生)	2014.8.3~16	4	
	12	中韓留学体験ワークショップ	2014.9.21~27	22	
	13	日中韓三大学学長会談(後継事業等について)@ソウル&長春	2014.9.24~27		15
	14	自然系ワークショップin長春	2014.10.12~10.15	10	
	15	リージョナル・カンファレンスin矢掛「岡山地域の歴史文化との触れ合い」	2014.11.4 & 11.8	21	
	16	ナノ・バイオ受入(吉林2・成均館1)	2014.12~2015.2	2	
			2015.1~2015.3	1	
	17	中韓留学体験ワークショップフォトコンテスト	2015.1	22	
	18	短期受入(成均館大学校生)	2015.2.1~2.22	12	
	19	三大学(岡・名・立)学生交流会	2015.2.9	67 <sup>(3)</sup>	
	20	ナノ・バイオ短期受入(成均館大学校生)	2015.2.1~14	5	
	21	日中韓三大学合同会議&ピュアレビュー@ソウル	2015.2.2		11
	22	後期学生フォーラム	2015.2.10&2.24		約40
	23	自然系ウインターワークショップinソウル	2015.2.11~14	10	
	24	フォトグラフィーワークショップ	2015.2.23	27	
	25	共通善国際シンポジウム	2015.2.28~3.1		20
	26	日本国際教養学会岡山大学キャンパス・アジアプログラムセッション	2015.3.14	5	
	1	   長期受入(吉林大学生)	2015.4~2015.9	5	
			2015.10~2016.3	5	
平成27年度			2015.4~2015.9	1	
(2015年度)	2	長期受入(成均館大学校生) 	2015.4~2016.3	2	
			2015.10~2016.9	3	
	3	日中友好大学生訪中団派遣	2015.5.14~20	12	
	4	宗像国際環境100人会議	2015.5.22-24	6	

年 度	No.	プログラム名	期間	参加学生人数	参加者数
	5	リージョナル・カンファレンスin高梁 「現代社会に伝わる山田方谷の思想と業績」	2015.6.19~20	16	
	6	まちなかキャンパス「"瀬戸内海の産業から考える地域と環境 〜水島・豊島の現場をたずねる〜"」	2015.7.4~ 5	29	
	7	短期派遣(首都師範大学)	2015.8.16~8.30	4	
	8	短期派遣(成均館大学校)	2015.8.2~22	12	
	9	サマースクール2015(日本語プログラム) 「共通善教育: 日中韓三国関係と社会」	2015.8.10~17	36	
	10	サマースクール2015(英語プログラム) 「The Dynamics of the Commonalities and Diversity in East Asia」	2015.8.14~21	25	
	11	前期学生フォーラム	2015.8.7		約30
T. C. 0.7 (F. F.	12	日中韓オータムスクール2015	2015.8.17~9.4	10	
平成27年度 (2015年度)	13	   長期派遣(成均館大学校)	2015.9~2016.2	1	
(2010—12)	13	交朔州道(风号昭八子仅)	2016.3~2016.9	4	
	14	長期派遣(吉林大学)	2016.3~2016.9	1	
			2016.3~2017.3	1	
	15	ナノ・バイオ(薬)短期派遣	2015.9.8~10	4	
	16	リージョナル・カンファレンスin牛窓 「瀬戸内海・牛窓における日中韓三国間の経済・文化交流」	2015.11.13~14	16	
	17	ナノ・バイオ受入(吉林1・成均館1)	2015.12~2016.2	2	
	18	神戸大•岡大CA情報交換会	2015.12.9		7
	19	ナノ・バイオ短期受入(吉林4・成均館5)	2016.1.18~29	9	
	20	キャンパス・アジア成果報告国際シンポジウム	2016.1.22	53	約130 <sup>(4)</sup>
	21	短期受入(成均館大学校生)	2016.1.30~2.21	12	
	22	後期学生フォーラム	2016.2.24		約60 <sup>(5)</sup>
			合計(6)	1,195	

(1)プログラムベースの人数統計(各プログラムの実際の参加者数)。

- (2)名大生13名を含む。
- (3)名大40・立大生9を含む。
- (4)学外学生6名を含む。
- (5)事前調整予定人数。
- (6)ここにあげたプログラム・人数のほか、事業推進委員会は毎年2回開催;プロジェクトチーム会議はH23年度~H24年度1か月2回開催、H25年度月1回開催、H26年度~H27年度2ヶ月1回開催;各ワーキング会議や事務局会議は随時開催;共通善教育研究例会は毎年3回程度開催。また、派遣学生向けプログラム実施:長短期募集説明会、派遣前ガイダンス、派遣前研修(語学、現地文化・社会)、学生交流会、派遣後サポート。さらに、受入学生向けプログラム実施:開講式、パートナー制度、シェアハウス、キャンパス・アジア共通科目、修了式。

## (3)「東アジア型グローバル教養教育システム」の構築

このプログラムでは、東アジアの人材育成にとって必要なカリキュラムを、3国で試行錯誤しながら構成してきた。 東アジアのグローバル人材にとって欠かせない教養とは何か、相互理解を促進するための基礎教育とは何か、東 アジアのアイデンティティはどのように形成できるのか、などを3校で徹底討論しながら、現在のカリキュラム構成を 練り上げた。

具体的には、共通善教育をベースとしながら、マルチリンガル教育(多言語共通善教育セミナー、学生フォーラム、ワークショップ)、アクティブ・ラーニング(リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、中韓ワークショップ)、生活全般を通じた教育(シェアハウス、キャンパス・アジア学生クラブ)など、様々な実験教室を試み、教育効果の高いモデルを開発した(図3-1)。



また、サマースクール、短期語学セミナー、中韓ワークショップ、共通教科書編纂、共通善講演会の実施、ナノ・バイオコースなど、積み重ねてきたプログラムを「東アジア型グローバル教養教育システム」として体系化し進めた(図3-2)。

現在、学部生に対しては共通善教育、語学教育と グローバル教養教育を中心にメニューを組んでいる。 大学院生に対しては、個別の関心と修士論文、博士 論文のテーマに即した指導体制をとっている。

講義体系については、各校がそれぞれ得意な分野

図3-1 東アジア型グローバル教養教育システム

## 東アジア型 グローバル教養教育

#### 成均館大学校(韓国)

#### キャンパスアジア科目

東アジアの現代古典 東アジアの古典文学 東アジアの古典学入門 東アジアの相互疎通と 漢字文明 ナノ・バイオ、自然系セミナー 中韓ワークショップ サマースクール 学生フォーラム

#### 岡山大学(日本)

#### 共通善教育

日中韓三国関係と社会 東アジア国際・地域文化特別講義 共通善教育多言語セミナー 近現代日中韓三国関係史 リージョナルカンファレンス

#### 吉林大学(中国)

#### キャンパスアジア講義シリーズ

東アジアの共通利益 米中及び東アジアの一体化 世界正義の尺度 中日韓三国言語の相互関係と その文化の継承 中国伝統文化図解 に集中してオリジナルな科目構成を整えている。同時に、ナノ・バイオコース、サマースクールなどでは、協力して プログラム作成、実施に取り組んできた。

特徴的な取り組みとしては、岡山大学の多言語セミナー(授業で日本語、中国語、韓国語、英語を同時に使用して討論形式で授業を進める)、吉林大学の公共外交学院講義、成均館大学の教養古典学授業などが挙げられる。

各校が独自のプログラムを構成することにより、それぞれの大学に留学するメリットが高まり、また共通プログラムで協力することにより、教員同士の信頼関係の醸成がなされ、また将来の共通教育(ジョイント・ディグリーをベースとした国際共同大学院)の基礎が形成された。

岡山大学では、ほぼ全ての学部、大学院がこの プログラムに参加している。また、学部新入生から 大学院生、さらには社会人を含めて、一貫した教育 を目指してきた。



リージョナル・カンファレンスでは、フィールドワークをつうじて、キャンパス・アジアの留学生とともに岡山および東アジアの地域について理解を深めた。大学周辺の地域社会と交流しながら、地域が抱える様々な課題について、現地の人々との交流を通じて議論した。こうした授業をつうじ、中韓の学生とふれあい、東アジアに目を向けるきっかけを作った。

中韓ワークショップでは、短期で中国、韓国を訪問し、現地で歴史、経済、社会を学ぶとともに、協定校の学生と議論したり、特別講義を聴き、さらに実践で中国語、韓国語を学んだ。東アジア諸国への関心が高まるショートトリップで、とりわけカリシュラム的に留学が難しい医歯薬系、自然系の学生にとっては、貴重な経験になった。

サマースクールでは、東アジアに対する問題意識、関心を高めた学生は、東アジアの伝統、思想、文化、経済等を2週間のサマースクールで学んだ。東アジア人として教養的ベースを身につけるとともに、3国の学生が本格的にディスカッションをした。

短期留学では、中国、韓国の文化、伝統にふれ、人々と交流した。また、語学も集中的に鍛え、長期留学に向けた準備をした。

派遣前集中教育プログラムでは、長期留学を控えた学生に対し、エイティブの講師、チューターが集中的に語学指導した。また、キャンパス・アジアカフェで実践的会話トレーニングを行い、短期集中で語学力をアップさせた。 長期留学では、吉林大学、成均館大学に1年間留学し、専門分野での能力を高めるとともに、多様なバックグラウンドを持つグループの中でイニシアティブがとれる力を養った。また、東アジアの伝統と価値観を批判的に継承





できる深い教養を養った。 帰国後は、ワークショップ等で、実際にグループワークを指導し、実践的な能力をさらに向上させた。ナノ・バイオコースでは、最先端の知識と技術

#### 図3-2 東アジア型グローバル教養教育システムの一貫教育体系

# はじめの

リージョナル・

# 知識は力

# 文化に ふれる

サマースクール

#### SS/SV 短期留学



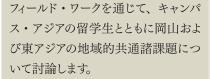




日中韓の集中講義に参加し、東アジ アの伝統、文化、思想を学び、東 アジア人としての教養的ベースを身に つけます。



ショートステイ・ショートヴィジット、短 期語学留学を通じて、両国の文化、 伝統にふれ、人々と交流します。自 然系ワークショップ、ナノバイオコース などのプログラムも充実しています。









にふれながら、こうした分野で教員、学生らが共通善教育をつうじて相互理解、共同研究をいかに深めることがで きるかを議論した。自然系ワークショップでは、3国学生・院生同士の研究プレゼンをつうじて、各分野ごとに相互 理解を深めていく。マルチリンガル授業では、ひとつの授業の中で多言語でディスカッションをおこない、言語によ る発想の違いを引き立たせるとともに、多言語が飛び交うディベートに慣れていく。

卒業後は、キャンパス・アジア同窓会等をつうじて交流を継続し、また修了生にリージョナル・カンファレンス、中 韓ワークショップの指導をお願いして、相互交流を継続する。

キャンパス・アジアの中韓留学体験ワークショップに参加した学生が、その後の長期・短期派遣留学する割合は

# 語学を 磨く

派遣前集中

アップさせます。

語学研修プログラム

# 長期留学

# 中核的 リーダーへ

#### 帰国後



留学で

吉林大学、成均館大学校に半年から1年留学し、専門分野での能力を高めるとともに、多様な文化的バックグラウンドを持つグループの中でイニシアティブをとれる力を養います。また、東アジアの伝統と価値観を批判的に継承できる深い教養を養います。



長期派遣を終えた学生を、帰国後 研修や帰国後フォローアップ語学プロ グラムにより継続的にサポートします。 また、リージョナル・カンファレンスや キャンパス・アジア留学生との交流 で、中心的な役割を担っていきます。 将来的には国際的な視野を持ちなが ら地域に貢献する地域行政の指導 者、地域医療をリードする医療人、 国際協業をリードする企業中堅幹部 候補として、巣立っていきます。









57%で、高い確率で学生が継続的にプログラムを選択することが実証された。

また、キャンパス・アジア参加学生は全分野にわたり、また学部生から院生まで幅広くこのプログラムに参加している。事業開始から現在までの様々なプログラム参加状況を集計すると、留学、ワークショップ、サマースクールなどの主要な企画に参加した学生が、学部生では人文・社会科学系が197人、自然科学・医歯薬系が89人、大学院生では人文・社会科学系が7人、自然科学・医歯薬系が78人となっており、全学体制で取り組むという構想が実質的に実現したことがわかる。

# 3. 特色あるプログラム

## (1)留学プログラムと学生指導体制

派遣事業の特徴としては、中韓、日中、日韓の両方に留学するキャンパス・アジア留学生が増えてきたことである。当初は、派遣先1カ国のプロフェッショナルを育てるところに共通教育を集中させてきたが、中間報告の指摘も受けて、最近ではマルチリンガルで両国への留学経験を持つ学生を意識的に育成してきた。その結果、たとえば岡山大学では中国、韓国の両国に留学したキャンパス・アジア学生は平成25・26年度で20名中9名となった。

#### 充実した留学生活とグローバルな視点の獲得

キャンパス・アジアの留学制度は、経済面、教育面、受入態勢面等、どの点をとっても、各段にすぐれたプログラムである。どの留学生も、経済、生活面で不安なく充実した日々を送ることができた。とくに、CAは、各大学が独自の理念を盛り込んだプログラムを展開していくが、それを基にした教育体制は、一般の留学とは異なる強い印象や思いを留学生に与えた。それは、留学生がキャンパス・アジアの基盤となるコンセプト一例えば岡山大学の「共通善」―と自分の留学とを常に関連付けながら、各自の留学生活を送るということである。つまり、各学生は、東ア

ジアや世界のありかたと自分とを常に見つめながら留学生活を送らなければならないということである。それはとりもなおさず自己を超えた視点つまりグローバルな視点の獲得ということにつながるのである。さらに、日中韓のトライアングルの交流を経験したり、自ら多様な異文化体験や交流イベント組織したりするなど、積極的な対外活動を行う長期留学生経験者も目立つ。長期留学は、グローバルな視点の獲得や人材育成の観点からも大きな貢献があったと思われる。



#### 語学力の向上

長期派遣の最大のメリットは、現地に半年ないし1年間滞在することによって、それぞれの国と人々の姿を深く理解できる点にある。とくに、外国語は、現地での生活体験が非常に重要であることは言うまでもない。キャンパス・アジアでは、各国とも充実した語学教育が行われた。その結果、留学後の外国語運用能力は目覚ましいものがある。さらに、本学では、帰国後の語学力を維持、向上させる授業の設置や履修上の措置(例えば他学部履修不可とする中国語の専門の授業をキャンパス・アジア帰国学生には不可としないなど)が取られている点も特筆すべき点である。

#### 留学生どうしの緊密な交流

同じキャンパス・アジア制度での交流とあって、それぞれの学生間の交流や親密度は非常に高かった。そのため、例えば、長期派遣学生(例えば岡大生)が現地(例えば中国)で受けた温かいもてなしを、受入学生(例えば中国人)に同じ温かさでもてなすという習慣ができてきた。これは、キャンパス・アジアならではの素晴らしい成果である

と思われる。また、帰国した長期派遣の学生が、積極的に受入学生のチューターになり、決められた時間数を超えて熱心に業務を行ってくれたのも印象深い。3国間で温かい心の交流が育ったことは、キャンパス・アジアプログラムの大きな成果と言えるであろう。

#### 人文学系講義と個別指導

キャンパス・アジアの受入学生については、その多くが社会文化科学研究科(文学系)と文学部関係の専攻であることから、部局としてさまざまな対応を行った。

受け入れ窓口の一元化とアカデミックアドバイザー制:従来、留学生は受け入れの教員が指導教員となり、専門の指導のみならず、受け入れ時の対応や日常の世話している。このため、指導教員の負担が大きく、一人の教員が引き受けられる留学生もごく限られている。そこで、キャンパス・アジアの留学生に関しては、事務的なことや日常の問題に関しては、すべてグローバル・パートナーズが所掌し、さらに、原則的に指導教員とアカデミックアドバイザー(以下AA)を区別することとした。具体的には、研究科の受け入れ窓口となる特定の教員が原則的に指導教員あるいは受入教員となり、AAは専門分野の教育面だけを担当することにした。つまり、従来、一人の教員が行ってきた業務を分担所掌したのである。これにより、教員の負担が軽減し、業務が能率化たことは言うまでもない。なお、指導(受入)教員は、部局でのCA留学生の専門に応じたAAの選定とマッチング、各留学生の履修計画の説明やアドバイス、履修中の問題処理等に対応しながら、受け入れをスムーズに展開させることができた。

**キャンパス・アジア制度の教員への徹底**:キャンパス・アジアのプログラムについては、当初、研究科での理解が不十分で、上記AAのマッチングその他で、問題が生じることもあった。これについては、学部教授会などを通して、プログラムや制度を説明し、理解の周知を図った。これにより、2年目からは多くの教員がCA留学生に対し理解をもって、温かい対応をしてくれ、専門教育を積極的に引き受けてくれた。

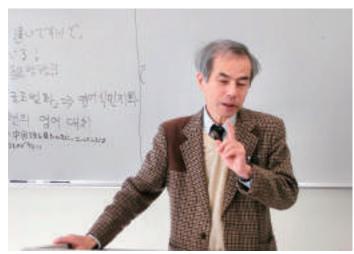
共通科目の設置:キャンパス・アジアの留学生の教育については、各自の専門の授業を(AAのもとで)履修するだけではなく、キャンパス・アジアの理念に基づく関連授業もぜひ学んでほしいという願いもあり、キャンパス・アジア留学生のために有益な授業を「キャンパス・アジア共通科目」として選定した。具体的には、学部や研究科で開講されている数百の授業から、日中韓の3国に関わる問題や日本語、日本文化を扱う授業を精選した。この際、留学生にとって分かりやすく基礎的な内容であることを考慮したのは言うまでもない。こうして、学部で30余り、大学院で25程度の授業を毎年精選し、選定リストを作成した(担当教員にはすべて説明の上了解を得、教授会でも承認を得た)。これを留学生の履修登録時に情報提供した。留学生にとって、この共通科目は、履修の大きな助けとなった。

キャンパス・アジア学生のための特別科目の設置:上記の共通科目(大学院)には、キャンパス・アジアの学生のために予算措置された(非常勤講師による)特別科目が含まれている。日本語教育関係諸科目と「日本文学研究法演習」および「東アジア国際・地域文化特別講義」がそれである。日本語教育関係諸科目(科目名「アカデミック日本語演習」、「学術日本語」)では、人文社会系に特化した日本語教育を行い、留学生の日本語教育に大きく貢献した。また、「日本文学研究法演習」は、日本文学専攻や日本文学に興味を持つ留学生が多いことから開講された授業で、大学院における文学研究の導入教育に役立った。また、「東アジア国際・地域文化特別講義」は、岡山の地域文化ないし岡山と東アジアとの文化的な関係を主たるテーマとし、地域の識者や文化人を招いて講義を行うオムニバス授業である(例えば、岡山県郷土文化財団岡崎嘉平太記念館学芸員による「岡崎嘉平太の生涯と功績」、岡山市国際課課長による「岡山市の国際友好交流都市との交流」など)。大学では、聞くことのできない

興味深い話ばかりで、これは、キャンパス・アジ アの理念にも適合し、さらに「岡山と東アジア テーマ」というテーマは、岡山大学ならではの授 業となった。この特別授業は、地域に根差した 新しい試みの授業として注目を集めた。

専門教育における指導:日本と中国、韓国では、自然科学系と異なり、それぞれ、同じ研究分野でも研究方法が大きく異なることが多い。例えば、中国や韓国では、理論面が重視されるが、日本では実証面が重視されるといった違いである。このため、当初、日本での研究に戸惑った留学生も少なくないが、日本的な研究方法を理解し、その結果、自分の研究の視野を広げ、留学での効果をあげた学生も多い。これは、研究科での授業の多くが少人数の授業であり、AAの教員がきめ細かく留学生を指導できるという環境も大きい。また、同じゼミの日本人学生と知り合いになり、専門における情報交換や文献収集に役立ったことも多い。

チューター制度: CAの留学生には、他の留学生と同じように、日本人チューターが付き、日本





人学生との交流や日本文化に対する理解が深まった。キャンパス・アジアでは、このチューターの選定の仕方で、新たな方式を採用した。それは、キャンパス・アジアのプログラムで、吉林大学、成均館大学に留学した日本人学生をできるだけチューターに採用することであった。彼らは、中国や韓国の事情を理解しており、また中国語、韓国語ができることもあって、来日したキャンパス・アジア留学生には、大変心強いサポーターとなった。また、これらの日本人学生も、留学でお世話になった「お返し」の意味もあって、とても熱心に仕事をこなしてくれた。さらに中国語や韓国語のブラシアップにも役立った。また、日本語力が不足する学生には、日本語教育を専攻する大学院生をチューターに割り当てて、日本語力の向上を目指すなど、社会文化科学研究科ならではのきめ細かいチューター選定も行った。

キャンパス・アジアの留学生は、人文系専攻の学生が多いことから、本学では上記のようなさまざまな教育、研究上の対応を行い、高い効果をあげた。キャンパス・アジアプログラムは、他の留学プログラムと異なり、理念が明確であり、そのため、理念に応じた措置が比較的うまく取れたのではないかと思われる。

2016年度以降は、60分クオーター制の施行や、それに応じたカリキュラムの改変が行われ、この中で留学プログラムをどう組み込んでいくかは、喫緊の問題であるが、この5年間のキャンパス・アジアプログラムで行われた教育上の対応が、今後の留学生教育に大きな寄与をなすと思われる。

## (2)共通善教育と共通教科書の編纂・利用

共通の教科書で教育することは、このプログラムのひとつの目的であったが、同じ内容で教養教育を行うという 当初の企画はなかなか進行しなかった。これには2つの障害があった。ひとつは、議論をすればするほど相互の見 解の違いが明らかになり、共通の内容で合意するのは非常に困難であったことである。ふたつ目は、それぞれの長 年にわたって確立されてきた教育理念や教育方法を画一化することには異論が大きかったことである。最終的に、 基礎的な問題理解について共通認識を固め、各論については学生たちが議論する素材を与えるような内容にする こと、教科書を使った討論ベースの授業を構築すること、サマースクールなどで積極的に教科書(試作版)を利用し て、日常的に内容の改善を図っていくことなどが、基本的方向として定まった。これらの指針をベースに教科書の 編纂は一気に加速することになった。

#### 共通教科書作成までのプロセス

#### 共通善教育研究会

共通善教育研究会の中にある伝統・思想部会、歴史部会、漢字文化部会、経済部会がそれぞれテーマを決めて、共通教科書作成の検討会議を行っている。時折、学会さながらの白熱した議論になり、新しい教科書を作る熱気がみなぎっている。



#### サマースクール

共通善教育研究会で検討された内容は、まずサマース クールで検証される。各担当者がサマースクールの講 義で簡易版の共通教科書を使い、学生と討論しながら 内容をアップデートしていく。この内容は、共通善教育 研究会にフィードバックされる。



#### 教科書の編纂

ある程度内容が固まったところで、教科書編纂チームが編纂を開始し、キャンパス・アジア事業プロジェクト・チーム会議の承認を得て教科書を出版社から刊行する。



#### 教科書の利用

出版された教科書は、キャンパス・アジア授業や一般の 授業で利用される。利用していく中で出てきた改善点 は、次の版で修正されていく。



共通善教育研究会での討論



サマースクールでの講義風景



経済学共通教科書を使った講義風景 (田口雅弘教授・経済学部専門基礎科目「世界経済事情」)

#### 経済部会の共通教科書の例

この教科書は、東アジア全般の動きと日中韓各国の諸問題を織り交ぜながら、東アジア全体の利益、各国の利害が複合的に見えるように構成されている。したがって、全体を通じて読者を一定の考え方に誘導するのではなく、東アジア全体の利益は抑えておきながらも、各国の立場や利害もはっきりと明記するものである。むしろ、そうした違いを比較することにより、学生(読者)がコンフリクトの落としどころを自ら考えたり討論したりすることを意図するものである。



#### キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの経済協力と共通利益

#### 目 次

## **第1章 グローバル化と東アジア** 田口雅弘(岡山大学) はじめに

- I. 世界経済のグローバル化
- Ⅱ. グローバル化と東アジア諸国の経済構造変化
  - 1. 東アジア経済の規模と相互依存
- 2. 東アジア諸国の経済構造改革と摩擦おわりに

#### 第2章 東アジアの経済連携 -アジアと日本の知恵を生かす-

金美徳(多摩大学)

#### はじめに

- 1. アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか
- Ⅱ. アジア平和に対する敏感さで信頼関係を築く
- Ⅲ. 地政学的立地を見極めグローバル戦略展開
  - 1. 北東アジア経済圏の地政学的優位性
  - 2. 北東アジアの域外経済連携
  - 3. 日中韓経済の知恵を生かす
  - 4. アジアはエネルギー資源のフロンティア
  - 5. ユーラシア大陸を繋ぐ国際物流拠点

#### おわりに

#### 第3章 日本経済の発展と構造変化 釣雅雄(岡山大学) はじめに

- 1. 戦前日本経済の繁栄と後退
- Ⅱ. 戦後復興から高度成長期へ
  - 1. 戦後の混乱からの回復: ハイパーインフレと経済政策
  - 2. 高度成長期
- Ⅲ. 石油ショックからバブル経済
  - 1. 石油ショック
  - 2. 円高とバブル経済
- Ⅳ. 長期不況と構造問題

おわりに

#### 第4章 日本経済が直面する様々な課題について 下井直毅(多摩大学)

#### はじめに

- 1. 人口減少と今後の経済成長
- Ⅱ. 貿易の自由化の動き
  - 1. 自由貿易圏の拡大の動き社会保障と税のあり方
  - 2. 日本のFTA・EPAの動き
  - 3. RTAのメリットとデメリット
  - 4. 今後、日本が目指すべき道について
- Ⅲ. 為替レートの動き
  - 1.円ドルレートの推移
  - 2. 重要なのは実質為替レートの動き
  - 3. 円高や円安のメリットとデメリット
  - 4. 円高が長期的に日本経済に及ぼす影響
  - 5. 円高時代あるいは円安時代にやるべきこと
- IV. 社会保障と財政再建への道
  - 1. 日本の財政赤字と社会保障費の拡大
  - 2. 財政赤字の問題点
  - 3. 財政赤字の維持可能性
  - 4. なぜ消費税増税なのか

#### おわりに

#### 第5章 胡錦濤・温家宝体制の回顧と 今後の中国経済展望

巴特尓/バートル(多摩大学)

#### はじめに

- 1. 胡錦濤・温家宝体制の回顧
- (1)経済規模
- (2)対外貿易
- (3)対内外投資
- (4)世界最大の自動車市場
- Ⅱ. 習近平・李克強体制の課題
  - (1)経済構造の転換
- (2) 国進民退」の克服
- (3)格差是正

#### 章ごとに設けられた討論課題の例

#### 『東アジアの経済協力と共通利益』「第2章 東アジアの経済連携 -アジアと日本の知恵を生かすー」 [演習]

- 1. アジア・ユーラシアダイナミズムをどのように認識し、どう 向き合うべきだと思うか。 アジア・ユーラシアダイナミズム時代を創造する志とはどのようなものか。
- 2. ビジネスパーソンが平和に敏感でなければならない理由とはなにか。
- 3. ビジネスパーソンにとって必要な教養 (リベラルアーツ) とはどのようなものか。
- 4. 地政学的知恵とはどのようなものか。また、地政学的優位性をいかに捉え、地政学的戦略をいかに展開するか議論せよ。
- 5. 経済発展と環境保護のバランスをいかに保つべきか。

- 6. 日韓海底トンネルと中韓海底トンネル構想について賛成するか。
- 7. 東アジアの国際関係をいかに捉え、どのように改善すべきか議論せよ。台湾や北朝鮮とどう向き合うか考えよ。
- 8. FTA(自由貿易協定)、EPA(経済連携協定:貿易・サービス・投資の連携)、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)、WTO(世界貿易機関:自由貿易促進を主たる目的)など通商のあり方を議論せよ。
- 9. どの国や地域と積極的に経済外交を展開すべきか考えよ。
- 10. アジア・グローバル人材とはどのような資質を持った人材と考えるか。

- (4)人口対策と生産性の向上
- (5)エネルギー需給問題と環境対策
- (6)地方経済と地方債務問題
- (7)金融改革

おわりに

#### 第6章 韓国経済の現状と課題 金美徳(多摩大学)

はじめに

- I. 韓国経済の現状と課題
- Ⅱ. 険悪な日韓関係と密接な日韓経済
- 1.韓国企業と日本企業の経営比較日韓企業の強みと戦略
- 2. 韓国企業のグローバル戦略
- 3. 韓国企業の弱み

おわりに

#### 第7章 貿易投資に見る日本と中国の経済関係

滕鑑(岡山大学)

はじめに

- 1. 日中の貿易投資の展開
  - 1.1978~1990年:激しい変動期
  - 2.1991~1998年:安定的拡大期
- 3.1999~2011年: 飛躍的拡大期
- 4.2012年以降:縮小傾向期
- Ⅱ. 貿易構造の変化
  - 1.1950~1970年代の輸出:日本の資本集約財と中国の 資源・労働集約財
  - 2.1980~1990年代の対中輸入:資源集約財の退場と資本集約財の登場
  - 3.2000年代の対中輸入:資本財の拡大
- Ⅲ. 東アジアの分業構造と日本の対中直接投資
  - 1. 東アジアの三角貿易と日本の直接投資
  - 2. 日中間の相互供給体制
- IV. 日中経済摩擦
  - 1. 貿易不均衡の拡大
  - 2. 貿易摩擦

3. 知的財産権と対中投資環境 おわりに

#### 第8章 東アジア政治関係と経済協力の課題 - 日中関係を中心に-

沈海涛(吉林大学)

はじめに

- 1. 日中関係と経済協力へのアプローチ
- 1. 日中関係および東アジア地域協力の問題点
- 2. 東アジア地域協力の変容に日中経済関係は?
- 3. 「政冷経熱」または「政冷経涼」と言われた日中関係
- II. 東アジア地域における日中関係と経済協力
  - 1.2000年以降の日中貿易関係の推移
  - 2. 日中韓協力の枠組みにおける日中環境協力
  - 3. 「戦略的互恵」を求める日中経済関係ーエネルギー協力を例として
- Ⅲ. 日中関係および日中経済協力の課題
  - 1.「チャイナ・プラス・ワン」と日中経済関係の競合
- 2. 「四点原則共通認識」後の日中関係の行方 おわりに

## (3)効果的語学教育システムの開発

派遣事業の特徴としては、中韓、日中、日韓の両方に留学するキャンパス・アジア留学生が増えてきたことである。当初は、派遣先1カ国のプロフェッショナルを育てるところに共通教育を集中させてきたが、中間報告の指摘も受けて、最近ではマルチリンガルで両国への留学経験を持つ学生を意識的に育成してきた。その結果、たとえば岡山大学では中国、韓国の両国に留学したキャンパス・アジア学生は平成25・26年度で20名中9名であった。

もう一つの特徴は、各校のキャンパス・アジア語学習得システムが安定し、学生の語学レベルが格段に向上したことである。下記の通り、たとえば岡山大学では初級レベルの学生が、ほぼ最上級の検定試験に合格して帰国している。岡山大学プログラムでは、現地語の学習に力を注いでいる。それは、単に現地の語学学校に派遣するだけでなく、多言語共通善教育セミナーやリージョナル・カンファレンス、シェアハウスといった生活全般を通じて、マルチリンガルな人材が育つような方法を開発しながら推進している。その成果は、以下のデータにも表れている。ほとんど現地語ができない学生が、1年後にはほぼ最上級の検定試験に合格して帰国している(表3-1、表3-2)。

また、2014年度に、韓国大学教育協議会が 企画した「2014 CAMPUS Asia事業体験エッセイコンクール」では、入選者38名中、8名が 岡山大学、吉林大学、成均館大学校のキャン パス・アジア留学生であった。また、そのエッセイの内容は、共通善教育の成果にあふれた ものであった(表3-3)。

図3-1 東アジア型グローバル教養教育システム

派遣先(期間)	学生	派遣前言語レベル	派遣後言語レベル
中国•吉林大学(1年)	A-M	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	B-F	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	C-F	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	D-M	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	E-F	初級	HSK 6級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	F-F	初級	TOPIK 5級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	G-F	初級	TOPIK 5級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	H-M	未履修	TOPIK 4級(中級)
韓国•成均館大学校(1年)	I-F	初級	TOPIK 5級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	J-F	初級	TOPIK 6級(上級)

表3-2 平成26年度派遣学生の派遣前・派遣後語学水準

派遣先(期間)	学生	派遣前言語レベル	派遣後言語レベル
中国•吉林大学(1年)	A- F	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	B- M	初級	調査中
中国•吉林大学(1年)	C-F	未履修	調査中
中国•吉林大学(1年)	D- F	初級	HSK 6級(上級)
中国•吉林大学(1年)	E-M	未履修	調査中
韓国•成均館大学校(1年)	F-F	初級	TOPIK 5級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	G-F	中級	TOPIK 6級(上級) 語学堂成績優秀賞
韓国•成均館大学校(1年)	H- F	初級	TOPIK 6級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	I-F	初級	TOPIK 5級(上級)
韓国•成均館大学校(1年)	J-F	初級	TOPIK 6級(上級) スピーチ大会最優秀賞

表3-3 韓国大学教育協議会「2014 CAMPUS Asia事業体験エッセイコンクール」入選者

事業団	名前	所属校	エッセイ題目	区分
成均館大(文科)	FAN Huijie	吉林大	私を成長させたCAMPUS Asia	最優秀
成均館大(文科)	イム・ジウォン	成均館大	私が見た中国について話したい	優秀
成均館大(文科)	ナム・ヘイン	成均館大	未生から完生を目指して	優秀
成均館大(文科)	イ・ジョンミン	成均館大	他者にどのように近づければいいか	優秀
成均館大(文科)	キム・ヒジン	成均館大	The China of my eye	優秀
成均館大(文科)	XIE Jiao	成均館大	Campus Asiaを通じてみる「善」	奨 励
成均館大(文科)	大垣 杏花	岡山大	私が体験したCampus Asiaプログラム ※韓国語で執筆	奨 励
成均館大(文科)	パク・チョンへ	吉林大	キャンパス・アジア体験エッセイ公募	奨 励



キャンパス・アジア交換留学生(長期)として、 岡山大学から吉林大学と成均館大学校へ毎年 計10名(中国と韓国に各5名)を派遣している。 中国語と韓国語の2言語指導は、これらの派遣 学生を対象に行っている。この指導は、留学す る前の指導と、派遣した学生の帰国後に行う指 導との二つがある。

中韓2言語指導は、派遣生の言語レベルに基づいて、初級と中級2クラス(中韓言語計4クラス)を編成して指導を行った。指導前のレベルチェックに基づいたものであるが、派遣学生の個

人要望やそれぞれの個性(学習能力または理解力)をも重要視した。

語学レベルと学習能力に合わせた教科書の選択と使用。初・中級クラスでは、教科書をそれぞれに二冊を併用した。例えば、初級クラスの場合は、基礎知識を強化するための共用教材一冊と、派遣生の学習能力に基づいて参考教材一冊を使っていた。中でも参考教材の使用にあたっては、派遣生それぞれの語学力に基づいて、指導内容を抽出し個別的指導を行った。一方中級クラスでは、文章力の強化に重点をおいて、作文練習のための共用教材(日本国内の市販教材)と、中国また韓国の大学が日本人留学生向けに出版した教材を導入した。

帰国後の中韓言語指導は持続的な学習段階を通して、語学力の向上を目指すものであった。中韓2言語ともに 上級クラスを編成(計2クラス)。語学指導は、日中韓三国間の政治、文化、歴史、経済等に関する具体的な課題 を取り上げて、専任教員の指導の下で、主に発表と討論という方法をとった。教材は教員が日本、中国、韓国で

発刊された新聞や雑誌また専門書籍から抽出した。

学生による発表や討論は留学先で習得した中国 語または韓国語で行われた。報告した内容を中国 語また韓国語で書きあげて提出し、その内容に基 づいて教員が学生に課題を与えて思考を促し、さ らに受講生による討論を行った。理解力と文章力 の強化を目標とした。

また、チューター制度の導入は、実践的な語学 修得に効果的であった。岡山大学に在籍している 中国と韓国の留学生の中から募集し、日本人学生

の中韓言語学習のための補助員としてその役割を果たしていた。

キャンパス・アジア日中韓三大学の学生間の交流を推進するために、語学力は不可欠である。派遣前の言語指導は留学にもっとも必要とする基礎知識を学ぶためであるのであれば、帰国後の指導は留学先で身に付けた語学力を維持し、今後社会の一員として、日中韓三国間の交流を推進する人材を確実に養成するという意味合いもある。

## (4)ナノ・バイオコース

他大学と比較して岡山大学のキャンパス・アジアの特徴の一つは全学をあげての人材育成および交流の取組みである。医歯薬系では「ナノ・バイオコース」を設置することとした。これは医歯薬系においては他学部とは大きく異なるカリキュラムのため、単位互換を前提とした交換留学制度の実施が困難であること及び学内のO-NECUSプログラムで継続的に修士大学院生を中国各大学から受け入れてきていることから、学部生から修士・博士までの大学院生までを対象とした短期留学生受入プログラムを「ナノ・バイオコース」として設置することとした経緯がある。

ナノ・バイオコース受入は2013年より開始し、短期コース(1-2週間)と長期コース(3カ月)の二つのコースで吉林 大学医学系、成均館大学薬学系から学生受入を行ってきた。また、岡山大学の学生も、成均館大学薬学部およ び医学部サムスンソウル病院へ短期見学(short visit)プログラムを実施した。

2012年に廣畑がナノ・バイオコース専任教員として採用となり、コース設定を始めた。まず、短期(1週間)と長期(3カ月)の二つのコースを設定し、2012年8月成均館大学医学部および吉林大学白求恩医学院を訪問してナノ・バイオコース概要について説明し学生受入について協議した。同年9月成均館大学薬学部と同コースについて協議を行い、翌年3月再度薬学部教員とさらに意見交換を行った。4月には再度、白求恩医学院訪問し、学生受入について協議を行う一方、英語および中国語によるコース概要(募集要項)を作成した。

2013年6月にナノ・バイオコース一期生募集を開始し、同年10月にナノ・バイオコース短期学生が吉林大学から来日し、ナノ・バイオコースが開講した。2014年4月には再度、吉林大学を訪問し、学生の前で直接ナノ・バイオコースについて説明し、日本での留学生活について紹介すると共に学生募集を行った。事業終了までに、短期コースは30名、長期コースは7名の学生をナノ・バイオコースで受入れた。



コース終了後に学生アンケートを実施し、ナノ・バイオコースに対する感想・今後の取組みなどを尋ねたところ、どの学生からもナノ・バイオコースは非常に好評であった。中には、再度岡山大学へ留学を希望する学生もおり、今後はO-NECUSなどとも連携して、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科もしくは大学院保健学研究科への博士課程への進学を積極的に勧誘する事を目指したいと考えている。

このような交流を積み重ねてきた中で、薬学 系では前述したように、ダブル・ディグリープロ

グラムに関する合意が得られ、相互派遣受入制度を行う協定を締結するに至った。ダブル・ディグリープログラムはマスコミにも取り上げられて反響を呼んでいる。また、吉林大学の方では吉林大学第二病院に所属する若手医師を岡山大学病院へ3カ月派遣しトレーニングを受けさせるプログラムの提案がなされた。留学渡航に関する費用は吉林大学第二病院側が負担し、岡山大学は宿舎およびトレーニングプログラムを提供するものである。4名の医師が3カ月間ずつ岡山大学で修練を行う予定であり、2016年1月から修練受入が始まった。

#### 日韓の薬学系における博士学位ダブル・ディグリープログラムの構築

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科は、岡山大学キャンパス・アジア事業(ナノ・バイオコース短期派遣・受入 プログラム)を通して、成均館大学薬学校(大韓民国)および吉林大学医学部(中国)との間で研究・教育交流事業 を行ってきた。特に、薬学系においては、キャンパス・アジア事業の一環として、成均館大学薬学校との間で(1)

ナノ・バイオテクノロジーコース(長期・短期)の受入、(2)英語での専門科目の体験的受講(短期)、(3)合同卒業研究成果発表会、(4)大学院での模擬英語授業(およびセミナー)など、学部および大学院を通じての交流事業を継続してきた。

これらの交流実績に基づき、新たな大学院レベルでの国際連携教育について度重なる協議を行い、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科と成均館大学薬学校大学院(大韓民国)との間に、博士後期課程(薬科学専攻)の博士学位のダブル・ディグリープログラ



ムを開設(平成26年11月20日協定書署名)することとなった。本ダブル・ディグリープログラムは、所属大学から推薦された特に優秀な大学院学生に対し、通常の就学期間内に日韓両大学院の修了要件を終え、両大学での連携研究指導のもとで、ふたつの博士論文を作成し、それぞれの大学での学位審査を行い、両大学から個別の学位を授与されるプログラムである。プログラムの履修学生に対しては、派遣大学院での大学院入学試験受験料、大学院入学金、授業料が相互に免除される(年間最大2名)。

本ダブル・ディグリープログラムの構築に至る背景として、日本と韓国の薬学系教育における学部および大学院の教務システムの相互理解が不可欠であった。そのため、岡山大学薬学部では、別途学内予算(岡山大学 大学機能強化戦略経費(平成25年度、平成26年度)総額5,500,000円)を活用し、キャンパス・アジア事業での交流を補完し、先進的な大学院レベルでの国際連携教育研究プログラムを共同構築するために、上述の(2)~(4)に加



え、教員、教務担当職員および国際担当職員を交え た面談協議を成均館大学薬学校との間で5回開催し、 アウトカム指向型国際連携大学院教育プログラムで あるする本ダブル・ディグリープログラムの設立に 至った。

薬学系における博士学位のダブル・ディグリープログラムは、本邦初の国際連携教育プログラムとして位置付けることができる。平成27年度から両大学の大学院学生に対し、本プログラムへの受入・派遣要項を公表し、プログラムへの参加学生を募集している。

#### 国際連携博士学位(薬学系)ダブル・ディグリー制度:設立までの経緯

2001 年 学部間協定締結: 岡山大学薬学部 & 成均館大学薬学校(韓国) (2003年に大学間協定に格上)

2006年4月 日本:薬学教育6年制に移行

→ 2014年3月 岡山大学薬学部は薬学教育評価機構から「適合認定」を受ける 岡山大学薬学部=国立大学で最初の「適合認証」大学

2011年3月 韓国:薬学教育6年制(米国式:2+4年制)に移行(3年次からスタート)

#### 2011年11月 岡山大学キャンパス・アジア事業による学生交流プログラムのスタート (医歯薬系) ナノ・バイオコース

- ① 短期派遣プログラム(体験的英語授業聴講): 2013年、2014年、2015年
- ② 長期受入プログラム: 2013年12月-2014年2月、2014年12月-2015年2月
- ③ 短期受入プログラム:2015年2月、2016年1月(予定)



2013-2014 岡山大学 大学機能強化戦略経費事業(日韓の双方向的学生教育支援)

①研究交流シンキゾウム、②合同卒業研究発表討論会、③大学院模擬英語授業、④英語セミナー



2014年11月 国際連携博士学位(薬学系)ダブル・ディグリー プログラムに 関する協定の締結 → 2015年度から学生募集開始

2015.8 日韓合同セミナー「薬学系国際連携博士学位プログラム:構想から実現へ」(JSPS)開催

#### 国際連携博士学位(薬学系)ダブル・ディグリー制度:概要と展望

博士後期課程に同時入学 → 両大学での修了要件をクリア

→ 2つの学位論文を提出(個々の大学で学位審査) → 両大学から博士学位を授与 =非常にハードルの高い制度(挑戦しがいのある=特別な人材の発掘・養成)

年間受入:それぞれの大学院に最大2名

学生支援: 受入大学への受験料、入学金、授業料は免除(相互)

単位互換:両大学の現行の学務システムが許容する最大限の単位を認定

受講科目:修了に必要な授業は全て英語で開講し、成績評価は派遣元大学に通知

#### 大学院レベルでの国際連携教育システム構築へのマイルストーン

- ①優れた教育手法に対する相互理解(→ 教員の国際水準化)
- ②教育制度の差異の理解

(=ジョイント・ディグリーへの課題の発見と対応 → 教育制度の国際水準化)

③国際的視野で活躍できる若手研究者の養成(→ 学生の国際水準化)











学際的ジョイント・ディグリーへの展開 ・国際水準での連携学位制度の構築 ー グローバル高度実践人教育システム プログラム修了者への期待 ・教育制度を理解した国際規範の実践者 → 外国人教員(テニュア・トラック)としての採用

## (5)自然系セミナー

#### 自然科学系、生命科学系分野の院生・学生プログラム

キャンパス・アジア事業では、カリキュラムがタイトなためなかなか留学の機会がない自然科学系、生命科学系分野の院生・学生のために、別メニューを用意している。岡山大学は全学体制でキャンパス・アジア事業を推進することを基本としているため、自然科学系、生命科学系分野の院生・学生にどのようにして日中韓の交流に参加してもらうかが大きな課題であった。

自然科学系学生には、研究発表を中心としたサマーセミナー、オータムセミナー、ウィンターセミナー、ワークショップを、生命科学系(医歯薬系)にはナノ・バイオコースを企画し、理系学生がキャンパス・アジア事業に参加する機会を作っている。最先端の研究分野でも、共通善への理解を持った研究者、学生を育てることが重要である。これらのセミナーは、単なる研究発表に終わることなく、学生同士の討論の場の設定、理系向け共通善教育の導入、持続的な交流の場の形成、キャンパス・アジア学生フォーラムへの参加などを通じて、全体のプログラムとの融合を図っている。

#### 【平成23年度】

#### ◆自然科学系ワークショップ

日 時:2012年9月12日~16日 企画名:自然系サマーセミナー

場 所:岡山大学創立50周年記念館 他

企画の概要 岡山大学創立50周年記念館で9月13日・14日の両日で開催された国際シンポジウム「Bioactive Okayama2012 (BAO2012)」に参加し、口頭とポスターによって研究成果を発表した。岡山大学の農学部、薬学部を中心とした教員と学生と成均館大学の教員と学生の研究交流を深めた。また、参加者学生全員に対して2名の教員が講演し、「共通善」に対する理解、および自然系の研究の取り組みに関する理解を深めた。吉林大学訪問の際も、近隣の大学との交流があり、今回も、岡山大学以外に、岡山理科大学、岡山県立大学などとの交流の機会を設け、今後の交流の発展につながるものとなった。また、後援団体である岡山県食品新技術応用研究会、岡山県工業技術センター、NPO法人中四国アグリテックをはじめ、岡山県下の企業(20社)との交流、情報交換をおこなった。

#### 【平成24年度】-

#### ◆自然科学系のワークショップ(成均館大学校、韓国)

開催日:2013年2月14日(木)-15日(金)

学会名: 2013 BK21 Symposium on Chemical Materials Science

学会会場: Diamante Hall, Vivaldi Park, Hongcheon-gun, Gangwon-do, Korea

企画の概要および趣旨 成均館大学校化学物質科学研究科が毎年2月に開催している「BK21 Symposium」と融合するかたちで、自然科学系のワークショップを開催した。岡山大学からは大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科から10名の大学院生(博士前期課程5名、博士後期課程5名)が参画し、その内、1名が口頭発表、残りの9名がポスター発表をおこなった。岡山大学から2名の中国人留学生が参加したため、日本、韓国、中国3か国の学生間で研究成果の交流と議論をおこなった。さらに、研究会と懇談会等の活動によって学生および教員の間に友好関係が一層に深まった。

実施状況 2月13日(水)岡山空港からの韓国の仁川空港行きの便で3名の自然科学研究科の教員が引率にあたり、10名の大学院生ともに韓国の水原市(成均館大学校理工系所在地)に到着した。2月14日(木)午前中に成均館大学校が手配した送迎バスで学会会場へ移動した。午後の研究会発表では全体で9名が口頭発表(一人20分間の講演時間)をおこない、合計28名がポスター発表を40分間おこなった。その後、全員で懇談会をおこないながら、今後の学生の交流について協議した。2月15日(金)は朝食の後、自由時間を有意義に利用して、学生、教員が様々な交流活動を通じて交流した。翌日、2月16日(土)の午後に仁川空港から岡山空港に向けて帰国した。

成果 ワークショップでの発表はすべて英語でおこなった。岡山大学、成均館大学校ともに、大学院生が有機化学、無機化学、材料科学、生化学、分析化学、物理化学、地球科学など幅広い分野の研究を発表し、活発な議論をおこなった。どの学生も極めて流暢に英語での講演や発表をおこない、質問に対して首尾よく回答しており、その能力に非常に感心した。ポスター発表でも両大学の学生同士間によく共通の研究問題を見つけながら討論し、ポスターの前で活発に議論している様子を見かけた。両大学の教員もよくワークショップに参加し、極めて有意義な機会を得ることがでいたと考えている。今後、さらに学生、教職員の交流を期待することで無事に閉幕した。

#### 【平成25年度】-

### ◆自然系サマーセミナー 2013(岡山大学)

開催日:2013年9月20日(金)

学会名: Winter Seminar on Life and Material Sciences in Okayama

学会会場:岡山大学 理学部1号館 25講義室

企画概要(目的) 物理化学や理論化学を中心とした自然科学系の交流セミナーであり、中国の吉林大学から10名の大学院生と教員10名を招聘して本学で開催した。本取り組みにより、岡山大学の大学院自然科学研究科の教員と大学院生が吉林大学、の教員、大学院生と研究交流を深めた。

実施事項 9月19日(木)の夜、吉林大学理論化学研究所の10名の学生(主に博士課程前期と後期の学生、1名国家規模の先取りプロジェクトの学部生を含む)と引率の2名の教員(李輝教授と銭虎軍准教授)が岡山大学に到着した。9月20日(金)に「自然系サマーセミナー2013」を開催し、10名の吉林大学の学生と9名の岡山大学自然科学研究科の大学院生(博士課程前期および後期の大学院生)が自分の研究成果を英語で発表し、活発な議論

を行った。

吉林大学理論化学研究所の学生の発表は以下のとおり。

Hanwen Pei(裴汉文):Computer simulation study of the hydrophobicity of hairy-surface material

Yue Li(李跃): The irregular bicontinuous network (BIC) structure formed by polydisperse ABA triblock copolymer

Wei Wang(王伟):Synthesize multiblock copolymers via complex formations between  $\beta$ -cyclodextrin and adamantane groups terminated at diblock copolymer ends: A Brownian

dynamics simulation study

You-Liang Zhu (朱有亮):GALAMOST: GPU-accelerated Large-scale Molecular Simulation Toolkit

Shi-Jie Xie(谢世杰): Molecular dynamics simulation study on the glass transition in polymer brushes

Yong-Tao Ma(马永涛): Analytical Morse/Long-Rang Model Potential and Predicted Infrared and Microwave Spectra for Symmetry Top Impurity with an Atom: A Case Study for CH3F-He

Jing-Min Liu(刘静敏):Analytic Morse/Long-Range Potential Energy Surface and Predicted Vibrational Frequency Shift for OCS-(H2)N Clusters

Dan Hou(侯丹): Calculated Rovibrational Energy Levels and Predicted Infrared Spectrum for C2H2-paraH2 and C2H2-orthoH2 van der Waales Complex

Yu Zhai(翟羽):Theoretical Study of HCN -H2 van der Waals Complex

Xiao-Long Zhang(张晓龙):Theoretical Study of Weakly Bound CO-(pH2)2 Trimers

岡山大学自然科学研究科の学生の発表は以下のとおり。

Xuexia He(何学侠):Interface control in [7]phenacene single crystal field-effect transistor

Eri Uesugi (上杉英里):Layer number dependence of capacitance between ionic liquid and few-layer grapheme

Lu Zheng(郑璐):Superconductivity in ammoniated metal-intercalated FeSe systems

Yasuhiro Okuda(奥田靖浩):Theoretical Studies on Palladium-Catalyzed Cyanoesterification

Kiharu Abe(阿部紀遙): Solubility of hydrophobic molecules at the liquid-vapor interfaces of water and simple liquids

Kazuhiro Himoto(樋本和大):Computational and theoretical study on water under ultra-high pressure

T. Nakamura(中村竜也):Stability of the proton-disordered ice

Hisayuki Nagahiro(永廣久幸):Time-resolved spectroscopy of H2F+ and H2Cl+ by using an infrared CW-OPO laser

Wang Chen(陳望):Global analysis of the Ballik-Ramsay band and the Phillips band of C2

9月20日(金)の昼食時にランチョンセミナーを行い、岡山大学の白先生かがCAMPUS ASIAについて中国語で説明を行った。翌、9月21日(土)には、10名の学生と2名の教員(李輝教授と銭虎軍准教授)とともに、岡山市及び付近区域の社会観察を行い、岡山の分化・環境についてより深く理解していただいた。9月22日(日)の午前の便で全員が帰国された。

成果 セミナーでの発表はすべて英語でおこなった。岡山大学、吉林大学の大学院生および教員全員が研究を口頭発表し、活発な議論が行われた。セミナーだけでなく懇親会およびExcursionにおいても大いに交流を深めることができた。

**今後の展開** 吉林大学からの大学院生は全員初めて来日だったため、日本の大学および日本の全体のことに初めて触れ、非常に貴重な経験になったことだろう。この交流を契機として、将来に大学院生が日本に留学することにつながる可能性も十分ある。

**その他** 最後に、吉林大学の皆様から岡山大学に今回のサマーセミナーについて感謝の言葉を伝えたいとの謝意があった。

#### ◆自然科学系のオータムセミナー(岡山大学)

開催日:2013年11月30日(土)-12月1日(日)

学会名: The 1st Japan-Korea Joint Symposium and Autumn Seminar on Advanced Chemistry

学会会場:岡山大学 コラボレーションセンター コラボレーション室

企画の概要および趣旨 化学および材料科学に関連する研究分野を中心とした自然科学系のセミナーであり、韓国の成均館大学校から10名の大学院生と4名の教員を招聘して本学で開催する。本セミナーの開催を契機として、岡山大学大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科を中心とした教員と大学院生が成均館大学校の教員、学生と研究交流を深め、さらなる教育研究の推進を図る。

実施状況 11月29日(金)の午後9時に岡山空港に到着した成均館大学校の教員および大学院生を本学教員(西原)が引率して、送迎バスでホテル(教員)、岡山大学学内宿泊施設(大学院生)へそれぞれ移動した。

翌日11月30日(土)9:30からセミナーを開催し、Boo教授による成均館大学校の紹介および西原教授による岡山大学の紹介の後、午前中の口頭発表では各大学からそれぞれ教員2名が講演をおこない、昼食を挟んで、各大学からそれぞれ大学院生2名がショートトークをおこなった。14:30から1時間、大学院生によるポスター発表、15:30から、各大学からそれぞれ教員2名が口頭発表をおこなった。18:00から懇親会をおこないながら、今後の学生の交流について協議した。翌12月1日には、17件のポスター発表に関するshort oral presentation(5分ずつの口頭発表)を全ての大学院生がおこない、その後、再度11:00から1時間、大学院生によるポスター発表をおこなった。12:00に閉会式をおこない、成功裏に終了した。

昼食後は、Excursionとして後楽園へ案内した。その後、大学院生は、岡山城および市内散策、教員4名と西原は倉敷美観地区へ行った。

全ての参加者は12月2日(月)の朝に岡山空港からソウルへ帰国した。

成果 本セミナーにおける発表はすべて英語でおこなった。岡山大学、成均館大学校ともに、大学院生、博士研究員および教員が化学に関する最新の研究を発表し、活発な議論がおこなわれた。大学院生は、各大学から2名が口頭発表を、残りの学生(岡山大学から9名、成均館大学校から8名)はポスター形式で発表をおこなったが、ポスター発表者にも5分間のショートトークの時間が設けられ、発表者全員が必ず壇上に話をする機会があった。大学院生の英語の流暢さの点では、英語教育に注力している成均館大学校からの大学院生らしく、研究内容の素晴らしさに加えて英語の全体的に流暢であった。セミナーにおける議論も有意義であったが、招聘された教員および大学院生達は、懇親会およびExcursionにおいても大いに親睦を深めた。

**今後の展開、その他** 本セミナーのような相互交流を目的としたセミナーを次回は、成均館大学校にて 2015年2 月に開催する予定である。

### ◆自然科学系 キャンパス・アジア ウィンターセミナー(岡山大学、日本)

実施体制としては、2011年岡山大学は文部科学省「平成23年度大学の世界展開力強化事業(キャンパス・アジア)」に申請し、採択された。交流プログラムの一環として、下記のように、2014年1月10日から11日までの間、吉林大学伍麟教授を招へいしSeminar on Natural Scienceを開催した。

開催日:2014年1月10日(金)-11日(土) 学会名:Seminar on Natural Science

会 場:岡山大学工学部5号館 第17講義室

実施状況 交流プログラムとして、岡山大学の学生を対象に吉林大学伍麟教授(1月10日)が [What make warning information more trusted: affect heuristic as a function of trust in risk communication]という題目で講演し、吉林大学の紹介と岡山大学との交流を進行した。交流活動は岡山大学工学部5号館第17講義室で1月10日と11日の二日間で行い、岡山大学の自然科学研究科の教員と学生は国際セミナー「Seminar on Natural Science」への参加を通じて、吉林大学と伍麟教授の研究内容への理解を深めた。

吉林大学伍麟教授は1月9日(木)に長春空港から上海浦東空港を経由して岡山空港行きの便で夕方ごろ岡山に到着した。岡山大学が手配した送迎車でホテルへ移動した。





翌日、1月10日(金)朝に伍麟教授は岡山大学に来られて、午後に岡山大学の学生が会場(工学部5号館 第17講義室)に集まり、13時に工学部の呉景龍教授が講演会の挨拶をおこなった。その後、吉林大学の伍麟教授は [What make warning information more trusted: affect heuristic as a function of trust in risk communication] に関する課題の特別講演を行った。14時半から岡山大学学生と教員は伍麟教授と学術討論及び交流を行い、夕方に懇親会も企画された。

1月11日(土)に吉林大学の伍麟教授は岡山大学の生体計測工学研究室を見学して岡山大学の呉景龍教授と大学院生と研究検討を行った。1月12日(日)早朝に岡山空港から上海浦東空港を経由して長春空港に向けて帰国した。

成果 本取り組みにより、岡山大学の大学院自然科学研究科を中心とした教員と学生が中国吉林大学の教授と研究交流を深めた。両大学の教員もよくキャンパス・アジア ウィンターセミナーに参加し、極めて有意義な機会を得ることができたと考えている。

### ◆自然科学系のウィンターセミナー(岡山大学)

開催日:2014年1月23日(木)-1月24日(金)

学会名: Winter Seminar on Life and Material Sciences in Okayama

学会会場:岡山大学 創立50周年記念館 大会議室

企画概要(目的) 生命科学と材料科学を中心とした自然科学系の交流セミナーであり、中国の吉林大学、韓国の成均館大学校それぞれから7名の大学院生と教員2名を招聘して本学で開催する。本取り組みにより、岡山大学の大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科を中心とした教員と大学院生が吉林大学、成均館大学校の教員、大学院生と研究交流を深める。

実施事項 1月22日(水)夕刻に到着した吉林大学および成均館大学校の教員および大学院生を本学教員(高口、大槻)が引率して、送迎バスでホテルへ移動した。

翌日1月23日(木)9:30からセミナーを開催し、西原教授による岡山大学の紹介の後、午前中の口頭発表では教員2名が発表をおこない、昼食を挟んで大学院生によるポスター発表、14:25からは大学院生2名、ポスドク1名、教員4名が口頭発表をおこなった。その後、18時から懇親会をおこないながら、今後の大学院生の交流について協議した。1月24日には、25件のポスター発表に関するshort oral presentation (3分ずつの口頭発表)を行い、その後、教員2名が口頭発表を行った。岡山大学からは大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科から11名の大学院生が参画し、その内、1名が口頭発表、残りの10名がポスター発表をおこなった。

セミナー後は、来訪者の一部に軽く研究室見学をしてもらったのち、Excursionとして後楽園および岡山城へ案内した。その後、材料科学系の教員については、サテライトシンポジウムへの参加もしてもらった。

吉林大学および成均館大学校からの参加者は1月25日(土)の朝に岡山空港から帰国した。

成果 セミナーでの発表はすべて英語でおこなった。岡山大学、吉林大学、成均館大学校ともに、大学院生、ポスドクおよび教員が研究を発表し、活発な議論が行われた。大学院生は主としてポスター形式で発表を行ったが、ポスター発表者にも短い口頭発表の時間が設けられ、発表者全員が必ず壇上に話をする機会があった。大学院生の英語の流暢さの点では、それぞれレベルの違いが見られ、流暢に見事な発表をする者や、身振り手振りを交えて何とか伝えようとする者がいたが、いずれの形においても互いの研究内容は伝わっているようであり、交流の意味は大いにあったと思われる。セミナーにおける議論も有意義であったが、招聘された教員および大学院生達は懇親会およびExcursionにおいても非常に楽しんでいるようであった。

今後の展開 本セミナーをきっかけとして、さらなる人的交流・研究交流が実現することは間違いない。例えば、生命科学分野の参加者のうち1名が本学への留学を希望してお





り、研究内容を含めた調整を行っている。また、材料科学分野においても、参加研究室間の共同研究プロジェクトがスタートする運びとなり、大学院生の短期滞在を含んだ実験計画を成均館大学校(Prof. Lee)および本学(高口)を中心とした研究グループで立案中である。

その他 本セミナーでの研究発表をきっかけとして、成均館大学校(Prof. Yun)および本学(高口)を中心とした研究グループでJSPSの二国間交流事業への申請を行った。内容は、カーボンナノチューブの化学修飾とデバイス化に関するもので、成均館大学校と本学の強みを活かした国際共同研究としての発展が期待される。

#### 【平成26年度】-

## ◆自然科学系ワークショップ(吉林大学、中国)

開催日:2014年10月12日(日)-15日(水)

企画概要(目的) 吉林大学との自然科学系の交流分野を拡大するために、自然科学研究科の教員4名・学生10名を吉林大学へ派遣し、英語による研究成果の発表を通して吉林大学の教員・学生と学生による研究成果の発表を行うと同時に、大学院自然科学研究科における研究分野の紹介を行うために企画した。これにより岡山大学の自然科学研究科の全体像を吉林大学の教員・学生に広く知ってもらうこと、同時に両大学の教員および学生の間の交流を通して、相互理解を深めることを目的とする。

実施事項 岡山大学側から4名の教員(妹尾、五福、呉、唐)が学生10名(前期課程1年1名、2年2名、後期課程1年2名、2年3名、3年1名)を引率して10月12日(日)夕方に中国長春市を訪れた。翌日10月13日に、市内にある吉林大学のキャンパスにおいてインターナショナル・ワークショップを午前8時20分より午後5時30分まで開催した。最初に吉林大学の張紅星教授から歓迎の挨拶と妹尾の挨拶で始まった。妹尾は、キャンパス・アジアの経緯とともに相互に文化を共有する背景から「共通善」の重要性を説明し、ともにアジアを牽引する人材の育成を行う必要性を強調した。この中で、3名の教員は一人25分の発表を行い専門分野(物理化学、機械工学、ヒューマンインターフェース)の研究紹介を行った。学生の専門は、物理、物理化学、有機化学、機械工学、情報工学、生命工学などである。また、博士後期課程1年の2名の学生は「先進基礎科学特別コース」の履修者であり、本年度一期生である。岡山大学側は学生4名が口頭発表(各15分)、6名がポスター発表を行った。吉林大学側の発表は、教員2名およびポスドク3名がそれぞれ25分と15分の口頭発表を行い、学生10名がポスター発表による研究成果を発表して、活発な質疑応答を行って、交流と相互理解を深めた。この交流の中で、研究科の紹介には2014年自然科学研究科研究年報および研究科案内を配布して説明を行った。

10月14日は、吉林大学内の研究室見学および長春市内の見学を行って、中国の伝統と文化に触れ、共通の文化的背景である儒教の思想を通して「共通善」への理解を深めることができた。翌10月15日に、長春市を発ち、同日夜に全員が岡山へ帰国した。

成果 ワークショップでの発表はすべて英語で行った。岡山大学、吉林大学ともに、大学院生、および教員・ポスドクが研究成果を発表し、活発な議論が行われた。大学院生は主としてポスター形式で発表を行ったが、ポスター発表者にも十分な時間が設けられ、発表者全員が質疑応答をする機会があった。大学院生の英語による発表は、海外発表経験の有無が反映されていたように思うが、自分の研究内容を他に対して説明する技術を修得するためのよい機会となったことは確かである。互いの研究成果の内容は相互に理解されたようであり、交流の研究成果発表による相互理解の目的は十分に果たされたと考える。また、今回は研究科で行われている種々の研究分野を冊子により紹介することができたことも有意義であった。なお、岡山大学から派遣した教員および大学院生達は、懇親会および長春市内見学においても、相互の文化に触れるよい機会を得ることができ、全体を通して「共通善」への理解を深めることができた。

今後の展開 今回は、大学院自然科学研究科を中心とする交流であったが、すでに環境生命科学研究科との交流も行われた経緯がある。今後も研究交流の分野を徐々に拡大して、農学、環境科学、理学、工学の範囲からさらに広い異分野融合の領域を含むグリーンイノベーションやライフイノベーションと言った範囲も含めて、教員および学生の交換を促進し、相互の研究レベルを高める。将来は、医学、歯学、薬学、保健学さらには医工連携という範囲も協調して共同研究の企画や、交流の機会を促進することも考えて行きたい。このような広範な交流と相互理解を深めて行く事により「共通善」を通じてアジアの科学を牽引し発展させる人材育成の場を継続的に醸成して行く。

#### ◆自然科学系ワークショップ(成均館大学校、韓国)

開催日:2015年2月11日(水)-14日(土)

学会名: 2015 BK21 Plus Symposium on HRD Center for Creative Convergence Chemical Science & The

2nd SKKU-OU Joint Symposium on Advanced Chemistry

学会会場: Vivaldi Park, Hongcheon-gun, Gangwon-do, Korea

企画の概要および趣旨 成均館大学校化学物質科学研究科が毎年2月に開催している「BK21 Plus Symposium」と融合するかたちで、自然科学系のワークショップを開催した。岡山大学からは大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科から9名の大学院生が参画し、参加者全員が口頭発表およびポスター発表をおこなった。研究会と懇談会等の活動によって、日本と韓国の学生および教員の間に友好関係が一層に深まった。

実施状況 2月11日(水)岡山空港からの韓国の仁川空港行きの便で3名の自然科学研究科の教員が引率にあたり、9名の大学院生ともに韓国の水原市(成均館大学校理工系所在地)に到着した。2月12日(木)午前中に成均館大学校が手配した送迎バスで学会会場へ移動した。午後の研究会発表では6名の教員が口頭発表(一人30分間の講演時間)をおこない、両大学合わせて28名の学生がポスター発表を1時間おこなった。その後、全員で懇談会をおこないながら、今後の学生の交流について協議した。2月13日(金)は朝から20名の学生が口頭発表(一人10分間の講演時間)をおこなった。その後、バスで成均館大学校に移動し、研究室と大学の施設を見学した。翌日、2月14日(土)の午後に仁川空港から岡山空港に向けて帰国した。

成果 ワークショップでの発表はすべて英語でおこなった。岡山大学、成均館大学校ともに、大学院生が有機化学、無機化学、材料科学、生化学、分析化学、物理化学など幅広い分野の研究を発表し、活発な議論をおこなった。どの学生も極めて流暢に英語での講演や発表をおこない、質問に対して首尾よく回答しており、その能力に非常に感心した。ポスター発表でも両大学の学生同士間によく共通の研究問題を見つけながら討論し、ポスターの前で活発に議論している様子を見かけた。両大学の教員もよくワークショップに参加し、極めて有意義な機会を得ることができたと考えている。今後、さらに学生、教職員の交流を深めるために共同研究の開始やDouble Degreeについての協議を引き続きおこなうことに合意した。

## (6)中韓留学ワークショップ

キャンパス・アジアでは、事業の入門コースとして毎年、キャンパス・アジア研修(中韓ワークショップ)を実施している。これは、中国・韓国両国現地において一週間滞在し、協定校訪問、現地の学生との討論、企業視察、歴史遺産視察等を行うものである。これは、現地における実践型学習により岡山大学生の中国・韓国への関心を鼓舞し、またキャンパス・アジアの共通善探求の第一歩となる授業である。現地で学ぶことの意義を体感させるとともに、東アジアの言語、社会、歴史を学ぶことへの意欲や必要性を実感させる。

このプログラムは、キャンパス・アジア共通教科書を利用した事前学習、東アジアの共通の価値観や文化、現代 社会の課題についての議論を重ねた上で現地研修を実施し、現地ではグループディスカッションや発表を含む ワークショップを行う。

このプログラムに参加した学生の約8割は、引き続きキャンパス・アジアプログラムに参加している。短期語学研修、サマースクール、を経て、さらに選抜された学生が長期留学を行う。このように、導入教育としては効果の高いプログラムとなっている。

2015年は、「日中韓オータムスクール」としてプログラムを発展させ、協定校での特別授業を組み込み、内容をより充実させた。

#### 2015年「日中韓オータムスクール」のプログラム

- 8月 事前学習会
- 8/24 岡山→長春、学生交流
- 8/25 吉林大学公共外交学院での講義「社会転換、発展に伴う光と影」 Fieldwork - 東北民族民俗博物館
- 8/26 Fieldwork-吉林省農安県農村社会調査(農村社会転換)
- 8/27 Student group work、Group presentation、学生交流
- 8/28 赴日学校見学(博士クラス授業見学)、長春事務所訪問、 香港黄淳梁詠春学会訪問、長春映画工場見学
- 8/29 長春→ソウル、学生交流
- 8/30 Fieldwork-民族村(文化の継承)
- 8/31 Fieldwork-産業視察(医療関連施設の訪問-外国人患者への配慮)
- 9 / 1 成均館大学での講義、 Student group work、Group presentation
- 9/2 ソウル戦争博物館、帰国
- 9/6 荒木勝副学長・理事 「事後学習 若者の心の中の共通善」



## (7)サマースクール

サマースクールは毎年8月夏休み中に開催し、岡山大学、吉林大学、成均館大学校の日中韓三大学の学生および一部の院生が参加した。サマースクールでは集中講義のほか、課外学習および社会見学を主な内容にし、日中韓三大学等の教員14名が専門的知識に基づいて講義内容を構築した。

サマースクールでは、集中講義内容として哲学、経済学、文学、史学、考古学など専門的分野を網羅し、日中韓三国間の共通的課題を取り上げた。例えば、哲学の分野では儒教思想をその一つとして取り上げ、それが日中韓三国の現代社会にどのような影響を与えていたか、事例の分析を通して、文化および伝統思想の形成過程および共通性について検討した。経済学の分野では日中韓三国間の経済協力という点に焦点を当てて、経済的協力関係の構築と発展は政治的良好関係の形成につながるものと述べ、教員よりテーマをあたえ、日中韓三国学生が共同で討論を行った。また、歴史分野では東アジアの近代史、日中韓三国の関係史という視点から歴史事例に対する分析を行い、共通的な歴史認識の在り方について考察した。一方文学では、東アジアという漢字文化圏における三国間の文化的交流の歴史を遡りつつ、現代日中韓三国間の文化的共通性について検討し、異文化社会の共存の重要性について共に考え、相互理解や認識を深めた。日中韓三国間の文化的な共通性、経済的な共通

利益、歴史的な共通認識を探求した。

講義は日中韓三大学の教員が中心となり、前半の1週間は日本語、数日のフィールドワークを挟んで後半の1週間は英語で行われる。学生は、の本語、英語コースのどちらか、または両方を選択できる。2016年からは、これらの講座が全て英語により実施される。

講義は、たとえば経済分野では講義に続き、 三菱自動車工場などの水島臨海工業地帯を見 学し、環境汚染問題の発生と対策について考察



した。また歴史授業では日中韓三国の歴史教育現状について、日中韓三大学の教員から基調報告を受け、学生による質疑や討論会が行われ、共通的歴史認識の在り方について意見交換をした。また牛窓町を訪ねてかつて日韓両国の間で行われた「朝鮮通信使」について学び、閑谷学校や曹源寺では「論語」学習を通じて、日中韓三国間の文化交流の重要性について理解を深め、伝統的思想の共通性について探求した。

岡山大学関係部局の間の協力体制の構築は、共通善教育、とくにサマースクールを円滑に行うために不可欠である。2012年3月岡山大学では日中韓三大学が共同で「共通善教育研究会」を立ち上げた。サマースクールで講義を担当した教員のほとんどはこの研究会のメンバーであり、教育および研究成果はサマースクールの講義内容に充実に反映されている。

サマースクールは東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材を育成するための教育の一環である。日中韓三国間の伝統思想や漢字文化における共通性、経済における共通利益、歴史関係における共通認識という「共通善」教育趣旨が貫かれた。また日中韓三大学の学生が共に学び、共通課題について共同で議論することができた。そして三大学の学生が日中韓英の多言語による交流は相互に異文化に対する理解を深めることも成果の一つであろう。

表3-4 2015年度岡山大学キャンパス・アジアサマースクール Okayama University CAMPUS Asia Summer school 2015

日時	時間	gina Oniversity CAMPOS Asia Summer school 実施内容	場所	担当
	8:40~10:10	開講式	C25教室	元
2015/8/10(月) Aug. 10 (Mon)	10:25~11:55	総論「共通善」とはなにか	//	金泰昌
	12:45~14:15	「キャンパス・アジア教育現場から見る 日中韓三国の大学文化交流」	//	金東建
	14:30~16:00	討論「東アジアの共通性」を考えて	//	白榮勛
	8:40~10:10	日本経済の現状と東アジア	//	
2015/8/11(火)	10:25~11:55	日中・日韓の経済協力と課題	//	金美徳
Aug. 11 (Tue)	12:45~14:15	討論	//	
	8:40~10:10	**************************************	//	冲海海
2015/8/12(水)	10:25~11:55	東アジアにおける「共通利益」と国際社会 	//	沈海濤
Aug. 12 (Wed)	12:45~14:15	口中辞二国の文化充法と名文化社会	//	<b>江</b> 英
	14:30~16:00	日中韓三国の文化交流と多文化社会 	//	辺英浩
	8:40~10:10	東アジア漢字文化圏における共通性の展開	//	遊佐 徹(土屋 聡)
2015/8/13(木)	10:25~11:55	雪から読み解く東アジアの環境	//	遠山和大
Aug. 13 (Thu)	12:45~14:15	東アジアの近現代史	//	土屋 洋
	14:30~16:00	東アジアにおける「儒教」と「論語」	//	孫 路易
		英語プログラム参加学生来日		
2015/8/14(金)		倉敷美観地区(町屋トラスト))	美観地区	事務局 中村泰典理事
2015/8/15(土)		犬島(アートプロジェクト「精錬所」、 ビーチレクリエーション、交流会)	犬島	事務局
2015/8/16(日)		犬島→閑谷学校(講堂学習、スポーツ大会)	閑谷学校	事務局
2015/8/17(月)		閑谷学校→曹源寺(寺見学、座禅、講和)	曹源寺	事務局
		日本語の部学生帰国		事務局
2015/8/18(火)	8:40~10:10	Patterns of Global Migration with a Focus on the East Asian Region	C25教室	Prof. Naomi Hosoda
Aug. 18 (Tue)	10:25~11:55	Japanese Immigration Policy and the World	//	Prof. Naomi Hosoda
	12:45~14:15	Legal Systems of East Asian Countries	//	Prof. Kungang Li
2015/8/19(水) Aug. 19 (Wed)	8:40~10:10	Intercultural Communications in the East Asian Region: Policy Implications for Immigration within East Asia	//	Prof. Naomi Hosoda
	10:25~11:55	Japanese Foreign Policy toward East Asian countries	"	Prof. Kimiko Osawa
	12:45~14:15	Transnational Women's Movement in East Asia	//	Prof. Kimiko Osawa
	14:30~16:00	Common Good or Common Interest?	//	Prof. Dong Kwang Kim
2015/8/20(木) Aug. 20 (Thu)	8:40~10:10	Who are Japanese?	//	Prof. Kimiko Osawa
	10:25~11:55	Asian Values Pro and Contra: The Legacies of Lee Kwan Yew and Kim Dae Jung	//	Prof. Dong Kwang Kim
	12:45~14:15	The Commons and Differences of East Asian Laws: From the Perspectives of Constitution Law, Company law and Labor Law	//	Prof. Kungang Li
2015/8/21(金)	8:40~10:10	The Future East Asian Laws	//	Prof. Kungang Li
Aug. 21 (Fri)	10:25~11:55	The Imaginary of the East Asian Community	//	Prof. Dong Kwang Kim
2015/8/22(土) Aug. 22 (Sat)		英語の部学生帰国		事務局

## 表3-5 教養教育科目 主題科目(人間と社会) 共通善:東アジアの地域統合 サマースクールのプログラム

Numbering code	ULAZ0LAFZ201N
Course title	The Common Good: East Asian Regional Integration
Semester / Quarter	Special lecture
Number of credits	2 credits (90 min.×15)
Day	Summer School
Period	1
Target students	Students enrolled for the 2015 CAMPUS Asia summer school program
Required / elective	Compulsory elective
Instructor	Kim Dong Kwang et al.
Affiliation	Center for Global Partnerships and Education
Contact information	dkkim@okayama-u.ac.jp
Office hours	By appointment
Course description	In this course taught by a team of academics from China, Japan, and Korea, we will examine some of the key issues that stand in the way to integrating the East Asian countries into a tightly-knitted community. Despite their differences in the issues of identity, colonial settlement, and contemporary politics involving nation states and territories, East Asian countries are cooperating — better in the economic than in the political areas although cooperation in the latter is also taking place. But the economic and political reality of the contemporary world is calling for a formation of a more systematic community in the region. Guided by Charles Taylor's notion of "social imaginary," a common understanding that makes possible common practices and a widely shared sense of legitimacy among human beings, this course is an exercise in imagining an East Asian Community that may enjoy a widely shared sense of legitimacy among the peoples of the countries in the East Asian region.
Goals	<ol> <li>Upon successful completion of this course, students are expected to be able to:</li> <li>Identify some of the conceptual, historical, legal, political and technical issues that stand in the way to integrating East Asian countries into a regional community.</li> <li>Understand the significance of an integrated East Asian Community for a peaceful and prosperous coexistence of the countries in the East Asian region.</li> <li>Imagine in their own ways an East Asian Community which is desirable and durable.</li> </ol>
Lesson plans	<ul> <li>01 Extracurricular Activity (Visit to Kurashiki Bikan Historical Quarter &amp; Inujima Island)</li> <li>02 Extracurricular Activity (Visit to Shizutani School)</li> <li>03 Extracurricular Activity (Visit to Sogen-ji Temple)</li> <li>04 Why do People Migrate?: Patterns of Global Migration (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>05 Can People Migrate?: Government Policies and Politics (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>06 Legal Systems of East Asian Countries (Prof. Kungang Li)</li> <li>07 Can We Live Together?: Towards Peaceful Co-existence (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>08 Japanese Foreign Policy toward East Asian countries (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>09 Transnational Women's Movement in East Asia (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>10 Common Good or Common Interest? (Prof. Dong Kwang Kim)</li> <li>11 Who are Japanese? (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>12 Asian Values: Pro and Contra (Prof. Dong Kwang Kim)</li> <li>13 The Commons and Differences of East Asian Laws: From the Perspectives of Constitution Law, Company law and Labor Law (Prof. Kungang Li)</li> <li>14 The Future East Asian Laws (Prof. Kungang Li)</li> <li>15 The Imaginary of the East Asian Community (Prof. Dong Kwang Kim)</li> </ul>
Information regarding preparation, review and related subjects	To read texts and other handouts in advance for each session.
Teaching style, equipment used	Lecture, discussion

Textbook	(Prof. Hosoda) Stephen Castles, Hein de Haas and Mark J. Miller. 2013. The Age of Migration, 5th Edition. Russell King, Richard Black, Michael Collyer, Anthony Fielding, and Ronald Skeldon. 2010. The Atlas of Human Migration: Global Patterns of People on the Move. (Prof. Li) Selections from Introduction to Law and Legal Systems, by Frank August Schubert, Wadsworths, 2010 Selections from Poly-Ling Tan (ed.), Asian Legal Systems, Butterworths, 1997 Zhongqiu Zhang, From Chinese Legal System to East Asian Laws Legal Tradition and Changes of East Asia and the Development Trend, in Symposium of International Academic Research on Chinese Legal System (p118-125); (Prof. Kim) Kim, Dae Jung (1994). Is Culture Destiny: The Myth of Asia's Anti-Democratic Values (A Response to Lee Kuan Yew). Foreign Affairs, 73(6), 189-194. Selections from Aristotle's Politics and Nichomachean Ethics. Selections from the Proceedings of a Conference "'Asian Values' and Democracy in Asia" held on 28 March 1997 at Hamamatsu, Shizuoka, Japan as Part of the First Shizuoka Asia-Pacific Forum: The Future of the Asia-Pacific Region. Taylor, Charles (2004). What is a "social imaginary"? In Modern Social Imaginary (pp. 23-30). Duke University. Durham, NC/London: Duke University Press. Zakaria, Fareed (1994). Culture Is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew. Foreign Affairs, 73(2), 109-126.
Reference books	CAMPUS Asia textbooks and handouts to be distributed in advance or in classroom.
Academic assessment	Attendance (40%), Classroom Participation (20%), A Short Paper (40%)
Relation to research activity	The university teachers from three countries of Japan, China, and Korea will give lectures based on the achievement of their educational practices and research.
Prerequisites	None, but a prior reading of the texts below would be helpful.
Comments / Caution on course	<ul> <li>* Diploma subject</li> <li>1. Dates: Two weeks in August 2015 Number of credits: Four Details will be given during the month of June.</li> <li>2. No requirement for this course is imposed. Note that taking only one course is not permitted, students must register for both No.1 and 2, and participate in the full two-week course.</li> </ul>

#### 表3-6 教養教育科目 主題科目(人間と社会) 共通善教育:日中韓三国関係と社会 |

ナンバリングコード	ULAZ0LAFZ200N
科目区分	主題科目(人間と社会)
授業科目	共通善教育:日中韓三国関係と社会
授業科目(英語)	The Education of Common-Wealth —Three countries relationship and Society of Japan, China and Korea I
学期	前期集中
単位	2単位
対象学生	全
必修・選択の別	選択必修
担当教員	白 榮勛 他
所属	グローバル・バートナーズ
オフィスアワー	基本的に教室で対応する。
授業の概要	2015年8月に開催するサマースクール集中講義科目である。サマースクールは岡山大学グローバル・バートナーズのキャンパス・アジア事務局が主催し、主に岡山大学、吉林大学(中国)、成均館大学校(韓国)の三大学の学生・院生が参加する。この講義は上記三大学の参加生を対象に行う。科目は日中韓三大学の教員が担当する。開催期間は計2週間であるが、第一週目は[I]を学び、日本語で講義を行う。第二週目は[I]について学び、英語で講義を行う。講義回数は[I]とIIがそれぞれ15回(1回90分)、計30回であり、計4単位となる。

学習目標	岡山大学、吉林大学・成均館大学校の三大学が、相互に留学生の派遣と受け入れ、そして共通科目の 開講などによって、東アジアにおける国際的人材を育成することを目標とする。この集中講義はその一環 であり、日中韓三国の学生や院生の間で交流を通して、異文化社会に対する相互理解を深めることが できる。また多分野の専門的知識を学ぶことによって幅広い知識を身につけ、国際的な視野にたって、 過去・現在・未来への多面的に物事を考える力を培う。	
授業計画	1回 総論「共通善」とはにか 2回 キャンパス・アジア教育現場からみる日中韓の文化交流(仮) 3回 討論「東アジアの共通性を考えて」 4回 日本経済の現状と東アジア 5回 日中韓の経済協力と課題 6回 雪から読み解く東アジアの環境 7回 東アジアにおける「共通利益」と国際社会 その1 8回 東アジアにおける「共通利益」と国際社会 その2 9回 日中韓三国の文化交流と多文化社会 その1 10回 日中韓三国の文化交流と多文化社会 その2 11回 東アジア漢字文化圏における共通性の展開 12回 東アジアの近現代史 13回 東アジアにおける「儒教」と「論語」 14回~15回 課外授業、総括	
授業時間外の学習 (予習・復習)方法	授業時に指示する	
授業内容の 前提となる知識	なし	
授業形態•使用機器	講義が中心であるが、講義レジュメと文献資料を配布し、PowerPointを使用することもある。	
教科書	授業時に指示する	
参考書等	授業時に指示する	
成績評価	基本的には出席、発表、レポートなどに基づいて総合的に判断する。判断の基準率は授業への出席40%、発表20%、レポート40%である。レポートの課題は開講時に指示する。	
備考/履修上の注意	①開講期間:     [I]は、2015年8月9日~8月17日(日本語で講義を行う、2単位)。     [II]は、2015年8月14日~8月21日(英語で講義を行う、2単位)であるが、詳細は当該科目[II]のシラバスを読んでいただきたい。 ②受講の条件は特に設けていないが、[I](日本語)と[II](英語)とを片方だけを履修してもいいし、両方の履修も可能(その場合4単位授与)である。 ③履修登録を済ませた後、キャンパス・アジア事務局で指定の受講手続きを行ってください(キャンパス・アジア事務局の電話番号:086-251-8532)。	





## (8)リージョナル・カンファレンス

「リージョナル・カンファレンス」、「まちなかキャンパス」は、アクティブラーニング型のグローバル教養科目で、地域で実践的に学ぶプログラムである。日中韓が抱える共通の社会的課題として、発展と経済格差、少子高齢化、地域活性化、環境保護などの問題がある。こうした問題を現地視察で学び、さらに地域住民や専門家を交えて3カ国の学生が討論する。また、地域の歴史、文化に触れたり、3国に関連した遺跡を訪ねて議論するなど、様々なメニューが用意されている。

リージョナル・カンファレンスでは、現地視察に引き続いて、地域住民や専門家を交えたセミナーを現地で開催する。ここでは、多言語セミナー(「(9)多言語セミナー」の項参照)形式で、日本語、英語、中国語、韓国語のチー



ムを作り議論し、ポスター発表して相互に批評する。例えば、豊島で産業廃棄物不法投棄、環境保全の議論をした際は、日本語チームは豊島住民の健康問題について、英語チームはグローバルな環境政策について、中国語チームは国家の責任について、韓国語のチームは住民運動の役割についてプレゼンした。このように、同じテーマを議論しても言語により切り口に特徴が出るところがこのセミナーの魅力といえる。

こうした身近な社会問題を、3国の学生が真

剣に議論して共同で解決策を導き出そうとする手法は、共通善教育をどのように導入するか検討する中でたどり着いたひとつの結論である。つまり、知識として教え込むのではなく、学生を地域の現場において、地域体験、地域交流と相互議論を通じて自ら結論を導き出せるように指導する手法である。様々な結論に至りながらも、最終的には共通善という大きな器の中に議論を集約させることで、東アジア全般の共通利益を視野に入れた、異文化間で協業できる人材の育成を効果的に推進できた。





#### これまで実施したリージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス等

2012.10.27~28 リージョナル・カンファレンスin高梁「地域復興:経済と人材育成」

2013.6.14&6.22 リージョナル・カンファレンスin牛窓

「-瀬戸内海・牛窓における日中韓三国間の経済・文化交流-」

2013.10.25~26 リージョナル・カンファレンスin津山

「『東洋』と『西洋』の文化交流・融合」

2014.6.27~28 リージョナル・カンファレンス I

「野崎武左衛門と近代日本の塩業」を学ぶ」

2014.11.4 & 11.8 リージョナル・カンファレンスin矢掛

「岡山地域の歴史文化との触れ合い」

2015.6.19~20 リージョナル・カンファレンスin高梁

「現代社会に伝わる山田方谷の思想と業績|

2015.11.13~14 リージョナル・カンファレンスin牛窓

「瀬戸内海・牛窓における日中韓三国間の経済・文化交流」

2012.11.20 まちなかキャンパス I (後楽館高校訪問)

2012.12.13 まちなかキャンパスII「環境再生の視点から地域開発を学ぶ|

2013.1.18 まちなかキャンパスⅢ「幸せな発展とは ~高度経済成長が伝統的な暮らしに与えた影響~」

2014.5.23~24 まちなかキャンパスin水島・豊島

「高度経済成長の光と影 生産から廃棄、公害問題の現場に学ぶ」

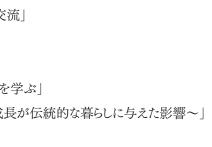
2015.7.4~5 まちなかキャンパス

「"瀬戸内海の産業から考える地域と環境~水島・豊島の現場をたずねる~"」

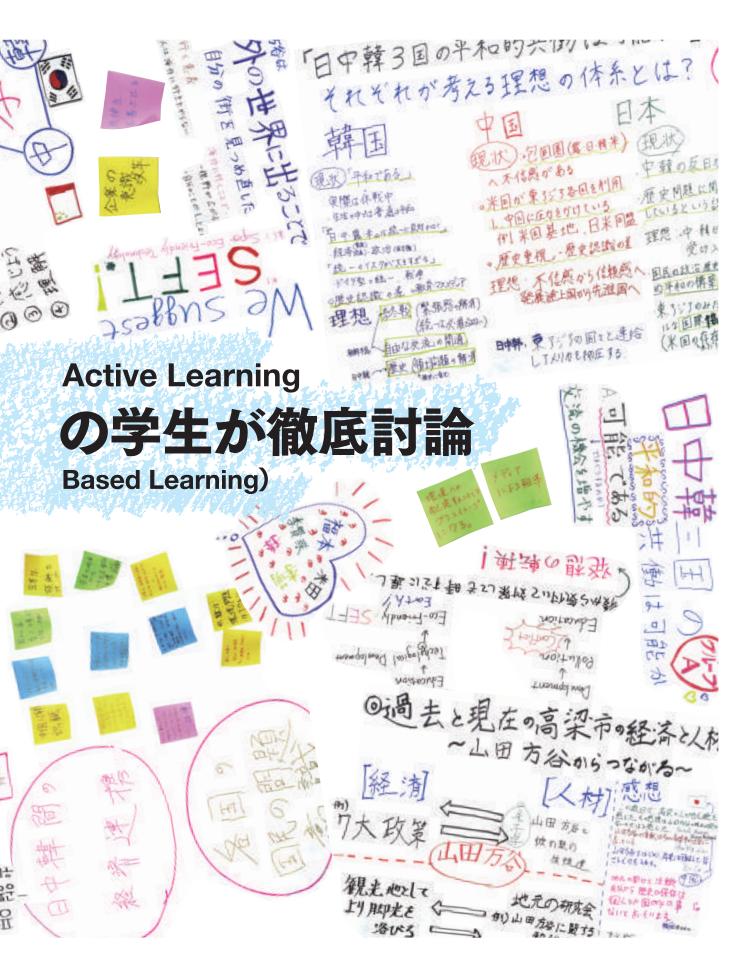
2014.1.25 みずしまフィールドワーク「環境学習で、人とまちと未来をつくる」











## (9)多言語セミナー

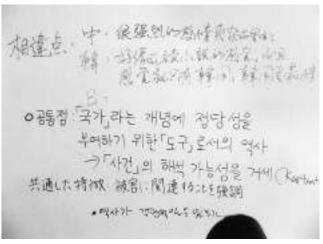
この科目は、キャンパス・アジアの留学生とともに、日中韓の言語を用いた多言語形式で行う授業である。現代における日中韓の社会文化や医療、科学技術に関するテーマについてディスカッションやプレゼンテーションを行う。日中韓に共通の社会問題や、日中韓が共有する国際的な問題を取り上げ、相互理解を深めると同時にどのような解決が可能かについて柔軟に思考し議論する力を身につけることが達成目標である。



#### 多言語で講義・討論

この講義の特徴は、ひとつの授業でたくさんの言語を併用することである。授業のほとんどの参加者は、少なくとも3ヶ国語が使える。グループディスカッションでは、英語、日本語、中国語、韓国語のグループに分かれ、それぞれの言語で徹底討論する。





各グループ (例えば韓国語)には、韓国語を母国語とするファシリテーター役の学生、韓国に長期留学した日本人学生、韓国語が話せる中国人学生、韓国語を学び始めて留学を希望する日本人学生、などが参加する。言語の違いによって、議論の内容や結論に様々な違いが見られる。その部分を改めて全員で議論して、最後に教員のコメントで終わる。

#### 柔軟な思考力は多言語ベースで

この授業は、とくにキャンパス・アジアのプログラムで長期・短期留学を行った学生に、共通善の概念を実社会で応用し実践することについて考える機会を持たせることを念頭においた授業である(キャンパス・アジアに関連するプログラムにこれまで参加したことのない学生ももちろん参加できる)。

また国際舞台では、様々な考えとバックグランドを 持つ世界の人々が、その場その場の状況に適応して 様々な言語を駆使して議論をすることがよくある。この 授業では、そうした場面で活発に発言し、議論をリー ドできるような人材の育成を目指している。

## 表3-7 教養教育科目 主題科目(人間と社会) 共通善教育多言語セミナ―2

ナンバリングコード	LAAA3LAZZ400N	
授業科目	共通善教育多言語セミナー 2	
授業科目(英語)	Multilingual Seminar on the Common Good in East Asia	
学期	後期	
	2単位	
	木曜	
 時限	2時限	
対象学生	Bグループ(文・法・経・工・MP)	
担当教員	小野真由美	
 	グローバル・パートナーズ	
授業の概要	本科目は、キャンパス・アジアの留学生とともに、日中韓の言語を用いた多言語セミナーを形式とし、現代における日中韓の社会文化や医療、科学技術に関するテーマについてディスカッションやプレゼンテーションを行う協働学習を目的としている。	
学習目標	日中韓に共通の社会問題や、日中韓が共有する国際的な問題を取り上げ、相互理解を深めると同時に どのような解決が可能かについて柔軟に思考し議論する力を身に付ける。特に、キャンパス・アジアのプログラムで長期・短期留学を行った学生にとって、東アジアの共通善の探究から実現に向けて、共通善の概念を実社会で応用し実践することについて考える機会提供と位置付ける。但し、キャンパス・アジアに関連するプログラムにこれまで参加したことのない学生も受講の対象とする。	
授業計画	法学、経済学、医歯薬学、文学、歴史学、自然科学、死生学等からみた東アジアの共通善に関わる現代的話題に関する知識の習得と日中韓の言語を交えた議論 イントロダクション 東アジアの共通善 グローバリゼーションは東アジアに幸福をもたらすか? 東アジアの言語に関する議論 東アジアの歴史問題 東アジアの歴史問題 東アジアの法学 STAP細胞問題などにかかる自然科学教育の重要性 医学、保健、死生学からみた東アジアの共通善 グループワーク 最終プレゼンテーション	
授業時間外の学習 (予習・復習)方法	授業で扱うテーマに関連する文献・資料を参照し、自分の意見が述べられるように準備しておく。	
授業内容の 前提となる知識	特になし	
授業形態•使用機器	配付資料とスライド	
教科書	キャンパス・アジア共通教科書シリーズ プロローグ 東アジアの共通善を実現する、深い教養に裏打ちされた中核的人材育成 キャンパス・アジア共通教科書シリーズ2 東アジアの経済協力と共通利益 キャンパス・アジア共通教科書シリーズ3 東アジアの共通善を目指して	
参考書等	参考となる文献・資料は授業の中で紹介する	
成績評価	授業参加 30点 プレゼンテーション 30点 レポート 40点	

#### 授業の例

#### ■教材•教科書

日本語文献(田口先生著書抜粋「グローバリゼーションは東 アジアに幸福をもたらすか?」)

中国語文献(許さん担当)、韓国語文献(李さん担当) 配布物:ハンドアウト

#### ■授業内容

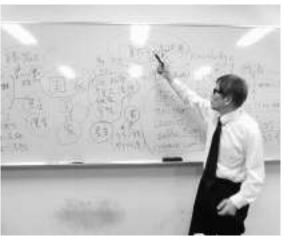
(時間軸に沿って、教授内容・方法・学生の反応などを記録)

- 1. 田口先生レクチャー(45分)\*スライド26枚
- 2. グループディスカッション(30分)
  - 1) 東アジアのグローバリゼーションの実例を挙げる。それが、 東アジアの社会、経済協力にいかに貢献しているのか、 または障害になっているかを整理する。
  - 2) 東アジアの社会、経済協力はどうあるべきか論じる。
  - 3)各チーム、5~7分でプレゼン。グループディスカッションでは、言語(日・中、日・韓)を場合によって使い分けつつ、議論をすすめる。東アジアのグローバリゼーションの実例を挙げて論じる。
- 3. まとめ・田口先生のコメント(15分)

#### ■宿題

・次週の授業に関する補助資料を学生の担当者が作成し、週明けに配布。全員文献を読んで授業にくる。









## (10)シェアハウス

シェアハウスの目的は、日中韓の学生たちが生活を共にし、お互いの生活習慣や文化、価値観を相互に理解することを基礎に、本音で議論しあえる人間関係を築くことである。入居者同士の信頼関係は、生活を共にすることにより、少しずつ形成される。日常の小さなルール(食事、清掃、ゴミ出し、節電、町内会)を自分たちで決めていくことから始まり、相互理解の土壌を作っていく。



キャンパス・アジアのシェアハウスは、男子寮と女子寮がある。それぞれ、1階が共通スペースで、2階に個室がある。キッチン、バス、トイレは共有である。日本人がシェアハウスのレジデント・アシスタント(RA)になり、できるだけみながリビングに集まり、一緒に食事を作ったり、一緒に勉強したりする環境を作る。また、研究のサポートも行う。共同生活のルールは、事務局からは指示しない。メンバーが入れ替わるたびに、自分たちで話し合って決める。

シェアハウス魅力は、膝を突き合わせて3国

の学生が語り合えることである。はじめはレポート作成のサポートや講義の復習などから始まるが、いつのまにかなんでも話し合える仲間になっている。また、シェアハウスではときどき誕生日会、季節の行事(節分など)、パーティ(鍋パーティ、たこ焼きパーティなど)が開かれる。ややもすると留学生同士で固まってしまう留学生寮とは違い、常に多様な学生が集まることは、お互いに大きな刺激になった。





0

0

 $\oplus$ 

0

•

0 0

•

 $\oplus$ 

•

0

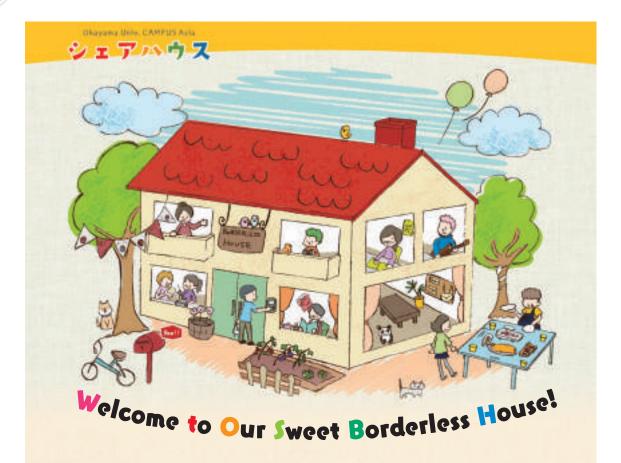
0

 $\oplus$ 

lacktriangle

0 0

0



#### HOUSE REPORT

「いつのまにかシェアハウスに住み始めてから半年が経ち、今月が最後の月になりました。シェアハウスに住み始めてから今まで大きな問題もなく生活することができました。これは、一緒に住んでいるハウスメイトであるジョンミンさんと張さんのおかげだと思います。私は、本当にハウスメイトに恵まれました。」

「キャンパスアジアのシェアハウスでの生活は、まるで家族と一緒に生活しているような感覚でした。半年間のシェアハウスでの生活で私はハウスメイトから多くのことを学びした。その中でも一番大切だと思ったことは、「初めて会う人と接するときはその人が属する集団のイメージから偏見を持ってその人を判断するのではなく、個人として接して

からその人を判断することが大事だ。」ということです。私は初めて会う人と接するとき、その人が所属する集団、たとえば国や民族などのイメージからその人がどのような人であるかを決めつけていました。しかしながら、私のハウスメイトたちは、人と関わる時、話す前から相手がどのような人なのかを決めつけてかからずに、しっかりと相手と接し、自分自身で考えてから人と接していました。彼らの



ような、人との接し方が人と関わるための正しい方法であり、互いに理解するために必要なことだと学びました。頭の中では当たり前だと分かっているけれど、行動に起こすことが難しかったことを私のハウスメイトは、シェアハウスでの生活を通して教えてくれました。」

「このキャンパスアジアのシェアハウスでの経験は、私にとって貴重な経験であり、精神的に成長することのできる多くの機会に恵まれました。シェアハウスで生活して良かったと思うとともに、シェアハウスに関することで助けていただいた多くの方々に感謝しています。」

(レジデント・アシスタント男子棟と女子棟のハウスレポートから抜粋)

## (11)質保証を伴った教育システム

質の保証を伴った単位互換制度の体系的構築については、「東アジア型グローバル教養教育モデル」の体系を構築すること目標に、協力してカリキュラム体系を構築してきた。これまで開発してきた科目は以下の通りである(表 3-8):

科目領域	科 目 群	科目数
教養教育科目	キャンパス・アジア独自の開講科目	21科目
専門科目(学 部)	既存の科目から選抜されたキャンパス・アジア冠科目	約40科目
専門科目(大学院)	既存の科目から選抜されたキャンパス・アジア冠科目	約25科目
日本語科目	既存の日本語科目から選抜されたキャンパス・アジア冠科目	約20科目

表3-8 岡山大学キャンパス・アジアの開講科目

(シラバス参照 http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp/news info/3950)

これまで、試行錯誤を繰り返しながら、より多くの科目を相互に履修できるように工夫してきた。たとえば、既存の科目を「キャンパス・アジア冠科目」に認定することにより、所属学部の講義でなくても、キャンパス・アジアが独自に「キャンパス・アジア冠科目」として認定する方式で、相互の留学生がより多くの単位を履修できる仕組みを構築した。また、各校で教育内容を分担することにより、それぞれの大学でオリジナリティのある魅力的な講義群を履修できるようにした。また、特別コースの設置によって単位認定を行ってきた。具体的には、ナノ・バイオコース(岡山大学)、サマースクール(日本語・3校共同)、サマースクール(英語・3校共同)、中韓ワークショップ(岡山大学)、オータムスクール(3校共同)などである。

学位授与に関しては、これまでキャンパス・アジア学生が正規生として部局に属していなかったため、制度的に学位授与ができなかった。2015年5月に長春(吉林大学)、およびソウル(成均館大学校)で協議を行い、(1)吉林大学公共外交学院を中心に国際共同大学院を設立すること、(2)これをさらに医歯薬系、自然科学系に拡大していくことについて協議を行った。今後、その方向で各大学で体制を立ち上げる準備を行うことになっている。具体的には、学位取得を伴った相互学生交流の枠組み作り、共通教育科目の充実、ラーニング・アクリメントの導入、ジョイント・ディグリーを見据えたダブル・ディグリー協定の締結、クロス・アポイントメント制度の発足などを推進していくこととなっている。

もうひとつの質の保証として、共通教科書の作成と利用をあげることができる(詳しくは、「3 特色あるプログラム (2)共通善教育と共通教科書の編纂・利用」参照)。この教科書を講義、サマースクール等で活用することにより、質の高い共通教育を実現している。

## (12) キャンパス・アジアコミュニティ

キャンパス・アジアは、大学キャンパス内だけではなく、日常的な交流を通じて日中韓の意見交換、人的交流を行っている。具体的には、CAMPUS Asia同窓会、CAクラブ、シェアハウスなどの活動である。これらの活動は、すべて学生たちのイニシアティブで運営されている。

CAMPUS Asia同窓会は、成均館大学校に長期留学した学生が中心になり、2014年3月に発足した。キャンパス・アジアプログラムで仲間となった学生・院生たちが、卒業後も連絡を取り合いながら東アジア地域中核人材として活躍し、情報を交換する場として、自主的に運営されている。新しいキャンパス・アジアプログラム生のサポートも行っている。

CAクラブは、キャンパス・アジアプログラムで長期留学した学生が中心になり、2013年6月に発足した。キャンパス・アジア学生、およびキャンパス・アジアに関心のある学生のサークルで、裾野の広いプログラムを支えている。キャンパス・アジア学生の支援、キャンパス・アジアプログラムの広報、大学・地域イベントへの参加などを行う。

#### CAクラブ課外活動記録

#### ■2013年

4 / 5 CA Caféオープン ~ホットックパーティー~

5/3 球技大会

6/8 料理パーティー~ぎょうざ・手巻き・ナムル・お味噌汁~

11/1~3 学祭出店 ホットック店

12/8 秋体験ツアー in 深山公園

#### ■2014年

1/31 春節パーティー in share house

2 /11 スノボ in 芸北

4 / 7 留学生歓迎パーティー・ お花見

10/16 大学ホーム カミングディ出店



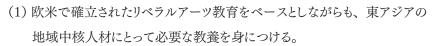




## (13) アジアンクラット育成システムの構築

このプログラムで3校が協力して育成する次世代の地域中核人材とは、深い伝統的な教養をもった「アジアンクラット」である。「アジアンクラット」とは、アジアの共通善に資する地域行政、民間組織の指導者、地域療をリードする医療人、3国の協業をリードできるグローバルな視野を持った企業中堅幹部候補などで、東アジアが共通に抱える様々な分野における課題に向かうリーダーである。

こうした人材を育てるための教育の柱は次の通りである:



- (2) 異分野、異文化間での協業をスムーズに実施し、さらに日中韓のプロジェクト等でイニシアティブがとれるように、多言語セミナー等を通じて日常的に訓練を重ねる。
- (3) 実際に地域に出て現場を観察し、地域の人々と交流しながら、肌で社会問題を学ぶとともに、日中韓チームで問題を解決する力を養う。
- (4) シェアハウスを中心として、お互いに自らのルールを作って共同で生活し、円滑なコミュニケーションをとれる力を育成する。

5年間の試行錯誤を通じてアジアンクラット育成を目指した一貫教育システムが構築されつつあるが、実際に地域の発展を担う若いリーダーが少しずつ育ち始めている。



#### ★大学院進学

猪原 千愛(韓国短期・長期)岡山大学大学院医歯薬学研究科

李 勝軍(韓国長期)神戸大学大学院法学研究科

田中 秀幸(中韓ワーク、リージョナル)慶應義塾大学大学院薬学研究科

前田早也佳(韓国短期・長期、リージョナル)岡山大学大学院環境生命科学研究科

木村 崇志(中韓ワーク、中国短期・長期、リージョナル等)岡山大学大学院社会文化科学研究科

横井 隆志(中韓ワーク、シェアハウスRA等)岡山大学大学院環境生命科学研究科

巻尾 沙織(中韓ワーク、シェアハウスRA等)岡山大学大学院環境生命科学研究科

菊池 章(中韓ワーク、中国短期等)東京大学大学院工学系研究科

佐藤真一郎(韓国長期、中国短期等)岡山大学大学院自然科学研究科





#### ★公務員等就職

林 翔太(中国長期)国家公務員総合職試験合格・法務省

大垣 杏花(韓国短期、長期留学)山口県教員採用試験合格

岡村 優衣(中韓ワーク、中国短期・長期)岡山大学

佐野 真希 (中韓ワーク、中国短期) 兵庫県保健師 (資格免許職)

川上 博雅(中韓ワーク)岡山市役所

松原 真帆 (シェアハウスRA) 岡山県庁

#### 【吉林大学】

#### ★大学院進学

蘇 暢(日本長期、サマースクール)吉林大学大学院修士課程 中国西部貧困地区支援教育派遣教員(一年間四川省「希望小学校」滞在)

熊 怡萱(日本長期)北京大学外国語学院修士課程

#### ★公務員等就職

王 洪浩 (日本長期、サマースクール) 大慶市政府・公務員 楊 程博 (日本長期、サマースクール) 吉林大学・教員

## 【成均館大学校】

#### ★大学院進学

朴 炯振(日本長期、サマースクール)京都大学大学院博士課程 姜 文姫(日本長期、サマースクール)同志社大学大学院博士課程

#### ★公務員等就職

姜 文姫(日本長期、サマースクール)成均館大学校・キャンパス・アジア事務局職員

韓 ボ成 (日本長期、サマースクール) 成均館大学校・キャンパス・アジア事務局職員

李 正珉 (日本長期、サマースクール、中韓ワークショップ)

岡山大学・キャンパス・アジア事務局職員、韓国文化観光研究院研究員

呉 玹正(日本長期)世宗市国策研究団地労働研究院•経済政策研究員

# 4. 今後の展望

教育の質の保証にとって重要なのは、学位を伴う教育である。キャンパス・アジアの継続と質の保証の確保のため、事業を部局(学部、大学院)で担えるようにすることが重要である。

岡山大学、吉林大学、成均館大学校の間では現在、ダブル・ディグリー協定等の学術・学生交流協定を整備している。岡山大学と吉林大学の間にはすでにダブル・ディグリー協定が締結されている。吉林大学公共外交学院と成均館大学校中国研究所の間では、相互交流協定が結ばれている。2014年に、岡山大学医歯薬総合研究科(薬学系)と成均館大学校薬学大学の間で、ダブル・ディグリー協定を締結した。さらに2015年に、岡山大学社会文化科学研究科と成均館大学校文科大学の間で、ダブル・ディグリー協定を締結した。

こうした協定の整備をベースとして、人文・社会科学系では、吉林大学公共外交学院を中心に国際共同大学院の設立を目指す。公共外交学院は、国際的視野をもち、高度なコミュニケーション能力を備え、また世界の経済、政治や多様な文化基礎形態にも精通するような新しい専門的人材を育成する事を目的としている。グローバル型人材を育成するため、学生達の言語能力、専門知識、人文知識や国際的視野などの素養を強化する必要がある。国際共同大学院は、以下4つの側面からグローバル型人材を育成している。

- 1. グローバル型人材育成のために基礎としての語学力を強化する。高度な外国語力がグローバル型人材に欠かせない条件である。
- 2. 英語ベースの専門教育を広く実施する。共通教育において、共通言語である英語を通じた教育は今後拡大の余地が大きい。
- 3. これまでグローバル教養教育を中心にカリキュラムを整備してきたが、今後は専門教育の面での提携を強化する必要がある。

医歯薬系では、ナノ・バイオコースが大きな成果を上げた。とりわけ、教員同士の相互信頼関係を醸成し、研究・教育面において相互協力の道筋を確立したという成果が大きい。このコースに並行して、若手医師育成コースを開設し、相互の協力をより強化していく予定である。

自然科学系においても、教員同士の相互信頼関係が醸成され、研究・教育面において相互協力の道筋を確立 した。自然科学系では、国際共同大学院を想定したダブル・ディグリー協議が予定されている。

教育カリキュラムの面では、「東アジア型グローバル教養教育モデル」を、今後も継続して整備し、各校の授業 科目、授業内容を改善するとともに、より体系的な構成に仕上げる予定である。

共通善共通教科書の編纂の継続も重要な課題である。3校の教員が教科書編纂に向けて何度も研究科を重ねたこと自体も大きな成果であるが、最終的には3校の教員が協力して教科書を執筆する体制ができたことが、大きな成果である。共通善共通教科書は、それを授業やサマースクールで実際に使うことで改善されてきた。今後はさらに使い込むことによって、より深みのある内容に改定していく予定である。

# 5. 資料

## 大学の世界展開力強化事業 キャンパス・アジア成果報告国際シンポジウム

International Symposium 2016 The Five-Year Experience and a New Horizon for Cooperation

日時:2016.1.22(金) 場所:Jホール(岡山大学鹿田キャンパス)

	日時・2010.1.22(並) 物川・33、ル(岡田八子)庭田(ドンバハ)
時間 Time	プログラム Program
13:00-13:01	<b>司会</b> 総合司会:白榮勛(グローバル・パートナーズ准教授) Moderator: Mr. BAI, Rongxun (Assoc. Professor, Center for Global Partnerships and Education, Okayama University) / 学生司会:川野瑞双(岡山大学経済学部) Moderator: Mr. KAWANO, Mizuki (Undergraduate, Okayama University)
13:01-13:06	開会挨拶 Opening Speech 岡山大学 荒木勝氏(岡山大学副学長・理事) Mr. ARAKI, Masaru (Executive Director and Vice-President, Okayama University, Japan)
13:06-13:12	来賓挨拶 Greetings from the honorary guests 文部科学省 松本英登氏(文部科学省高等教育局 高等教育企画課 国際企画室長) Mr. MATSUMOTO, Hideto (Director, Office for International Planning, Higher Education Policy Planning Division, Higher Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Japan)
13:12-13:18	来賓挨拶 Greetings from the honorary guests 日中韓三国協力事務局 梅澤彰馬氏(日中韓三国協力事務局 事務次長) Mr. UMEZAWA, Akima (Deputy Secretary General, Trilateral Cooperation Secretariat)
13:18-13:24	主催校代表挨拶 Greetings from the Presidents of the program-promoting universities 成均館大学校 馬仁燮氏(Mr. MAH In Sub)(成均館大学校副総長) Mr. MAH, In-Sub (Executive Vice President, Humanities and Social Sciences Campus, Sungkyunkwan University, Korea)
13:24-13:30	主催校代表挨拶 Greetings from the Presidents of the program-promoting universities  吉林大学 劉徳斌氏(Mr. LIU Debin)(吉林大学学長補佐、公共外交学院院長) Mr. LIU, Debin (Associate Vice President, Dean of School of International and Public Affairs, Jilin University, China)
13:30-13:50	<b>実施成果報告 Presentations of main outcomes</b> 吉林大学 李梅花氏(Ms. LI Meihua)(吉林大学国際合作処常務副処長) Ms. LI, Meihua (Executive Deputy Director, Division of International Relations, Jilin University, China)
13:50-14:10	<b>実施成果報告 Presentations of main outcomes</b> 成均館大学校 黄鎬徳氏(Mr. HWANG Ho Duk)(成均館大学校文科大学副教授) Mr. HWANG, Ho-Duk (Associate Professor, College of Liberal Arts, Sungkyunkwan University, Korea)
14:10-14:30	実施成果報告 Presentations of main outcomes 岡山大学 田口雅弘氏(岡山大学大学大学院社会文化科学研究科教授) Mr. TAGUCHI, Masahiro (Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University, Japan)
14:30-15:32	<b>三大学参加学生代表報告 Presentations of CAMPUS Asia students</b> ファシリテーター 小野真由美氏(岡山大学グローバル・パートナーズ講師) Ms. ONO, Mayumi (Senior Assistant Professor, Center for Global Partnerships and Education, Okayama University)
14:32-15:45	岡山大学生 徳永百合「私とキャンパス・アジア 〜変わる、変える、繋げる〜」 Ms. TOKUNAGA, Yuri (Undergraduate, Okayama University) <i>"CAMPUS Asia and Me. Assimilate a Change, Make a Change and Keep Continue"</i>

時間 Time	プログラム Program
14:45-14:58	成均館大学校生 姜文姫「共に考える、変わる場所としてのキャンパス・アジア、そして私」 Ms. KANG, Mun- Hee (Postgraduate, Sungkyunkwan University) "Thinking Together. CAMPUS Asia as a Changing Place, …and Me"
14:58-15:11	吉林大学生 呉善城「私とキャンパス・アジアの絆」 Mr. WU, Shancheng (Postgraduate, Jilin University) "Bonds with CAMPUS Asia"
14:11 — 15:24	学生コミュニティ 木村崇志、佐藤真一郎「共通善を考える 一様々な学生交流の形」 Mr. KIMURA, Takashi (Postgraduate, Jilin University) & Mr. SATO, Shinichiro (undergraduate, Okayama University) "Thinking about Common Good - the Various Forms of Student Exchange"
15:24-15:30	ディスカッション Discussion+Q&A
15:30-15:50	休憩 Coffee Break ビデオ流し(学生フォーラムビデオ、多言語セミナービデオなど)
15:50-16:03	特色のある取り組みの紹介:東アジア共通教育のモデル構築 Distinctive Educational Approach - Constructing A Model of the East Asian Common Education 荒木勝氏(岡山大学副学長・理事)「共通善教育と共通教科書の役割」 Mr. ARAKI, Masaru (Executive Director and Vice-President, Okayama University) "Education of Common Good and the Role of Common Textbook"
16:03-16:16	劉徳斌氏(吉林大学校長補佐、公共外交学院長) 「グローバル型人材育成: 吉林大学公共外交学院の教育経験」 Mr. LIU, Debin (Associate Vice President, Dean of School of International and Public Affairs, Jilin University) "Training Talents with International Outlook: The Experience of the School of International and Public Affairs, Jilin University"
16:16-16:29	金東建氏(成均館大学比較文化研究所研究員)「東アジア古典学授業の現況と展望-CAMPUS Asia授業を 事例として」 Mr. KIM Dong Kun (Research Scholar, Center for Cross Culture, Sungkyunkwan University) "Present Status and Prospects of the East Asia Classic Studies Lectures" (TBD)
16:29-16:41	田口雅弘氏(岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)「東アジア型グローバル教養教育の構築とその導入」 Mr. TAGUCHI, Masahiro (Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University) "Constructing a Model of the East Asian Style Global Liberal Arts Education and its Implication"
15:41 - 17:54	小野真由美氏(岡山大学グローバルパートナーズ講師)「東アジア型グローバル教養教育の現場から-中韓留学 ワークショップ・共通善教育多言語セミナーの事例報告」 Ms. ONO, Mayumi (Senior Assistant Professor, Center for Global Partnerships and Education, Okayama University) <i>"Case Report of the East Asian Style Global Liberal Arts Education: China-Korea Study Workshop, Multi-Language Seminar of Common Good"</i>
15:54-17:07	廣畑聡氏(岡山大学大学院保健学科研究科教授)「キャンパス・アジアプログラムにおける医歯薬系・自然系教育の取組みとその発展:ナノバイオコース/自然系ワークショップ/共同学位」 Mr. HIROHATA, Satoshi (Professor, Graduate School of Health Sciences, Okayama University) "Experience and Results of the Nano-bio Course, Natural Science Education and the Double Degree Program"
17:07-17:10	閉会の挨拶 Closing Speech

## 国際シンポジウム 挨拶

#### 歓迎とシンポジウム開会の挨拶

岡山大学副学長·理事 荒木 勝氏



皆さんこんにちは。この寒い中を、中国および韓国から岡山大学にお越しいただきまして ありがとうございます。5年間にわたるキャンパス・アジアのプログラムの最後を飾るシンポジウムを開催するにあたりまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

このキャンパス・アジアのプログラムの中でも、私たち3つの大学、吉林大学・成均館大学・岡山大学が組み立てました共通善に基づく東アジアのグローバル人材育成というプログラムは、大変大きな特徴を持っております。他のプログラムとの大きな違いの第一は、他のプログロムが特殊な分野で人材を育成するという特徴を持っているのに対して、私たちのプログラムは基本的に、三国の共通の価値を探求しようとするプログラムであり、出発点において、大きな意味でのリベラルアーツを中心としたプログラムであるということです。それをどのように遂行していくかについては、出発点において、大変難しい問題がありました。しかしながら、この5年間の中で、私たちは共通善を探求するひとつの大きな方策として、学生たちを現場に連れ出すこと、その中で教師と共に学生自身が成長するという道を選択しました。そのことによって、学生たちの中に「共通善というのは若者の心にある」という意識まで導き出すことができ、私たちのプログラムはひとつの大きな道標を獲得しました。

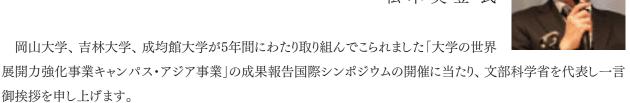
第二は、このプログラムが持つ包括性であり、人文社会から自然科学、医療の分野に至るまで、非常に多くの先生たちのご参加と学生たちの参加があったことです。

皆様方に、このシンポジウムで5年間の成果を披露することによって、私たちのプログラムが非常に大きな成果を獲得したということを実感していただけると思っております。長丁場ではありますが、ぜひとも最後まで報告をご清聴いただきまして、私たちのプログラムの画期的な意義と、今後予想されるであろう大きな成果を確信していただければと思っております。

簡単ですが、わたくしの挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

## ご挨拶

# 文部科学省高等教育局 高等教育企画課 国際企画室長 松 本 英 登 氏



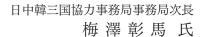
2009年10月の「第2回日中韓サミット」で、日中韓の首脳により様々なレベルで三か国が協力していくことが合意され、これを踏まえて2011年に高等教育分野における日中韓の協同プログラム―キャンパス・アジアを推進していくことが決まりました。この事業は、日中韓において教育の質の保証を伴う大学間交流を促進することにより、東アジア地域全体を視野に入れて活躍する次世代の優秀な人材を育成することを目指しています。2011年には、岡山大学、吉林大学、成均館大学のキャンパス・アジアプログラムを含む、日本国内10校のパイロット・プログラムが採択されました。皆様ご存知の通り、昨今、東アジア情勢は複雑ではありますが、教育における3国共同の取り組みが進められる中で、次世代の架け橋になっていただける若い方々が育っていくことを私どもも期待していますし、その成果に関しては日中韓3国以外の諸国からも注目されているところです。

この3校が構想する「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」は、深い伝統的な教養をもった地域行政・民間組織の指導者、東アジアが共通に抱える様々な分野における課題に立ち向かう将来のリーダーを育てていく取り組みで、大変意義深いものと私どもも考えています。同時に、共通善を基礎とした3国連携の教育の展開、東アジア型グローバル教養教育体系の模索、共通教科書の作成と利用、フィルドワークを重視した教育プログラムの実施、医歯薬・自然系を包括した教育メニューの考案など、多くのユニークな取り組みに、3校が密接に協力して進められてきたものと認識しています。この事業のプログラム委員で日本総合研究所の理事長である寺島実郎先生から、東アジアの共通善という難しいテーマに向き合い、非常に苦労しながら一所懸命進めていると日頃より伺っており、今日のシンポジウムは大変楽しみにして参りました。

また、本日、吉林大学劉学長補佐、成均館大学馬副総長、日中韓三国協力事務局梅澤事務局次長をはじめ、キャンパス・アジアを支えてこられました3国の皆さまをお迎えし、国際的な視野から御議論いただくことは、大変意義深いものであると考えております。吉林大学におかれかれては、日中関係が必ずしも円滑ではなかった状況にありましても、日本の大学との交流の灯を絶やさないように大変な努力を払ってくれたことをお聞きしています。また、成均館大学も同様に、この間日本の学生を暖かく迎え入れ、情熱を持って教育して下さったということに、私どもからも改めて感謝を申し上げます。今日のシンポジウムは、こうした各大学の努力の上に成り立っていると理解しております。本日は、5年間の取り組みの結晶を拝聴できることを楽しみにしております。

最後に、このシンポジウムに御参集いただきました皆様、また事務局としてこのシンポジウムを準備されました皆様の、ますますの御健勝と今後の御活躍をお祈りいたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

#### ご挨拶





荒木勝岡山大学副学長、

馬仁燮成均館大学副総長、

劉徳斌吉林大学校長補佐、

2016年の新年を迎えるにあたり、日中韓の次世代を担う若者たちの節目の式にお招き頂き、また、ご挨拶の機会を賜り、誠にありがとうございます。

本年申年は果実が熟していく年と言われております。キャンパス・アジアプログラムを修了 される皆さま;これから世界に羽ばたく絶好の年と言えましょう。心より祝意を申し上げます。また、ご列席の皆さま;これまで影に日向に、彼ら将来ある若者をご支援されましたご苦労が、こうして大きく実を結びました。ここに敬意並びに祝意を表します。そして、このキャンパス・アジアを成功裏に運営された岡山大学、吉林大学、および成均館大学の学長並びに関係者の皆さまに心より敬意を表しますとともに、称賛をお贈りします。

キャンパス・アジア構想が合意された2010年、日中韓3カ国の首脳は、2020年までに達成すべき目標を掲げた 文書"Vision 2020"を発出しました。これら目標のなかで、キャンパス・アジアは三国間協力事業として最も大きな 果実を実らせた成果のひとつです。

昨年11月にソウルで開催された日中韓サミットに私も出席しましたが、議長国の韓国朴槿恵大統領、そして中国李克強首相並びに日本国安倍晋三総理が、教育分野の協力として「キャンパス・アジア」の重要性に声を揃えていたことは、今でも脳底深く刻まれております。特にサミットにて発出された「共同宣言」では、キャンパス・アジアを教育分野の三ヶ国協力の成功例として強調しました。

このような地域的な国際協力に向けての教育分野への焦点は、女性で世界初のノーベル賞を受賞したキューリー夫人の名前を冠した研究者・学生交流プログラム、「マリ・キューリー・アクション」を想起させます。ヨーロッパの地域統合に向けて、若者・研究者交流の重要な役割を明確化した事業です。教育分野の交流が地域協力の鍵となることを示す好例であり、本日ここにいるすべての方々がこの重要な役割を担っていると思います。

先ほど、この3大学から成るコンソーシアムによる「パイロット・プロジェクト」が、多大な成果をあげるとともに、本年から正式なプロジェクトに発展するとお聞きしました。ご尽力された大学の関係者の皆さん、そして本日巣立たれる学生の皆さまの御経験の積み重ねが、キャンパス・アジアプログラムの今後の発展への大きな貢献となり、ひいては、それらが日中韓三ヶ国間の関係促進に深く寄与することとなるでしょう。

さて、我々日中韓三国協力事務局は、日本、中国、韓国の三つの政府の合意に基づき、三ヶ国間の協力促進を支援することを目的として、2011年に設立された国際機関です。最近数ヶ月を見ましても、文化の発信技術を競い合う日中韓キャンパスハーモニー、若者の文化を議論する日中韓ユース対話、三ヶ国の大学生交流を提供するヤング・アンバサダー・プログラム等、日中韓の若者の人的交流を精力的に実施しております。また、昨年11月の日中韓サミットにおいて、私どもの国際機関は、三首脳から、日中韓の協力メカニズムへの更なる参画の指示を直接受けました。今年開催予定の三ヶ国初の教育大臣会合への協力や、このキャンパス・アジアの促進に向け、引き続き最大限の支援を続けていくこととしています。

### ご挨拶

成均館大学校副総長 馬 仁 燮 氏



こんにちは。私は成均館大学人文社会キャンパスの副学長の馬仁燮と申します。今日、 岡山大学のキャンパスを散策してみましたが、キャンパスが大変美しく、静かで、本当に良い印象を受けました。

この5年間、私たち成均館大学、吉林大学と共にキャンパス・アジアプログラムを成功裏に推進してきた先生方々に感謝の言葉を申し上げます。 荒木勝副学長、阿部副学長、このような成果を評価するシンポジウムを開催し、私たちを招待していただき、ありがとうございます。

まず、ご存知の皆さまも多いと思いますが、私から成均館大学を簡単にご紹介させていただきます。韓国の大学は国立、公立、私立に分けられます。成均館大学は私立に属し、私立の中の最も良い大学のひとつです。成均館大学の「成均館」とは、孔子が儒教の思想を基に建てた学校を継承したことを意味します。

私たちの学校の起源は、朝鮮初期の1398年ですので、私たちの学校の歴史は今年で618年になります。「成均館」は、「人材を広く育て、世の太平を実現する」という意味です。これは、孔子の思いです。そして、私たちの大学は、携帯電話生産で有名なサムソングループが支援を受けています。したがって、私たちの大学は伝統と先端がよく調和のとれた大学であると自負しています。最近は、「QS (Quacquarelli Symonds)世界大学ランキング」、「THE (The Times Higher Education)世界大学ランキング」、そして韓国の「中央日報」大学ランキングで顕著な成長が見られて、私たちも本当に誇らしいと考えております。

それに加え、私たちは東アジアを飛び越え、世界に私たちの持っている知恵と知識を交流するための努力を行っています。キャンパス・アジアプログラムは、5年前に東アジアの協力を強化するための核心事業として始まったと存じています。私も、5年前から日本の名古屋大学と中国の人民大学法学院プログラムを成功的に進行してきました。この5年間の実験を基に、様々なプログラムがすべて成功裏の結果を得たと考えます。まず、大学と学生たちの交流を通じて互いのコミュニケーションが深まり、教育に関与している先生方々も共同研究だけではなく、大学教育の次元で互いに親しくなることができたと思います。アジアの3つの大学が互いに交流し、研究・教育を通じコミュニケーションを図ることは、以前には存在していなかった、大変新強い発想だと考えます。

この5年間の実験で、多くの問題に対面し、難渋しました。しかし私は、この難関を発見して解決する過程が、制度の進化の過程であり、それが、アジア3国が志向するところだと思います。そのことを通じ、キャンパス・アジアプログラムが、既存の交流領域より深化・発展すると、より立派なプログラムになることができると考えます。アジア3国はちょっと見ると似たようではありますが、実は相違点も大きいと思います。空港から、もう空気、言語、食べ物がすべて違うのではないでしょうか。それにもかかわらず、私たちは深く共有しているものを持っており、その探求がこのプログラムの究極的な目標であり、そして終着点がアジアの発展と平和であると考えます。先ほど、日本の文部科学省の先生が「東アジア情勢が困難な局面を迎えている中…」とおっしゃいました。もともと、この制度はアジアの繁栄・平和・発展のために立ち上げられたプログラムです。その繁栄に寄与する人材を探そうとしているプログラムです。しかるに、アジアが政治的葛藤を醸しているとして、このプログラムが影響を受けるというのは逆説的なことです。国家と政治が困難なときほど、人間と社会がもっと交流し、コミュニケーションをとり、政治と政府の分裂を防止することが、大学教育の義務ではないだろうか考えます。

私は25年前に、様々な先生のお陰で、日本と中国の教育者、政治家、外交官、ジャーナリストたちと交流しました。そのときは、その方々が私たちの集まりをYoung Leaders Forumと名付けてくれました。Young Leaders Forum、若い青年たちの集まり、このように。その当時は、私たちが指導者になれるとは全然思っていなかったです。今でも相変わらず、日本と中国にいるその友人に会っています。国家と政府と政治が危ぶまれている時にも相変わらず、その友人と会って対話を交わします。そうした中で、もしも3国間にある問題があると、私たちが解決できる方法を探せるかもしれません。このキャンパス・アジアプログラムが志向するところこそ、まさにそのようなことだと思います。中国と韓国、韓国と日本、中国と日本の間で、少しぎくしゃくした時が来たら、それを解決して平和を守る人々は、すなわち今日、私たちが教育しているあなたたちだと信じています。このプログラムがこれからもっと発展しまた成長することができるように、学生の皆さん、教授及び先生たち、また政府を担われている方々、皆が一つの力になることを願います。

岡山大学、吉林大学、成均館大学のプログラムがますます発展することをお祈りいたします。ありがとうございます。

#### ご挨拶

吉林大学吉林大学学長補佐、公共外交学院院長劉徳斌氏



尊敬する岡山大学荒木勝理事、 成均館大学馬仁燮副総長、 日本文部科学省高等教育局松本英登国際企画室長、 中日韓三国協力事務局事務局梅澤彰馬次長、 皆様

#### こんにちは。

大寒の厳しい寒さが身にしみる季節となりました。本日キャンパス・アジア成果報告国際シンポジウムに参加することができて、嬉しく存じます。ここで、吉林大学を代表して、主催の岡山大学の細やかなお心づかいに、心から感謝を申し上げます。また、プログラムを実施して以来、韓国側パートナーの成均館大学および日中韓三国協力事務局の暖かいご支援・ご尽力に深く感謝を申し上げます。

吉林大学を含める中日韓3国の26大学は「キャンパス・アジア」パイロットプログラムとして採択されました。当プログラムが2012年に開始して以来、吉林大学は日本側の岡山大学、韓国側の成均館大学と協力して、東アジアの隣国友好関係と共同発展に励んで、中日韓3国の青少年の交流を全力に推進することによって、3国文化の相互理解を強化し、東アジア将来の平和と発展に積極的に貢献した国際的な人材を育成するために、着実に努力して

#### まいりました。

この4年間、3大学の約500名の学生は交換留学、短期研修、ボランティア活動などを通じてこのプログラムに参加して、人生計画、奉仕精神、相互理解などの多方面において大きく進歩、成長しつつあります。キャンパス・アジアプログラムは中日韓3国の学生のために、相互に信頼・理解して、共に東アジア問題に注目するチャンスを作りだしたと言えましょう。

吉林大学は中国の東北部に位置しています。私たちは立地の優位性を発揮し、東アジア地域の大学や機関との友好交流を重要視し、現在は日本と韓国において、それぞれ43と37の大学や機関と、友好交流関係を築いてまいりました。長い間、定期的に上層部の相互訪問、アカデミックプラットフォーム、教師・学生間の交流が行われてきたので、日韓両国との交流・提携において、しっかりとした土台を築き上げて、成果を収めてきました。そして、東アジア地域の民間の友好交流を推進、促進する役割も果たしてきました。

グローバル人材の育成事業は、吉林大学国際化戦略の重要な一部でございます。吉林大学は、中韓大学学長フォーラムの発起人と中国教育部指定の中国側の主導校であり、中日大学学長フォーラムの会員大学でもあります。中日韓の高等教育において、交流関係の構築と発展を促進する役割を果たしてきました。

本日、キャンパス・アジアプログラムはパイロットとしての第一段階の終盤を迎えました。私たち吉林大学、岡山大学、そして成均館大学は、さらなる友好関係を構築した上で、これからも東アジアの共通利益に着目する人材の育成事業のために力を合わせ、より一層貢献できるよう、願っております。同時に私たちは、今後中日韓3国政府が多方面にわたって共通認識を深めて、3国間の高等教育において更なる交流と提携を促進していく所存です。そして、それらを通して相互理解を深め、信頼関係を築き、友情を育んでいきます。その土壌の上に、東アジア地域の平和と安定が築かれ、中日韓3国の共同の発展・繁栄が実現されるよう、心から祈っております。

最後に本日3校のキャンパス・アジアパイロットプログラム成果報告国際シンポジウムの成功をお祈ります。どうも有り難うございました。



記念撮影

# CAMPUS Asia Pilot Program Implement the "Common Good"







吉林大学

岡山大学

成均館大学校

# International International

Symposium

The Five-Year Experience and A New Horizon for Cooperation

2016.1.22 Friday Junko Fukutake Hall, Okayama University



日時 2016年1月22日(金)

場所 岡山大学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall

●プログラム

13:00-13:30 主催者 • 来賓挨拶

13:30-14:30 三大学成果報告

14:30-15:30 三大学参加学生代表報告

15:30-15:50 休憩

15:50-17:10 特色のある取り組みの紹介



連絡先 岡山大学グローバル・パートナーズ キャンパス・アジア事務局 TEL: 086-251-8532 E-Mail:campus.asia@adm.okayama-u.ac.jp http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp/



三大学代表者会議



文部科学省松本英登室長の挨拶



吉林大学プレゼン



成均館大学プレゼン



岡山大学プレゼン



同時通訳を担当するキャンパス・アジアの学生

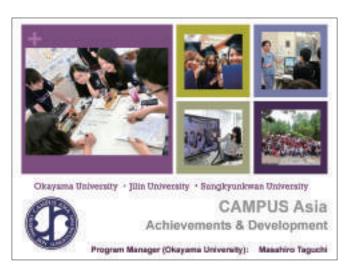


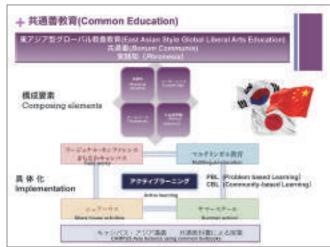
成均館大学校の学生プレゼン



吉林大学の学生プレゼン

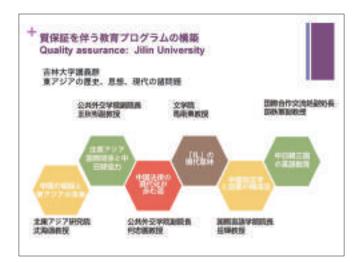
#### 成果報告(岡山大学)

















+ 共通審教育を基軸とした東アジア型グローバル教養教育
East Asian Style Global Liberal Arts Education

学生フォーラム
Student Forum

◆ 学生:プログラムの成果の集大成

→ 服務報告会 (学生フォーラム) を終え修了証書様与
[For students] The final presentations of the stadyhesearch achievements in foreign language Cartification as a quality assurance

◆ 教員:プログラムの満足度の検証とフィードバック

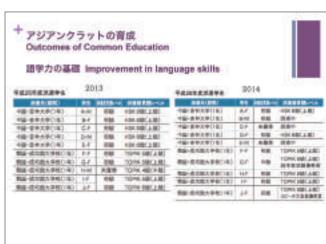
→ 『学生フォーラム』 周山大学、各年版
[Por staff] Verification of the programs
Feedback of the efficiency
of programs





















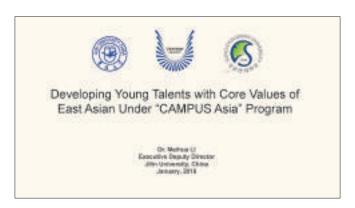


#### <sup>+</sup>成果 OUTCOMES



- 高いモビリティを実現するシステムの構築 Righ mobility exchange system
- 東アジア型グローノい・表音板育モデルの模能 Construction of the East Auton Bryle Clobal Liberal Arts Education Model
- 共通者教育を基礎とした教育モデルの構築 Construction of the Liberal Arts Education Model I based on "Contracts Good" adaptation
- 全学、全分野、全部経費加益一貫教育モザルの構築 Construction of the educational model covering all levels and fields
- アクティブラーニングを中心とした国際教育の実施 Experiments of the international active learning
- 共通物料書の報酬と利用による教養教育 Liberal Arts Education Model based on the editing and saing common textbooks

#### 成果報告(吉林大学)





#### ●Why CA Program?

- 1.China, Japan and South Korea are most important nations in Northeast Asia, cooperation among these three countries are very important for regional peace, stability and development.
- China, Japan and South Korea are moving forward and facing international competition and challenge together as a regional community.
- community.

  3. The future of trilateral relations depends on exchanges and communication among young generation from three countries.

  4. West countries are preferred choices of young people when they going abroad, however travelling among neighbor countries. is insufficient.
- Governmental cooperation and support are necessary for mutual understanding among young people from three countries.





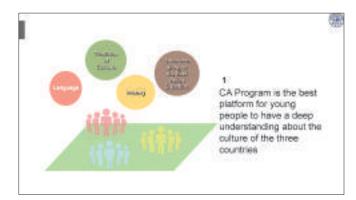




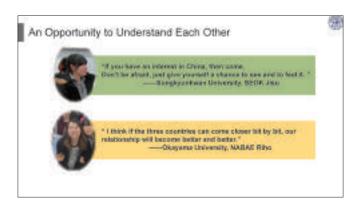




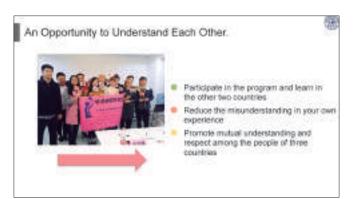


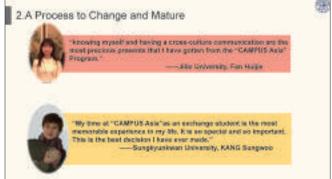










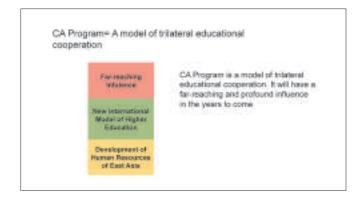


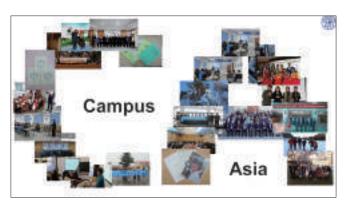














#### 成果報告(成均館大学校)













#### IV. 事業團 教育 Program < IV -2> 東Asia 文化 共同性 摸索 特別講義 土飲 問載 東Asia 各個 時車 我光 計論 (外交製業/領土紛爭/開業影甲等) 48 2013年 韓國文學 現代古典 感熄 及 填解 388 南Asia 歴史 文學 思想 期間 主題 特別 (論語/文化表語/演學/隣接教 中内民社會 /歴史紀学/儒教文化/見放主義 等) 東Asia 開稿 最初 研究 町内 (自由主義/冷教文化/帝属日本思想/ 20149 7回 5B 植民地内鲜桔培/韓國社會態変等) 2015年 <連絡指導> 韓國 現代文化產業 專門家 招請 特講 (K-Pop/文生Contexts是業/飲食文化/是合人文學 等) 410



























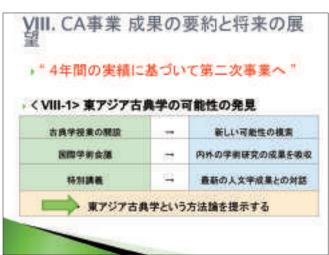
# V. 学術交流 成果 ・ 國際學術大會開催 特期 主題 投表 2012年 第Asia 資文學、共同性と 間有性 前中日 3個 (優大学 11件 替表 2013年 第Asia 古典學(文化研究の 可能性と 整額 10億大学 11件 替表 2013年 第Asia 古典學(文化研究の 可能性と 整額 10億大学 36件 登表 2014年 第Asia 建文学における報告主義 第中日录 4個 9億大学 20件 發表 共有する結晶學、 第中日表 4個 5億大学 14件 登表



#### VII. 人才養成 優秀成果 ・ < VII-1> 東Asia 現場密着形 次世代 核心人才 義成 優秀事例 勤務体 優考 姓名 蒙驁市 現代自動車 2012年 吉祥大學 大字 International 2013年 吉林大學 徐承斯 現代 Green Food 2013年 吉林大學 手相關 日本 Panasonic 2013年 岡山大學 與能够 韓屬 京徽道 地方公務員 2013年 吉林大學 非被國

	東Asia 文化共同性 基盤 優秀研究者 養成	r more
ma	選挙研究	報告
秦文整	博士修了,阿嘉拉大學 测速研究	2017年間山大學
朴柳田	博士修了,京都大學 就達研究	352年 開山大學
<b>#</b> ##	傷學科 硕士维程 电季	383年 吉林大學
200	硕士学家 尖耸跨物的 季葡研究士	2013年 吉林大學
朴柳葵	排士修了: 佛術大 研究員	305年 吉林大學
李正琳	#士格子.周山大職員 類 韓國文化観光研究院 委囑研究員	19:3年 岡山大学
Bang	博士课程 选學,cs事業團 治教	300年 間山大學
281	相士卒業 京韓文化財票 職員	四4年 関山大學
<b>東北正</b>	硕士李某 時間經濟研究院 研究員	104年 岡山大學











#### 特色のある取り組み紹介1 東アジア共通教育モデル構築



東アジア型グローバル教養教育とは? What is the East Asian Style Global Liberal Arts Education? BOAT supply NT STEER LOO 高小人林、高性、人物性、物質 保护权 seno-out-多様性を実施しつつ福祉報を共有 Sharing of raham white accepting the cit Thirty to A'restally オリシャ間中 18.00 NB. 40 The studies of Content. "Total" Greek philosophy Mont St. CHINES - TV 100 デリシャ哲学 BHE O-VA. ARM. BAIR 多模型的中央系统 Continue in diversity Roman law, reputific, chroscopicy

+ 共通善教育を基軸とした東アジア型グローバル教養教育
East Asian Style Global Liberal Arts Education
多様性の視覚にあるもの 「未通差」
Common values that andertie diversity "Common Good"
分野ことに具体化 教育研究チーム構成
伝統・思想WG 歴史WG 現代の未通課題WG 資本文化WG
Working Groups Traditions and thought, Bastory, Contemporary Common lasse, Cultical Spices of Chinese Characters
「共差者は若老の心の中にある」(技术理事)
"The common good is in the heart of young people" (Post. Araki)
考え方 教える → 引き出す
Change of the way of thinking Teach → Pall out (an answer)

方法 差字 → 議論をベースとしたセミナー
Change of the method Classroom lectures → Discussion based seminars

+ 共通善教育を基軸とした東アジアをグローバル教養教育
East Asian Style Global Liberal Arts Education

東アジアは、西洋の伝統・思想を紹介的に取り入れることによって、グローバル社会に近づこうとした。

東アジアの教養は、グローバル社会と対峙して裏慮する中から生まれる。

East Asia. By incorporating the traditions and opinit of the West fragmentary, tried to approach the global society.



 
 + 共通番教育を基軸とした東アジア型グローバル教養教育 East Asian Style Global Liberal Arts Education 問山大学講義課 共通業教育、教養教育、専門教育、フィールドワーク

 CA original lectures 共通普教育 CA教養教育科目

 CA collabolated lectures 教育教育 教養・CA科目21科目、日本語科目的20科目

 専門教育
 全字部、全大学院、ナノ・バイオコース、自然系ワークショッフ 専門分野記科目(専門科目的40科目、大学院科目的25科目)

 Active learnings アクティブラーニング PBL CBL (Community-based Learning) 共適番教育多言語セミナー、サマースクール、リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、中間ワークショップ





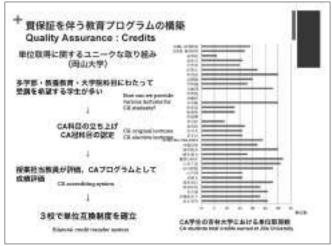












#### 特色のある取り組み紹介2 CAMPUS Asia古典学授業の挑戦と課題

金 東雄 (成均館大学)

# CAMPUS Asia 古典学授業の 挑戦と課題 Lessons of East Asia classics for CA Project -Experience and Response

#### 東アジア古典学とは

- 近代文学:文学テキストを通じて「近代」を日中韓三国の対応ぶりはそれぞれどうだったのか、共通的なものと相違点はどこにあるのか、を考える。
- 古典文学:「漢字」を通してどのように交流したのか。共通の文化遺産としての漢字の可能性

#### 懸案問題解決との関係

- ・
  極案問題に専門的に回答していくのが、目標ではない。個別問題には三国にはそれぞれの主張あり。
- 「東アジア」の古典という設定:東アジア全体を視野にいれた視点を提示

#### 核心科目

- 東アジアの現代古典(黄縞原、2012春開設)
- → 東アジアの観点から日中韓の近代文学の テキストを読み直す
- 東アジアの相互疎通と漢字文明(金能奏2012秋開設)
- → 「漢字」という意思伝達手段を通じてみた 東アジアの相互認識
- ・東アジア古典学入門 (2012秋開設)
- → 共通の基盤から展開されるローカル化の論 理の展開を学ぶ

#### 授業実施状況

- CA学生(学部)学期ごとに1~2科目 義務
- · 岡大生受講多
- 韓国の学生も受請→CA参加誘導の一環
- \* 黄(35) 金(63) 韓(27)
- 2013年の評価:受講者数は30人前後が適当

#### 学生の反応

- ・ 難しい
  - 1)初めて接する学生が多い
- 2) 哲学レベルの低さ
- 3)東アジア観点は?
- · 補完策
  - 1) 翻訳テキストの提供
- 2) チューター、課外活動で補う
- 3) 哲学コース

**)**-

# テキストの翻訳本



#### 問題点

- 両・吉大学生、交流ない状況
- 近代とか伝統時代のイメージのつかめ難さ
- 親身なサポートの必要性

CAの特別

Selected For

Selected For

Addition

Addit

Addition

Addition

Addition

Addition

Addition

Addition

Ad

#### 語学·文化共同体

- CA 授業では植えない学生間の水準差の問題、専門の違う 学生の学習状況をチェックするために開設(2013)
- 自立的活動形式(見学、自主ゼミナールを通じて、東アジア 古典学へアプローチすることを手伝う。
- 専任の助教(博士課程、CA経験者)

#### 語学共同体 主要活動(2015)

韓国現代詩感想:時期ごとに重要な詩人の作品 感想および特徴紹介









文化共同体 主要活動(2015)

国立中央排物館男字、館内庭園にて(3015.03.24.)

#### 文化共同体 主要活動(2015)

#### 北漠山山登り:ソウル人文地理体験



2015.10.9 723州文殊峰から ソウル古典を眺める

# 北漢山碑峰を背景に(2014)



#### 学生からのFEED BACK

#### よかったこと:

- ① 韓国現代史や当時の社会現象がわかる文化財・展示会 ソウル歴史博物館「考試社」「南山」製練特別展示会 金九の私部兼臨時級府事務所だった「京橋在」
- ② 授業科目サポートー 植態現代 文学および近現代史に対して理解の不足しがらな演集
- 人学生への補充説制 ③ 韓国の大学生との交流および韓国の大学文化体験の機会 歴史地区への旅行への参加
- 語学文化共同体制権のときごとに食事会
- **ポソウル人文地関体験** 丰度山山遊り

#### 改善要望項目

- ① 古代史/前近代史 今の韓国(あるいは東アジア)と直接 的な関連がすくなく、今ここ的な実態が湧かない
- ② 韓国語初級の学生の場合、助教の説明が理解しづら かったりする
- ③ 学生の期待密が高まっており、日程の事前組み立て、 活動前の事前

学習などがもっと要望される

#### 今後の発展計画

- ① 感想 K-POP 大好きの学生ーソウルのインフラを論ずる 思ったとおりではないが、着実に成長しつつある 多少消化不良気味もなくはない
- (2) 法海、哲学文化共同体は重要ではあるが、補助的な手段 学生の負担も少なくばない 古具学授業それ自体で成立できる体制が必要
- ③ 提書 減退前にCA関連科目を先受講させる必要 文学以外の歴史・原想の教養をサポートする侵工設置

#### 特色のある取り組み紹介3 ナノバイオコース・自然系ワークショップ・共同学位

1

Experience and Results of the Nano-bio Course, Natural Science Education and the Double Degree Program

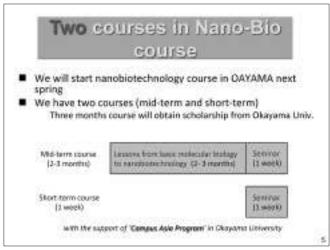
キャンパスアジアプログラムにおける 医歯薬系・自然系教育の取組みとその発展 -ナノバイオコース/自然系ワークショップ/共同学位-

HIROHATA, Satoshi 唐朝 朝 Graduste School of Health Sciences, Okayama University 岡山大学 教授 广播 IP 오카이이대의 국제 보는 교수 최도하다 사도시

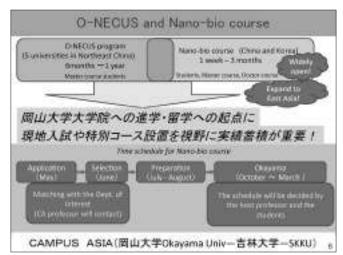
Organization of Okayama University Faculties Faculty of Letters Faculty of Education Faculty of Law Dioyama University Hospita ■ Faculty of Economics University Library ■ Faculty of Science ■ Medical School Graduate School of Medicine, Dentistry ■ Dental School and Pharmaceutical ■ Faculty of Pharmaceutical Sciences ■ Faculty of Engineering ■ Faculty of Environmental Science & Technology Faculty of Agriculture Grad. School of Natural ■ Matching Program Course Science and Technology



We will encourage young clinicians, medical students and pharmaceutical students to attend this wonderful opportunity! 3















#### New step of Nano-bio course

- Young doctor clinical training at Okayama University Hospital (Jilin Second Hospital)
- Four doctors have started their clinical training from January 2016.



#### 自然科学系の取組み

Winter Sentiner Merch 5-7, 2012 (Jün) Summer Sentiner September 12-16, 2012 (Okayarsa) Winter Sentiner February 14-15, 2013 (Gangeotr-do, Korse) Summer Sentiner September 20 (Okayarsa)

Auturm Seminar, November 35: December 1, 2013 (Ohumera) Summer Seminar, Jenuary 10, 2014 (Ohumera) Summer Seminar, Jenuary 20-24, 2014 (Ohumera) Auturn Seminar, October 12-15, 2014 (Jilly)

Winter Senirer: February 11-14, 2015 (Gargeon-do, Korse)

日中韓それぞれをトライアングルに訪問し 学生を交えたセミナーを開催してきた

12

#### International Workshop (Natural Sciences)

- Exchange of materials in education and research and academic information
- Exchange of faculty and research scholars
- Exchange of students
- Joint research and meetings for estruction and research
- 5. Technoal assistance

Winter Seminer: Merch 9-7, 2012 (Jile) Summer Seminer: September 12-16, 2012 (Okayama) Winter Seminar: February 14-15, 2013 (Gangeon-da, Karea) Summer Seminar: September 20 (Okayama) Autumn Saminar: November 30-December 1, 2013 (Okayama) Summer Seminar: January 10, 2014 (Chayana) Summer Seminar: January 23-24, 2014 (Okayana) Autumn Seminar: October 12-15, 2014 (Jilin) Winter Seneral: February 11-14, 2015 (Gengwarns), Konsel

#### International Workshop (Natural Sciences)

Winter Sensear March S 2012 (JWn)

"The 1st international Workshop between Jilin University and Okayama University" with Jille University Field Basic Science

Presentations: 12 Oral by professors (7) and students (5)

18 Poster by students







14

#### International Workshop (Natural Sciences)

Auture: Servinar November 10-December 1, 2013 (Okasama)

"The 1st Jepan-Korea Joint Symposium and Autumn Seminar on Advanced Chemistry" uith Sungkyunkwar University **Plaid Material Sciences** 

Presentations: 14 Oral by professors (10) and students (4) 17 Poster by students







13

#### International Workshop (Natural Sciences)

Winter Scotter February 12-13, 2015 (Cangements, Korna)
"2015 BK21 Plus Symposium on HRD Center for Croative Convergence Chemical Science & The 2nd SKXU-OU Joint Symposium on Advanced Chemistry eith Sungkyonkwan University

Field Advanced Chemistry

Presentations: 26 Onal by professors (8) and students (20)

20 Poster by students







#### International Workshop (Natural Sciences)

Program for Oore Human Resources Development: Far the Achievement of Common Good (Borus: Communal) and Reversitation of Charalasi Galture in East Asia

#### Perspectives

Agreement for Research Collaboration and Dual Ph.D Degree Program

Graduate School of Natural Science and Technology, Okayama University, Japan Department of Chemistry, Okayama University, Japan

College of Science, Sungkyunkeen University, Republic of Korea Department of Chemistry, Sungkyunkwan University, Republic of Korea

- 1. Research cooperation between professors and scholars at both institutions
- 2. Eachanging students who may take courses and/or carry out cooperative research 3. Co-advising of each exchange student, two research advisors, one from each instituti
- 4. Dual Ph.D. degree if the students fulfill the degree requirements of both institutions.

International Double/Dual Degree (Ph.D.) Program: A Collaborative Graduate Program between Okayama University (Japan) and Sungkyunkwan University (Korea)



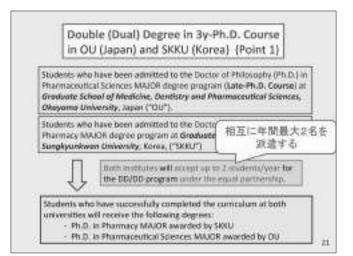


Yug Kurosalki, Ph.D.: Fed. of Oled School of Moetime, Denterly and Pharmaceutos Sciences, Osyalina (silventy) braces of GDMS (Carte to Essequent) of Advanced Pharmaceutical Education)

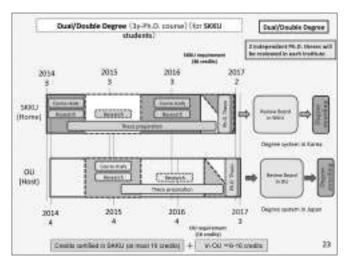
18







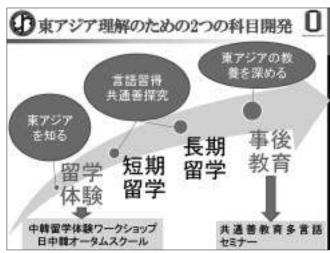






#### 特色のある取り組み紹介4 東アジア型グローバル教養教育の現場から





# H26年度中韓留学体験ワークショップ

- 吉林大学・成均館大学校での協働教育科目に発展
  - H24・25年度は、岡山大学の学生の中韓周遊型研修 旅行として実施。
- 吉林大学公共外交学院での講義・ディスカッション・FT
  - 申日韓の歴史器調問題(王秋彬副教授)
  - 中日関係の発展における民間交流の役割(王黎教授)
  - 古林大学講座(字梅花国際合作処常務副所長)
  - FT:偽滿州皇宮、一汽豊田長春発動機
  - ブレゼンテーション・ディスカッション
- 成均館大学校文科大学での講義・ディスカッション・FT
  - 朝鮮戦争と博物館展示:戦争記念館(金東建先生)
  - FT: ソウル戦争記念博物館、戦山病院・自生漢方病院、歴史博物館、38度線
  - プレゼンテーション・ディスカッション





















# 



- 日中韓の学生の協働教育に社会調査を取り入れる
- 吉林大学公共外交学院での隣畿・社会調査
  - 中国の近代化とゴミ問題(李全綱哲学社会学院副教授)
  - 社会調査: 吉林省農村部における教育、労働、生活
  - プレゼンテーション・ディスカッション
- 成均館大学校文科大学での講義・社会調査
  - 対筆21か条の要求(金束連先生)
  - 社会調査:市場、都市開発、英語教育
  - プレゼンテーション・ディスカッション
- 成業:日中韓の学生が、日中韓の書籍と英語を使い、調査・分析・腸論を行った。















#### ● 参加学生の声

#### H24中韓哲学体験W5参加者(看護学専攻2年生)

有知のこのワーケショップは、自分が思っていた以上に書籍という開墾を乗り越 えての深い物悪に繋がった。20代の多様な今、この機会を与えてもらった環境に、 本当に心から思謝の気持ちでいっぱいになった。原学の途を進む者として、今日 のプログラムも、現在、そしてこれからの学びに生かすことができる内容であり、 存金的での活動も復野に入れるボーかけとなった。風地の学生と触れ会う中で、 自分がまだは本について理解していないことも身をおて知った。そういった意味 でも、指学の意義や実現さにも気づくことのできた機会となった。

#### H26中義哲学体験WS、H27日中職オータムスクール参加(文学第3年生)

中国・韓国での研修から具体的に"つながり"の必要性を感じた私は実際に今。 私たち若い世代が実践できる共通者とは何か考えてみた。私たちには、キャン バスアジアというつながりがあり、日本・中国・韓国の学生は強く制度れている。 このようなつながりがすでにあるということを執はとてもありがたく感じつつ。もっ と学生間での対認の機会が考えることを望む、度未満先生が帰国後の演集で おっしゃったように、未来を担う学生・事者・私たちがもっと問題的に活動してい (ことが重要である。そのための第一歩として私は、身近に実践できるたいう共 進齢として今あるキャンパスアンアというつながりをより活性化させ、学生同士の が目を着やしていきたいと思う。

# ● 留学体験から海外留学へ

- H24年度中韓留学体験ワークショップ (20名)
  - 中国長期留学(3名)、韓国長期留学(4名)、米国長期留学(2名)、秦州長期留学(1名)、中国短期因学研修(8名)、韓国短期哲学研修(1名)
- H25年度中韓留学体験ワークショップ (22名)
  - 中国長期留学(18)、韓国長期留学(18)、米国長期留学(68)、中国短期哲学研集(38)
- H26年度中韓留学体験ワークショップ(22名)
  - 韓国長期留学(1名)、米国長期留学(1名)、米国短期 期間学研修(2名)、韓国短期間学研修(1名)イン ターンシップ:インド(1名)、インドネシア(1名)
- H27年度日中韓オータムスクール(10名)
  - 米国長開留学(2名)、タイ長期留学(1名)、英国短期語学研修(1名)、マレーシア長期留学(1名予定)
- 成果:参加学生総数の57%が長期・短期派遣留学へ 医学即保留学科の学生の参加率10%

# ◆ ○ 日26年度 新規CA必修科目開講

- 教養教育科目「共通善教育多言語セミナー」の開発
- ねらい(教育内容の質向上のための3要素)
  - ①長期派遣留学事後学習
    - 学生のニーズを関たす
    - 共通曲数館の実践
    - 日中韓の学生が参加するアクティブラーニング型科目
  - ②共通無共同教育
    - 研究疾薬の教育への違元
    - 日中韓三大学の教員による指導
  - ③文理融合の東アジア型グローバル教養教育科目
    - 人文社会科学、日然科学、医的業学の要素を含む
    - 今後の教育開発に向けたトライアル











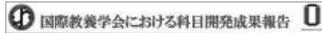
# 学生グループ研究・プレゼンテーション

- H26年度後期(共通部教育多言語セミナー)
  - 経済領域における日本と中国の共通策
  - 日中の歴史語頭

  - 果アジアの平和概念コミュニケーションと共通費
- H27年度前期(共選酬教育多書語セミナー1)
  - 日中韓の伝統行事

  - 申日韓の遊憩教育■日中韓における編集と献労
- H27年度後期(共通節教育多言語セミナー2)
  - 東アジアの領土問題(竹磨・独展)
  - 日中の歴史教科書問題
  - 日中の政治側の違い
  - 新聞報道からみる世跡の日中韓比較
  - 慰安陽智晴に関する日韓の原識の違い歯飲の変遷からみる3個間の共通情

  - 第二次世界大戦についての日中韓の認原比較



- 国際教養学会第四回全国大会(2015/3/14)
- 岡山大学 CAプログラムセッション「共通善の実現 と東アジア型グローバル教養教育」
  - ■「共通善多言語セミナー」での協働学習の成果
  - 東アジア型グローバル教養教育のモデル構築に向けて、その可能性と課題について検討
  - 学生発表(成均館大学校、吉林大学、岡山大学 の学生の共同発表)
    - ■「共通蓄からみる平和とは」 (金東県、徳永百合)
    - ■「グローバル化と歴史の共通器機」 (木村崇志、時佳希)





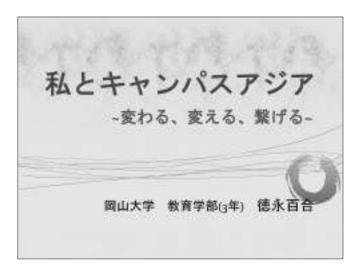


## おわりに:問題から生まれる対話の可能性

「問題は、どのようにしてひとつの世界にともに生きることをまなぶかである。そのためには、(中略)ともに存在するグローバルな他者に対する人類学的な想像カー同じ人間として共感するカーを働かせることが重要であると思われる。」(山下、2012)

- 哲学的な問いが学生の共通意識を引き出すしかけとなる
- 学生・教員の高度なモビリティが実現する動態的な 教室=学びの空間の創造
- 高等教育機関が担うべき役割であり、東アジア型グローバル教養教育に不可欠な条件

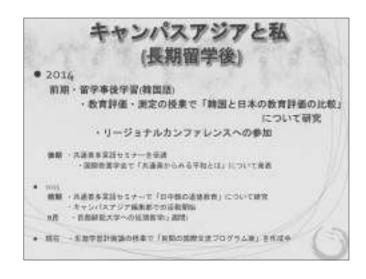
#### 学生代表報告1

























#### 

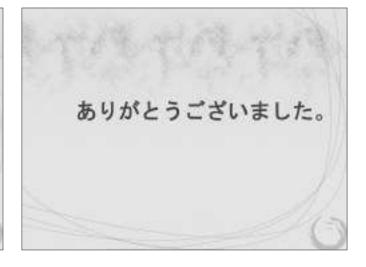
を作成中

## 

# グローバル教養とは ・変わる力 語学力や経度い知識を基盤として生活のあらゆる 場合で観察に物事を感じ取り、多様な個信頼を母報 しょうとしたり、受け入れていく力 ・変える力 新しい環境に自分を構成させたり、既存の情値観に とらわれずに錯接応要にルールや方法を変えていく力 ・繋げる力 様々な学びや人との出会いを既存の知識や専門分野に

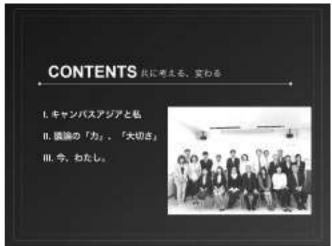
繋がりを汲めていく力

つなげて新しいものや出会いを生み出したり、学びや



#### 学生代表報告2

















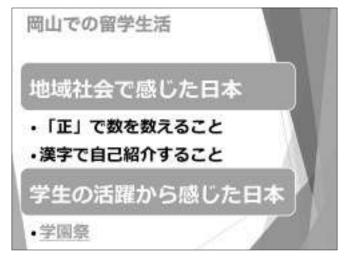




#### 学生代表報告3















#### 出版物一覧

#### キャンパス・アジア共通教科書シリーズ

キャンパス・アジア共通教科書シリーズ プロローグ

荒木勝 『東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム (Program for Core Human Resources Development: For the Achievement of the Common Good and a Re-evaluation of Classical Culture in East Asia) 』岡山大学キャンパス・アジア、2012年12月。



要約:キャンパス・アジア「スタートアップ・カンファレンス」の荒木理事講演をベースにした、本プログラムの基本理念を収めた教科書。 日英中韓4ヶ国語。

キャンパス・アジア共通教科書シリーズ I

沈美華『The Relevance of Aristotle's 'Justice' for Confucian Politics』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。要約:サマースクールで使われた西洋思想と東洋思想の対話についての教科書。

キャンパス・アジア共通教科書シリーズ II

金美徳『東アジアの経済協力と共通利益 東アジアの経済連携―アジアと日本の知恵を生かす―』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。

要約:サマースクールで使われている東アジア経済協力に関する教科書。

キャンパス・アジア共通教科書シリーズⅢ

荒木勝『東アジアの共通善を目指して(Seeking the Common Good in East Asia)』岡山大学キャンパス・アジア、2014年3月。

要約:サマースクールで使われている東アジアの共通善に関する教科書。

共通善教育:サマースクール共通善講義資料 I

荒木勝、孫路易、遊佐徹『伝統と思想』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。

要約:サマースクールで使われている東アジアの伝統と思想に関する教科書。

共通善教育:サマースクール共通善講義資料Ⅱ

May SIM(沈美華)『The Relevance of Aristotle's 'Justice' for Confucian Politics』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。

要約:アリストテレスの正義論と孔子の思想を比較検討。共通善についても考察。

共通善教育:サマースクール共通善講義資料Ⅲ

金美徳『東アジアの経済協力と共通利益 東アジアの経済連携―アジアと日本の知恵を生かす―』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。

要約:「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか」に関する論議

#### 共通善教育:サマースクール共通善講義資料IV

沈海濤『東アジアにおける「共通利益」と国際社会』岡山大学キャンパス・アジア、2013年7月。

要約:「東アジア国際関係が激動する中、国際社会に共通利益とアイデンティティに関する再検討の必要性」や「リージョナリズム視野下の東アジア地域協力の限界」について、「政経分離」または「政経不可分」という視点で「東アジア国際社会の統合に必要なもの」を考える。

#### キャンパス・アジア共通教科書

『東アジアの経済協力と共通利益』岡山大学キャンパス・アジア、2015年3月。

田口雅弘、金美徳編著『キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの経済協力と共通利益』ふくろう出版、2016年2月。第1章 グローバル化と東アジア/第2章 東アジアの経済連携 一アジアと日本の知恵を生かす一/第3章 日本経済の発展と構造変化/第4章 日本経済が直面する様々な課題について/第5章 胡錦濤・温家宝体制の回顧と今後の中国経済展望/第6章 韓国経済の現状と課題/第7章 貿易投資に見る日本と中国の経済関係/第8章 東アジア政治関係と経済協力の課題 一日中関係を中心に一

#### キャンパス・アジア共通善教育研究シリーズ

#### 2012年3月共通善教育研究国際フォーラム

三大学共通善教育研究会『研究報告集 I 』岡山大学キャンパス・アジア、2012年4月。要約:この『研究報告集 I 』は、2012年3月26、27日に開催された「共通善教育研究フォーラム」に 提出された報告概要をまとめたものである。原稿は日本語、中国語、韓国語に分かれているが、中国語、韓国語は日本語に翻訳されている。また執筆者の所属などについては、当該フォーラム開催時の記録に基づいて作成されている。



#### 2012年11月共通善教育研究国際フォーラム

三大学共通善教育研究会『研究報告集 II』岡山大学キャンパス・アジア、2012年12月。

要約:この「共通善教育研究フォーラム II」は、キャンパス・アジア共通教科書の編著を目指すものである。報告者及び内容は日本国内に限定するが、諸多の課題のうち、東アジアにおける伝統的思想、漢字文化、経済、現代正義論などをテーマにし、とりわけ東アジア日中韓産国の経済及び相互関係に中点をおいて行う。

#### 2013年3月共通善教育研究国際シンポジウム

三大学共通善教育研究会『共通善教育研究国際シンポジウム報告集』岡山大学キャンパス・アジア、2013年3月。要約:このシンポジウムは、これまでの研究成果に基づいて、(1)現代「正義論」の共通性―「東洋」と「西洋」との比較、(2)東アジア 伝統思想共通性、(3)東アジアの経済協力と共通利益、(4)東アジアの近現代史と国際関係、の四部に分けて行われる。今回のシンポジウムは上記の各分野の研究課題を再確認するとともに、研究内容の整合性を図りつつ東南アジアの共通性を発見し、キャンパス・アジア共通善教育共通テキストの編述を目指す。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『2013年度CAMPUS Asia学生文集』岡山大学キャンパスアジア、2013年3月。 要約:2013年度長期派遣・受入、短期派遣・受入、リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、サマースクール、ナノバイオ長期・短期受入などキャンパス・アジア共通善教育プログラムを通して、学生自身が書き留めた成長記録を凝縮した一冊。 岡山大学キャンパス・アジア事務局『2012年度CAMPUS Asia学生文集』岡山大学キャンパス・アジア、2012年3月。 要約:2012年度長期派遣・受入、短期派遣・受入、リージョナル・カンファレンス、まちなかキャンパス、サマースクールなどキャンパス ス・アジア共通善教育プログラムを通して、学生自身が書き留めた成長記録を凝縮した一冊。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『2013-2014 Okayama University CAMPUS Asia Student Conference』岡山 大学キャンパス・アジア、2014年3月。

要約:2013年度キャンパス・アジアプログラム長期派遣・受入学生が「私の理解した中国/韓国/日本:共通善ヘアプローチ」をテーマに、母国語と派遣先国の言語で発表した内容をまとめた一冊。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『2012年度学生フォーラム』岡山大学キャンパス・アジア、2013年3月。

要約:2012年度キャンパス・アジアプログラム長期派遣・受入学生が「私の理解した中国/韓国/日本:共通善ヘアプローチ」をテーマに、母国語と派遣先国の言語で発表した内容をまとめた一冊です。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『2014年中韓ワークショップ』岡山大学キャンパス・アジア、2014年3月。

要約:2013年度キャンパス・アジアプログラム短期派遣プログラムの一環として、22名の学生を中国上海市・韓国ソウル市へ派遣。 現地大学生との交流、企業視察、社会見学などを通して、中韓歴史と現代社会を理解し、日中間三国における共通善について 考えました。今回初めて学生TAを参加させて、学生の主体性を重視したプログラム編成を試行。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『2013年中韓ワークショップ』岡山大学キャンパス・アジア、2013年3月。

要約:2012年度キャンパス・アジアプログラム短期派遣プログラムの一環として、19名の学生を中国上海市・韓国ソウル市へ派遣。 現地大学生との交流、企業視察、社会見学などを通して、中韓歴史と現代社会を理解し、日中間三国における共通善について 討論。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『キャンパス・アジア 構想・拡大・深化 — これまでの成果と今後の展開—』岡山大学キャンパス・アジア、2015年3月。

要約:キャンパス・アジアプログラムの紹介と、これまでの成果をダイジェスト版で紹介。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『キャンパス・アジア学生文集2014』岡山大学キャンパス・アジア、2015年3月。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『キャンパス・アジア中韓ワークショップ学生文集2014』岡山大学キャンパス・アジア、2015年3月。

岡山大学キャンパス・アジア事務局『東アジアの伝統思想(内部資料)』岡山大学キャンパス・アジア、2015年3月。

[ CAMPUS Asia Winter Seminar on Life and Material Sciences in Okayama 2013 ]

Okayama University CAMPUS Asia Promotion Office, Jan.23, 2014.

Introduction: Program for core human resources development: for the achievement of common good(Bonum Commune) and re-evaluation of classical culture in East Asia / Life and material sciences.

『The 1st Japan-Korea Joint Symposium on Pharmaceutical Researches in Okayama 2013』 Okayama University CAMPUS Asia Promotion Office, Dec.12, 2013.

¶ The 1st Japan-Korea Joint Symposium and Autumn Seminar on Advanced Chemistry ¶ Okayama University CAMPUS Asia Promotion Office, Nov.30, 2013.

Introduction: Program for core human resources development: for the achievement of common good(Bonum Commune) and re-evaluation of classical culture in East Asia / Advanced Chemistry.

[Summer Seminar on Natural Science 2013] Okayama University CAMPUS Asia Promotion Office, Sep.20, 2013.

Introduction: Proceeding for the summer seminar in Okayama University.

#### その他の刊行物

成均館大学東アジア古典学国際学術会議資料集

『東アジア漢文学、共通性および固有性―東アジア古典学の可能性と難関』成均館大学キャンパス・アジア、2012年11月。

概要:「漢文学」を通じて国家や地域の単位を越え、「東アジア」の次元で東アジアの言語生活の共通性と差異を新しく認識する。

CAMPUS Asiaパイロット事業 プログラム開発:科目開発提案書

黄鎬徳、文科大学共通専攻科目『東アジア現代古典―講義開設、趣旨、目的、主要講義内容』成均館大学キャンパス・アジア、2012年11月。

概要:東アジア的地平から文化的な共同性を探求・模索する。19世紀末以降形成された個別国家の近代国民文学を東アジアの現代古典という地平から再読し、個別国民文学・民族文学の概念を脱構築的に再考しながら批判的な歴史認識なかで共生と相互協力を目指せる価値を涵養する。

『CAMPUS Asia留学体験文集』成均館大学キャンパス・アジア、2014年4月。 要約:2012-2014学生文集。

『吉林大学2013年度キャンパス・アジアプログラム事業報告書』吉林大学キャンパス・アジア、2014年4月。

『吉林大学2012年度キャンパス・アジアプログラム事業報告書』吉林大学キャンパス・アジア、2013年1月。

『平成24年度実績報告書』岡山大学キャンパス・アジア事務局、2013年3月。

第1号

(1ページ)

## キャンパス・アジア学生サークル新聞『ハレジア』



利益を前時に実現すること統的な教養を身に一げ 個人の利益を社会共通の一先し、東アジア共通的信 韓国心政均無大学とこも の育成を日指している。 打ちされた中核的人自己 を実生るは、教養に歯 ある、中国の資林大学、 「東アジアの共通資 長通郷 とは、 社会の共有され Ą と、一教育を朝人的な 育之解決策を模索するこ 組をともに顕确しながら エリー上教育だけでなく

ジアは、パートナー校で

間中大学やゲンパステ

我有学ること

jt;

通教育を選じて共選の誰

ジアめ選終日や蛇域学習 らの専門分野の見識を出

の課題について考える。 を通し、鬼アジアの共通

レジ

た伝統的価値を再解釈し一様々な分野における議師 東アジアが共通に抱める も光流されることこであ 福岡、錦菜的なレベルマ この「共通海」を由 12)

B 中(柳花 昭立(名 ( 田教) 御屋 大局 (地域観光) 考えていく 伝統協制 を生かし、 ア共通の価値及び開始を 関山という地域の特質 隣山からアジ 地域行政

私は道も全然知らず、

5

機関にいい中で、機関 に封ける東アジア共康 の特色を生かし、各分野 阿じく 一七の十一 隣山ならでは

ショング

いが、幼分後、やはり選手になって

を通して解決策を探索す

ることができた

さしいおじさんに連れられて家に 人に見せて聞いたり、やっとあると 写真があったので、写真を持って し思った。参いにも、窓から撮った

現地で含語を学ぶと同時 れることで、 に根拠の社会や文化と解 上一日報管中全見報之 知知報学プララ ALL MIL

解力の向上を目指す ーション徒力や異文化職 「サヤースタール

Hi / 日本 /

いうところで住んでい これからシェアハウスと ら、もう夜の11時ごろ ところまで案内された になっていました。私は 山に来て、自分の住む 4月1日、発行機で ができる 本の生活を見ると、もっと深く環境

から来たのか今までも理解できな も覚えてない状態で、糊了時に散惨 と信じていた (この自信略はどこ へ行ってしまった、自分は迷わない とで興奮が薄くせいか、 んでいる場所や家の名が 盟日、日本に果たこ 分の家の不も花も、細かいところま ている。たぎん中国人にとって、こ する主人公として、誰が代々伝わっ 生活の美しさを発見する心は知識す の細かい部分にまで追求する精神な **大郎も質が高くないけど、敵を駆消** でに追求する精神を持っている。株 日本人は小さなものが好きで、自

200

べきことだと思う。 李沫さん

を行うのですかり

ました。

国語多び、牛株は渡り 被打 年日以中期中以中

ての

板

万里の長城(中国

中国から家た吉祥大学の 中心事。一个个月1日 第子生事津 (リマツ)と で二ヶ月でらいになり 似めて日本に来て、もう 響さん、こんにちは、 い。長春の朝は車や人がいっぱいな 側山の鞘は人が思ったより少な

状態だが、ここの軽はなんだかのん 日本人の暮らしの様子を大体知って けたり、日本のドラマを見たりして、 し、人も声を出さない非正様く。 だか気分が飾っているという感じが びりしている。今息うと中国は車の するが、日本の寒は大体管が出ない 音や人の誰が大きいから、朝はなん いたが、今私は自分の目で本当の日 大学で日本文化に関する程業を参

短期の哲学もあるんです 期があるということは、 古れてのますよ ようなんですね

窓の育都師範大学に行き 難問の経期留学があり出 金額ではどんなこと 北が参加した時は北 (はい) ※月に約3

# 新学ることが 島で がーショグのとれる人材 朗柳磯 金素などでリー 地域行政 16 んにもはもじまのマ きっそる聞いてみまし

のすもしかして怪しい祖 て一体どんなことしてる コートキャラクターの マーカーマイマイラ t

ラニゼで ヒキサータ

ハレジア始動ル

は明かだ

だしの側側山から、

が発行すると人新聞、戸 アグアへのをおる」とい

**吐水杆 佐藤、徳水 職** 

ラムに取り組んでいる るために、関山大学では

次のような様なグラ ある。二の目的を連成す

保作メンバー

(数)、オキ、平口仕

持っている解析について 横りなどなど、皆さんが、をしていますかり アンアはどんな取り組 鏡山大学キャンパス

どんなことをしますかっ

そのサラサムでは

CAサークル新聞委員

サー本料 まにでもの

ついて 学典には回発行 行事で日中韓の出来事に

していく子田です。ヒト

偏様を持った方はで練

五に整理 帯学だけでな

整門科目も受け、 さらにキャンパスア

年または半年間学生を和

成功解大学のな校で

**五闸中大学 青林大学** 

一共戦闘学プラクラ

間の事務確当で!

関山大学

2015年6月15日

校である、中国の吉林大 学, 韓国の成功解本学と ととも代、東アジアのリ スケジアは、バ ーがしたむりつる人材の 香 明山大学やされ

年間がたけなく 全部道し、単年間ない 太任: 校が相互に催年生 長期留学プララ

すり、自然に親しるなが 動しま。そして、カナ れていて、山も見られま キャンパスの関しきに属 の体験だと思いますね シバスの必要なな場合 知識を学ぶのは最高 何よりも順大

和像的でしたが、 越木の 五人 人々の生活、文化、雰囲 ちるなして伊田街行つ 気を知り中国をより身近 たりと中国の生政企業際 に動せられるようになり 人が行く上うな意気に行 「神味できたこと」で、 ったり、パスや臨車を奏

解決に取り揺むことので おる人材の背視を仕指し を学び そうした課題の 価値観や共通の推測など 受け、東アジアの共通の

北京ダックを食べた 万組の貴城に行った

ました土本省に桐葉的な りして 中国を体で感じ 毎日でした。 前職に残っているこ

ています

アジアル開展する機能を 教えてくれました。 校前 初心者の私連にも丁幸に 授業を受けました。売生町、歌や土権等、書間の 後や休日などの自由時間 はみな確して、出版

みた。

AFT

育成を担指してきまし

組みが長期留学プロテラ その最も重要な取り

とて、実際はお話を開 岡山大学に原学している でぬましまで、御史学 本村 米月は での生だとうですかで が来られているというこ 中国人留学生の事体さん

とはありますかう 線光様ももちろん

(被义

上 種に載したり、焼む

よ、約じ無味の発明だち 部団もたくさんあります

したり、刺しい認識も生



(1ページ) 第2号 CampusAsia事務局 2015年9月16日

#### 語られた「それぞれの思い」 とはなにか?



様了経書を受け取る金束原(そム ドンスク)さん

時間でした。今里では、

いかのやすっ ぶつけなければならな

たんです。しかし一度

人で放行を行ってる

に暮らせようになっ

思い出と通信を知るよ

そしてシェアハウス

仁私に「夢のような」

専門機業などに熱心に取 サヤンパス中央図書館で 大学での研学生活を終め ぞれ成果を発表し、四山 中国人自学生の名がそれ 生アオーラムが行われ ヨナルカンプアレンス 多言語サスナー、リージ くくった。信学生をもは、 た。體人質生素、 キャンパメテジテ朝学 ていったようであった。 細書に対する理解を探め

年月7日金曜日、練路

り様な中で、

それぞれ共

いるようであった。

たものとなっており、

4

Ш

**わし** ア

中韓の未来

して帰国していること

グラムで交流した学生の

多さです。岡山大学だけ

継えどら 改姓 を実践し また、どの根本もちか を考える発表となった。 生は大学院生が多く、国 特に、今期の受け入れ学 開北大学で過ごし、粉は 分野からより深く古通弊 際政治や文学などの専門 上年期という時期を

に動した学生をプレー についての成業発表がな 中でも言われていた難 プの中で共に学びを開め ていったようであった。 センナー 最後に日生生が講評の 、ビスを生

ラムの内容は年を導く それぞれの専門を括かし 世期末の学生フォー 料初めてじんプログラム 生が中心となって腕を接 かの共通費」「美官路 - タル無行の「ハレジア」 食べながら顔学生活の即 にはダループ発表が行わ 何子生個人の発表の後 ジュアハウスのな 年も非常にレベルの高い

是を進んでいただきない 思いただくほどのできて ファレンスが行われるの ラン、先生方から<br />
系統件

された。こ人学生も、今一た、会頭は日本人男子学 仕上がったった。ナオ 勝として韓国料理のチヂ い由について語り合う をかつくつて、 みんなで - ラム後には恒例の共通

あった。他期末にもカン・バス・アジアではさまざ

したが、成果としてどの まな取り組みをしてきま ようなことが挙げられま り、二れ主で、キャン

これまでの成業について ヤーである田口先をご、 アのプログラムマネージ 高 キャンパステジ

申買な思いを聞いてみまーラムで受入・採躍しまし はダラムに育ったことは くの学生を、このプログ ですから、個難の広いプ 大きな成果です。 **ウもも年間できりの人近** 感じてもらうことが重要 た。幸和平の国を見で 次に、プログラムの費

寫さです。人文・社会科 学系の多分析セミナー。

自然科学名国際セミナ がこれらのプログラムを 言語は英語ですが、英語 に関わった学生の語学力 通じて青っていきまし くの分野の学生の皆さん の言語をしつかりと学ぶ のみに頼らず、細事の国 な成果です。 3回の共用 の日報はしい由上も大き んどの長期留学生が絵画 **「権めて重要です。はと** ことは、松野難にとう また。このプログラム

プログラムを開発し、多 レンスなど、ルニータ リージョナル・カンファ ル、中韓サータションブ、 オコース、サマースター 原有地ネナノ・

ちを、どのように引き出来和小会指を求める気持 うやく手法が確立されて 皆さんが元々符っている 書言心した点ですが、 交流を建して商者へかん 共通物は唯学だけで学べ 文なければなりません。 が、このプログラムの よう」されるものです。 それぞれの学生の異文化 再です。しかしながら その物針となるのが共通 然で生かしていくかを考 その知識をどのように批 していくかというところ らものではありません。 門を学びながら、同様に **るでしょう。情さんは専** 提達も大きな成果といえ そして、共通資理解の 務らしく思います。

# Okayama University Vol.2

そして夏休みは沢山の個 半年間での体験跳で締め わりといってして、この カミングデイで韓国料理 は次回号にご順称くださ 学イベントさですがごれ なくってもらいました。 完作のます!にAに興味 を持つた方はじ棟一階の 皆さん時望の間で身帯 8 楚なまたが 今回は学期の人作時 編集担当の佐藤で 19月にはホーム

て、光々の現実に従っ しています。あっとい で色々な準備を 韓国はも月から 年期岡山太学で 国ソウルに戻っ ので、私は今韓 個学したジジョ 去年10月から1 ンと申します。 見たのではないか。と いう考えが出て来るか 長くて申せだった事を

> 私は主た始まった韓国 韓国に従ってきたな

での生活が少し心配で

す。よく慣れるかな?

が認める、銀行マニア **今になって、精関自他** あと、放行で得られる

になりました。

新学期が始まる るりえで締ち大きく食 文化など慣れていない わったのは「摂戦する むです。私にとって、 公挑戦でした。 詳細古 こと自体が私には大き で生活するようにした たのです。まず、 カーを持つようになっ 一年間の哲学生活ま でものことに動かり 器 た。また、日本語の授 なることができまし 中国友達たちと親しく で、上方容易に日本 英国 欧州 南米石之 集を受けながら米国や の友達と優してなりな

とかできました。 も開催的に経験するこ がもいろんな国の文化 た機、もつとしずけー 順定されていた私の生 学の前「舞踊」だけで 話と考えが留学を決め パル」になってきまし gg うまくやってきたの かし、瞬山での生活を 金がんだからです。そ ないこと思いますし のような心配です。 また友達できるかなり の関多くの桃城と通信 で、形は今からも間

でした。並く知らない とも私には大きな挑戦 発で、経験して、 所に行って、あれずれ しるのが少しは難かつ また、別打に行くこ 私がいない関山はどう

単地匠 ウンジョンパさん。

でムーミンと一種に

ですので、心配しない た会いましょう! かや私はいつも正し でください。瞬山 ですかり お光気です

レベルの検定試験に合格

学生フォーラム後のチヂミバーティでの集合写真

駆動の留学はもちろん、

どれなどを表して、さ ージョナル・カンファ では、これまで最期や

キャンパス・アジ

ようにご餐になっていま の取り組みを先生はどの まざまな学生が活動して

これからの

世

学生の皆らんが受

えたため難修しなかっ

た。希学群はこのよう

ひました。こうした学集

を私たちは育てないと考

えています。そうした意 て関うを業別できる人材

12% 329 第2号 CempusAsia事務局 2015年9月16日



否林での授業選集

中国路の投棄だけを確 事職に入らな、 まずは 間の生活を紹介するこ 学生情もついに教り返 学習質がら、今学期は ればと思う。では早産 生調を機解してもらえ でも資林大学での選挙 を超えた。私の単単 無体器に換入し、 した。平日の朝の時 みならんにかし w 午後は曜日によってど たところであろうか が"東京にひぎ" 気に 李精で育うならばサー 中の間で全て授業は終 ーキング、総合といつ ディング、サイティン わる。授業の料量は日

の基礎を開めたいと考 5、 4学報傳口中国籍 税率なども開講された 他力試験HラKの練習 ジネス中国籍で中国籍

報復をするもれて うに使える、投棄の子 遊ぶもとし、 ヨーち通 どこかく出かけるも上 ろつもりである。年後 は梅田県分の経さなよ 世界各国の友達と

明1世は十五八日活 使目号、半年間の子音 群外学者などである。 実際に長事市内に基く りの学習する理学や る。中国の政策や法律 か通して日中韓の間 アジアの極重も行われ

に関する接乗も履修す な授業に加えて、自分力 の専門分野である工学 かではないので来る前 小 も明念機合理策のたる だまだ納得のいくレベ 下中國縣組力以職実に の日 向上した。しかし、主 を 返 古 振

と最初は严黙の機能も ラスピプラスにと考え 多かったが、今では上 A. 食生活や育生活な S.S.V. 半くいかないことも かり現地の生活に慣れ るようになった。 ヶ月近く生活し、 すつ の心中国での生活は、 そして次は生活所に 既に長春でり して変建して、衆第に 2、中国での生活は前 力が身についたと思 の生活を通して適応報 物は考えよう。 のとは違う。 無給される日本でのも 金子が時間通りに、そ 九江鄉江街之, 中国下 楽しい関集や ものばかりではな 郷に入 Œ





各国の学生との竞事会

ここ長者でみなさんに 解、各国の留学生との ひみなさんに直接体験 でいないは、あるは世 語の魅力を紹介しされ があれば、長春以外の 激となっている。 交流など全てが私の概 倒される経済成長の連 主権も関してみたい ・吉林大学下の留学生 生だ生だ異者。 無いできればと意 ##E F.

間です。文化も首集も基大声で笑いあっている時

同じ繊維で盛り上がり、 生が同じ空間を奏言し、 あります。それは学生問

皇

側の半生が関い時

モレママの機に自分がい

関し空間を共有し



何口潤弘教授とのインタビュー の様子

毎に好きて、活動に参加 団体や大学もたくさんめ 數以外にも、日中韓三国 ます。僕はこの瞬間が幸 あと感じのと、とても様 員身も活動を続けていき ことを育ったともに 瞬間がたくさん生まれる がりを広げ、実い会える のなかで国を組えたつな をます形: ころした情報 の友好活動を纏めている して上かったた歴 学かで単せな概分になり キャンパスアジアの情 5 (8)

たいと思います。

という基準は共通器の押し対するとまざいと不安が が大きく変化しつつあり あります。まず、中間や ます。その中で、日本は 各国の大きな構造変化に 韓国の著しい発展で、ア ジアマのパワーパランス 第で成長を維持してきま 界主融在核以末, 地方政 前に考える姿勢を搾りて 自分たちの樹脂として真 によりも、 舞い人がそう でも焼っていますが、な おが編集した典通教科書 出しているといえます 仁も戦(さし) みを生み ブーの検索が、相互関係 たは国のもう一段高いス 適られています。こうし もらうことが、大明です。 した問題に関心を持ち、 して、大きな精造伝統を 府に信存した内裏拡大股 いでいます。中国は、他 したが、それが観界に壊 そうと左膊瞳は、秋五 ジへのステップアコ

ジャーを務める アのプログラムマネ 魔上サキケンパスアジ 元料教授、2010年 学院・社会文化科学群 さひろ) 関山大羊大

ようになりました。

資学生と交流している

何度も動れる時間が

ロケーションを取れる ともあり、うまくコエ 大学で、語字が上達した

田口種型(たぐちま

た成長構造の動揺にあえ 域の差別と中国に依存し の使命だと思っていま うした意識と力を持つた さたいと思いますし、セ なんとか解決していただ なかった開棚を、 バス・アジアプログラム 代の新鮮で季戦な知恵で 人材を育てるのがキャン 智い世

では 日本日 をシ 2学年が下であることが 企業又ています 備よりも学年が上 4年が描とうとし ています。知めの のが難しか ようになって、 り、対元の方 数学出の前題 ションを取る は、信学生も 情動に関わる 777 ah

てくれたことが、最もち なによりも、キャンパメナ シジケプログラムを適じ ようなことですかり 学生に求めるものほどの

横と

春的に片マンパス・アジ

れるよう

しつかりとし

めではなく、最もプログ アプログラムに参加する

るものは、情報性と包容 されいと考えています。 たプルグラムに育ててい これから四学生に求め

水で培われた価値観がべ

せる能力です。「正しい」 された人間性を磨く知力

一里」に 判断を下

会得主せん。

関係悪化の底流には、

一次となります

キャンパス・アジ

真質な文化や社会との機 報酬の利行シェア・ハウ 無難ではいるれません。 ます。そうした機響で、 な問題や多様な様値観を していても、グローバル は、彼に日本だけで生味 触は大きな声感いがあり 即った人々との交流とは 響さんの他代 くれていることは、とて つムを集引し、 拡大して 頼もしく思います。

れしい成果といえます。

私たちの職場や地域社会」を豊かで使みのあるプロ 利 ボテンパタ・アジ な技能を担っています。 は、サヤンジス・アンド さを中心とした機動など キャンパス・アジア学生

アーで活動したことを時 かな知識と教養に実打ち

でサーダーシップをとっ

グラムに小る上で、大き 社会の中では、自己主張 田口! 日田安全、これのカブ、 私たちも、皆さんが将一番はできません。そして、

何よりも大切なのは、量

CAMPUS ANI ければ集合でいけませ らの時代は、積極性がな 力と何節力です。これか

を通すだけではチーム作 す。機棒に、ガガーバル ていることだと思いま ら、誓さんからだで寄せ したことがある学生な ん。それは、留学を経験 9 当初に比べ、魔館の日中 アプログラムが増まった

の関係が政争していく中 守が、その後類係は大変 で輪まったプログラムで 韓の関係はどう変化した とお考えですか? もなると日中韓

悪化していると言わざる

韓国は、射精の成長に大 連備はできていません。 すが、日米幅から軸屋を さく書りかかった福岡博 アジアに変える精神的な

青栗に、成長十るアジア 少子高野化と経済体庫を との連携と一層のグロー パル化を求められていま

111

山大学に在籍する学生を

など様々な人が贈立での フードを楽しむカップル ち寄る学生、無々の単台 そこでは、学校帰りに立

食事を楽しむ姿が見られ

上ゥルが出店した。 囲

行われたホームカミング 山大学律局やキンパスで

10月17日

韓天の下開

国風楽器巻きであるキン

パなどが売られている。

想」やカレー

デイにキャンパメアジア

知的、調山大学のヨ・

が矢かせない。まに韓国 アジアサータルは昨年に 機構版や吹奏楽のヨンサ 般の方々も多く訪れた。 といっても職会の食べ物 ので韓国の是台でよく売 引き続き公回日の参加 にぎわった。キャンベス れ、金橋は一日を通して たトリボゲーおでん・韓 もちを甘申いタンで炒め もにあり、ホットタ・和 の理合は、適りのあらご る。韓国といえば、なん の「おやき」のようなも 「ボットタ」を販売した。 ホットかとは、韓国風 れているおやつであ ト、お茶会なども関か 韓国のお菓子である **輸頭を重ねた、生地は水** グの生地や具材から製行 おすすめしたい。 量台に行ってみることを ぜひ韓国の文化でもある を訪れる千定のある方は ものばかりなので、韓国 な価格で簡単に楽しめる のまた、どれも思え 出現にあたり、本ツト

一様、具材が包みにくく、 は、具材が包みにくく、 こともあった。生地が適 飛び出してしまってい 対に張らかすぎたりする した意感になったり、反 なだけで、硬くばきばき や小麦の分量が少し変わ 神年度参加した学生

Okayama University Campus Asia Program

展研を作った方はヒ練 付けながら、次回者に期 情さん体調管理には気を 時の事務施生で! 特してください。セ人に

ざいます。今回は夏休み かにやや から新学期の開始にかけ 等くなってきましたが, ますり 今門 秘密組織シ だくさんで紹介しちゃい エアハウスの正体が明ら このイベントを写真盛り 日も続くなり、晩々と 来ました来ましたさ 焼きまありがとう

かっせて や野菜を炒めた韓国料 具材にもこだわった。 就 チャプチェー材率や春雨 作会では、今回販売した 作ることが出来た。また、 みやすくおいしい生地を ながらも、生地を何度も を中心に物だらけになり 納得のいく但

セなユニークなものも試 してみた。また、サイブ 外にもチョコパナナや生 地に抹茶を入れるなど様 エの味付けやカレーに あた五 れいな内形のものを作る しまつていたものも 日手際よく伝みやすいも 田山 ことができた。また、 おらず中身が飛び出して のが出来、りまく似めて できなかった生地も、当 であった。初めはうまく を十分に発揮出来たよう ながらも、自分たちのカ く人、それぞれが楽しみ 村を包む人、売る人、 した。生地生作る人 伏山の学生が参加 ムカミングデイ当 n è

祝ハレジア自号発行!

水メトク網理中の写真

えてみることで食感や味 ジアサーダルのメンバー **花工夫を得らした。 娘僧** 段階から、キャンパスア いれる野菜の切り方を宝 とりの活躍により、一時期割ってくれた。 一人ひ 学生の人は、最後は服が トクを焼いてくれた男子 油まみれになりながら、 近1日中、美味しいボア

機あった 大学で管学生所をスター でホームカミングデイに の留学生も参加し、全賞 トさせた韓国・中国から を始め、10月から隣山 なつた。熱々焼きたての もあるほどの、大塩化と さんに持ってもちうごと ホットクは小さい子供か、の力を積集することが出なった。熱タ焼きたての、を出しながら、それぞれ は生産が同じ合わずお客

私はこの

りやすくがしてくれる

ニスチャーなどで分か

ので、しだいに軽等に

キットクの生地、これでます((左からスジンさん、コンピンさん、明月さん)

先生から 授業でくださいまし

う企画なのか、外間と を知ってももおうとい POPが大好きなので と無料でした。私はる はバスポートを見せる た。 AMALINATOR



ですが、授業は全て韓 では韓国語の経常。私

ったわけではなく、

月曜日から金曜日ま

ESTIVAL0015

に参加したことです

に最初は戸郷いまし 国語で連められること は韓国新初級のケラス

クラスメイトと韓服でパシャリ!

\* Et が趣味じ ムに参加し 学プログラ と むから てよかった 韓国知典部

先生にはも 様で学部の 考えなさい かんよっと や極葉の関 感じていま 上も間 す。テスト を学びつつ、国際交流 多かったです、韓国語 どいろんな国籍の人が メリカ、オランダ、中 もできてとてもいい様 間、韓国、プランスな

きんのことを得られま に参加したことでたく たが、このプログラム 参加も迷ったりしまし 特に印象に残っている けたらしていました。 は違いさころまで出か ソウルの側に出ていっ 素でした。 て傲躍したり、由日に プログラム期間は、 k P D P

恋日や直機が落とされ ました。日本の粉製配 しかし、韓国は過去上 かあれば筋棒をして患 た日など、たいてい何 との大きな違いを感じ い愛闍気で終わる。

とうれしいです。 これを購んだら、行き こうか迷っている人が んしもし韓国哲学にい 類はかりではありませ たいと思ってもらえる (字) 古

15日に行われた終戦 記念目フィブに行って も常生れました。 た日であるの日15日 国が日本から解放され とてもつれしかったで 米ました。 二三に日本 プログラム相関は韓 207 なのでしょう。 もその一環だろうと思 に見えました。 サイブ に日を向けているよう りも現在街、 緒に祝おっということ い生した。みんなで 済が蘇騰してきたこと 報学を言っても、 杜去 22

ました。 韓国郡初級の

慣れていくことができ

クラスだったので、ア

ができて楽しかったと思 ち多くの話を交わすこと キム・ユンピンさんは、 者の1人である個学生の 緒に由ットクを作りなが 会うことができたし、一 です。ホームカミングデ イを得して新しい人々と 書加して本当に負かった 来たからであろう。 ホームカミングデイに 蠹 きたい 復去った。 います。 した話した

食べいたえもあり、韓国

であった。特に、チャブ

も年配の方まで多くの方 に楽しんでもらえたよう

サルを白んだホットかは

ると好味であった。 料理を一度に一度楽しめ

年や国籍を超え皆が意見

今日の成功のカギは芋

スアジアマータルの活動 に一度を進んでいただ ある方は是病、キャンパ 題中であるため、異様が 一般と、仲間間主の中も 大きなイベントを通して ームカミングデイという 今後も面目い湾動を企 di.

学生が仲間に加わった。

回。間山大学に来た僧

が動まった。

初めのうちは、なんと

ボテーブルを囲んで会食 その後、豪華な料理の並

ジアにも自名の新しい壁 **あもので、キャンパメア** れば、新たな出会いもあ

歓迎のあいさつがあり、

の田口教授による、 プログラムマキージ

まる日本での生活に希望 学生だらは、これから始

宗宮に満ち隠れている

あろう。そんな哲学生

互いに自己紹介をしてい なく類恥ずかしそうな、

た学生だちも、会が進む 少し緊張気味な密持ちで が始まった。学期が実わ

合作も要体みが終わ いよい上後期の検集

学生サータルの連行の れた。キャンパスアジア 新たな出

たな始

主 1)

かち合っていた。ゲー

の結果に、1チームが全

だけでなく中国語や韓国

裏びまチームみんだで分

関していた。

歓迎会の明は、

月百日年後、キャンパス につれ、だんだんとれる

ジアでは歓迎会が催さ、解けはじめ、中にはニッ

正解した瞬間

物の者、

を迎え入れるため、1日

留学生敷迎会の会場の様子。パイキング形式で様々な料理が並んだ

選び込まれていた。 はすでに大量の食材 当日夜日時, 北京我

しまった。先を轄の

査した。 白

自分を書い立たせ、自

私は悔しかった。中国

韓国子して日本、この

**由するしか無かった。** 

スープの値の方へ単

地に到着すると、そ 七見て頂きたい。

たのだった。

と真剣に絵を描いてい 題の絵を描き、それを残 ムに分かれ, 代義者がお れでもなんとか伝えよう かべる学生もいたが、 いうものだったが、お棚 たちもいた。そして鉄町 を見るや、他い表情を降 りのメンバーが当てると 会も修製に塗し掛かった そしてチームで相談 学生サータル主催の 上が始まった。 サー 人で呼び合う学生

が借しくも「関不正解さ 間正解、性りのます ったが、どのチースも確 勝も飛び交い、時始和や

1.5 に触れることができたの 楽しんでいた様子だっ を使いながら合語をし、 生たらも慣れない日本語 囲気の中継められ、 ではないだろうか。 これから、留学生は関 かつ国際自動かな聲 この異文化交流を通 五いに新たな文化

山大学で接着を受けなが

ち向山のこと、日本のこ り、また日本のことも知 中国や韓国のことを卸 学生との交流を通じて を学んでいくだろう。 日本を通して母国のこと とを学んでいく 方岡山大学の学生も、 さして



金期特したい。 一本村の松本





和洋術表の程度と共に、会話を楽しみました

回すと、舞の中ではお たか…」と辺り金龍 しそうなな種類のス

そう思った私がその家 使り材料だ。 して変素なのかーラ 至って整油の桶に 景郷モして課

劣のそのスープの挙ぎ れることが出来ない。 瞬間の恐怖は今でも石 いスープを口に存んだ 辛い!!」私は中国 うに歯断をしてはなる tr. ą

料も色も普通の鍋であ 思つた。見た感じはは しかし先ほどのと 想を出るメー

だ私はその

が完成すること。この ほどまではおいしい輪 3国が移力するとこれ

一の鍋を食 5

されるシェアハウスと た雰囲気、そして彼の で権認された結系の料 た。しかし与目の調査 笑啊! これらが作り出 用、和気あいあいとし て歯秘密とともにショ う。私は悔しさ、そし 移もく存在しないだろ いう空間に勝るものは ハウスと後にしたの がある。一刻も早く真 親告だ、長い前様であ 相を解明するために見 になったが、今後は ティーの一部が明らか を開榜して頂きた 力することを約束す のたシャズハウスパー 以上が今回の鎮線の 皆には次四の報告

今回の私の任務は1月 開編条担当の仕事だ 柏崎を守二二で修に報 ものだった。その一部 銀日(金) に付われた 子を値載するという 1に指入し、内側の エデハウス鍋パーナ 起事へ、私はなる前 ようこを私 敵の抽賞となり、この 二の生までは任務を進 ープがダングシと変化 行することは出来な 生れてしまったのだ。 は開発十四十七年の近い込 校撃によせ、早くも私 か、相手の巧妙な先輩 たぎっているではない そう判断した私は 止まらなかった。 議なことに、私の著は まつた。ところが不思 により弊はしびれてし に上り汗を大量に茂 し、そして山椒の刺激

> が研すえた。サイの田 中の何かが崩れ去る者

を口にした連挙、

の材料たちが鍋の中で

メープ そしてすべて 計がしつかりと聞いた

を突き止めることにし おいしぞうな鍋の正体 末中私は、単いスト ブが入って いる組を前 ことは出来ない。私は れた。ああ、このまま 毒するまではったばる う、もう一つの鍋を締 願りたい。しかし祝け でも幸せな感覚に襲わ に融合し、私の香は の独特なスープと完全 の甘味、肉の甘みがあ はまな任務がある。

告したいと思う。

なくなるとこ板が程人 施士で使い切り、 が作られた。皆みる され、軸状という料理 のは密高の楽園であつ 能するその姿勢には異 ことなくおいしきを世 た。その後メープが少 調和し、そこにあった 1

第3号 (3ページ) CampusAsia事務局 2015年11月18日

異は基本的には午前さ

ムだった。学校での権



万里の長城に

たり、畑種もして

くと同じイメージで が、実際に中国に行 によるものだった

るのでせひ一度複雑

助れることを対す

えたりすることもあ いなかっと現実が見 もリアリティーが投

先生から歌や妻字など に育価価範大学の芸術 の文化体験授業は実際 先生や友理と会話しな い単簡や文法を学び の中国語の授業は新し 験極業があった。午前 に当日は甲板の文化体 韓国中国語を挙び、選 の自由時間や藤末仁

貨域などの世界推摩を や歴史博物館、万里の

中国確学者をしながら けでなく中国での中国 ため、単校での接着だ 行ったりして増一せた 無に出かけたり大きな 人の生活の様子を見て 感じることができた。 ドケットに買い

に対するイメージはメ でた。これまでの中国 ことが大切であると感 見ながち中国語を開 際に有情や日の動きを 文章の内容も基本的な ようになるためには実 れば概要は読み取れる 漢字の意味を知ってい うことがある。 とはとても役立つとい ディアから母た情報 機械的に発言する やはり会話できる

る事意によいプログラ ながら実際に体験でき 部範大学短期 今回の首都

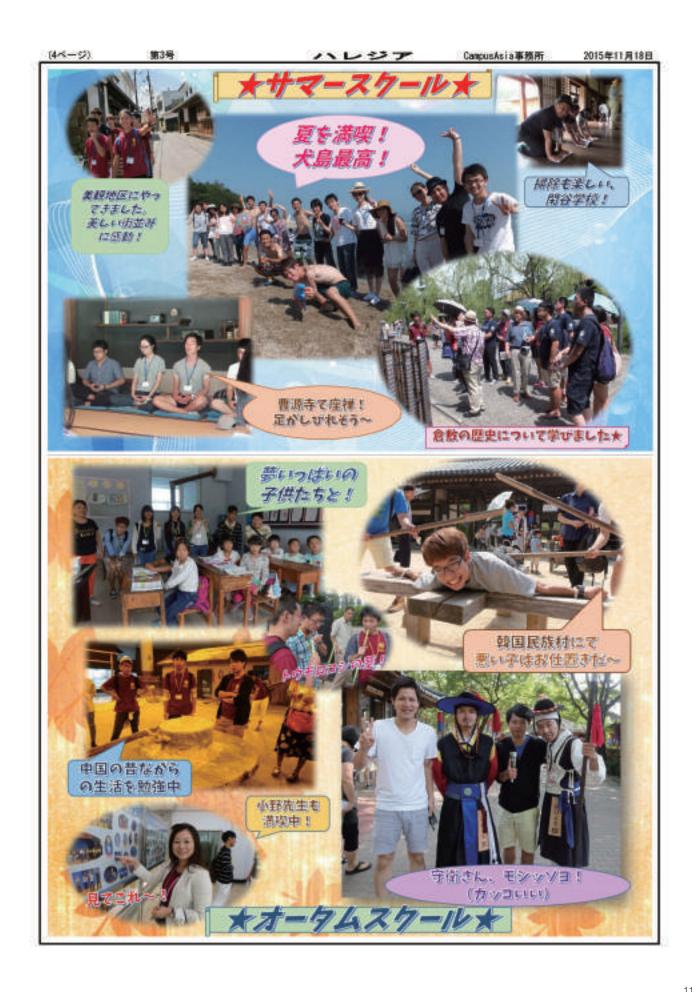
化体験程業の中で博し 化についての知識を支 得た調学力や ことができ 検索を受ける 個学プログラ 中国の伝統文 権と文化体の の中で語学冊 いろ娘い期間 人はる婚別と



富字と水墨画の文化体験

「中国短期・韓国短期・サマースケール・オーケムスケール」 夏休みのイベントを一挙紹介!





## キャンパス・アジア事業推進委員会名簿

(2016年2月)

	職名	氏	名
岡山大学	副学長、理事(社会貢献・国際担当) キャンパス・アジア事業推進委員会委員長	荒木	勝
グローバル・パートナーズ 資源植物科学研究所	副学長(国際担当) グローバル・パートナーズセンター長 教授	山本	洋子
大学院社会文化科学研究科(経)	キャンパス・アジア事業推進委員会副委員長 学長補佐、教授	田口	雅弘
大学院社会文化科学研究科(理)	学長補佐、教授	西原	康師
大学院医歯薬学総合研究科(歯)	教授	長塚	仁
大学院医歯薬学総合研究科(保)	グローバル・パートナーズ副センター長 学長補佐、教授	廣畑	聡
大学院医歯薬学総合研究科(法)	教授	張	紅
言語教育センター	教授	陳	南澤
大学院教育学研究科	研究科長	髙塚	成信
大学院社会文化科学研究科(文)	副研究科長	田中	共子
大学院自然科学研究科 附属図書館	副研究科長副館長	五福	明夫
大学院保健学研究科	副研究科長	竹田	芳弘
大学院環境生命科学研究科	副研究科長	河原	長美
大学院医歯薬学総合研究科	副研究科長	浅海	淳一
言語教育センター	副センター長	劔持	淑
グローバル・パートナーズ	准教授(キャンパス・アジア専任教員)	白	榮 勛
グローバル・パートナーズ	准教授	大林	純子
学務部学務企画課	学務企画課長	坂本	泰彦
グローバル・パートナーズ留学交流課	課長	引地	朋彦
グローバル・パートナーズ国際企画課	総括主査	原田	光章

## キャンパス・アジアプロジェクトチームメンバー名簿

(2016年2月)

所 属	職名	氏 名
岡山大学	理事(社会貢献・国際担当) キャンパス・アジア構想責任者 キャンパス・アジア事業推進委員会委員長	荒木 勝
大学院社会文化科学研究科(経)	キャンパス・アジア事業推進委員会副委員長 キャンパス・アジアプログラムマネージャー 教授	田口 雅弘
大学院医歯薬学総合研究科(歯)	キャンパス・アジアプログラムサブマネージャー 教授	長塚 仁
大学院自然科学研究科(理)	キャンパス・アジアプログラムサブマネージャー 教授	西原 康師
大学院社会文化科学研究科(文)	グローバル・パートナーズ副センター長 教授	延味 能都
大学院社会文化科学研究科(文)	教授	辻 星児
大学院社会文化科学研究科(法)	教授	張 紅
大学院社会文化科学研究科(法)	准教授	吾妻 聡
大学院社会文化科学研究科 (東アジア国際協力・教育研究センター)	准教授	土屋  洋
大学院医歯薬学総合研究科(薬)	教授	黒崎 勇二
大学院医歯薬学総合研究科(保)	キャンパス・アジアプログラムコーディネーター グローバル・パートナーズ副センター長 教授	廣畑 聡
大学院医歯薬学総合研究科(薬)	准教授	金 惠淑
新医療研究開発センター	教授	那須 保友
大学院環境生命科学研究科(農)	教授	村田 芳行
言語教育センター	教授	久保田 聡
言語教育センター	教授	陳 南澤
グローバル人材育成院	教授	金 東光
グローバル・パートナーズ	准教授	大林 純子
グローバル・パートナーズ	キャンパス・アジアプログラムコーディネーター 准教授(キャンパス・アジア専任教員)	白 榮 勛
グローバル・パートナーズ	キャンパス・アジアプログラムコーディネーター 講師	小野真由美
グローバル・パートナーズ	グローバル・パートナーズ留学交流課長	引地 朋彦
グローバル・パートナーズ	キャンパス・アジアプログラム・オフィサー(事務局)	云 洪凌
グローバル・パートナーズ	キャンパス・アジアアシスタント(事務局)	増田 鈴子

#### キャンパス・アジアの歌







## 6. CAMPUS Asia Joint Final Report

#### 1. Project Title

Program for Core Human Resources Development: For the Achievement of Common Good (*Bonum Commune*) and Re-evaluation of Classical Culture in East Asia

#### 2. Name of Universities

Jilin University (China), Okayama University (Japan), Sungkyunkwan University (Korea)

#### 3. Objective and Outline of the Program

1) Project Objective & Background

Project Objective

The three universities will implement programs for Core Human Resource Development using their proven collaborative educational system to foster regional leaders who can work together to solve contemporary common issues based on shared values gained from mutual understanding. These Asiancrats will be leaders embodying a shared Asian view for regional administration skilled at communicating with an international perspective who act to overcome problems of modern society. An important aspect linking these Asiancrats will be the identification of common values through studies on classic texts and other cultural artifacts.

#### Background

Okayama University, Jilin University, and Sungkyunkwan University have developed cooperative and collaborative structures. Okayama University and Jilin University have organized 1) a double two-term doctoral degree course; 2) student exchanges with credit transfer; 3) and, held common courses. In addition, Jilin University and Okayama University conduct Chinese and Japanese instruction as foreign language education. Okayama University, for example, offers Japanese foreign study courses at its International Language Education Centre. Okayama University and Sungkyunkwan University provide student exchanges as well as recognition of credits. Furthermore, Jilin University and Sungkyunkwan University offer dual degrees and student exchanges.

#### 2) Content of the Exchange Program

- Academic field, number of exchange students, curriculum, degree to be conferred etc.

This project comprises of all the consortium's undergraduate and graduate faculties related to education for contemporary issues and common values in East Asia. It is anticipated that the annual number of undergraduate students, master's level students, and doctoral level graduate students will be: 5 students exchange each other. In terms of awarding double degrees, Okayama University and Jilin University have already begun conferring a double

two term doctoral degree. Furthermore Jilin University and Sungkyunkwan University are in the process of regularizing the awarding of dual degrees. Five years after the start of this project the three universities will have increased the scope of dual doctoral degrees offered.

- Difference from existing domestic and overseas programs / curricula in the same field

The consortium seeks to extend the academic activities of its members through international cooperation and collaboration by establishing a foundation for regional development through exchanges and the establishment and promotion of links with local industry. Okayama University and Jilin University, for example, have synchronized their syllabuses, lesson time tables, grading systems, requirements for graduation, and documenting for graduation. Growing from this the universities are undertaking a similar regularization of their graduate programs. The following will be implemented among the three universities.

- (1) Annual Summer Seminars focusing on common issues in the three countries to share common values
- (2) International Review of the program from an international perspective in order to guarantee its quality. This review will also be administered from the aspect of Faculty Development to enhance the qualifications and quality of teaching staff.
- (3) Regional Conferences in each of the three countries to link academia, industry, and local authorities.
- (4) International Conferences to foster intellectual exchange among the three universities, four international conferences will be organized at each university in rotation. The Kick-off Conference at Okayama, the second at Jilin, the third at Sungkyunkwan and the final to be held at Okayama
- (5) Administrative Meetings: Administrative staff will meet regularly to enhance of the systems for credit transfer, double degrees and dual degrees

#### 3) Expected Outcomes

The universities involved in the project described above have already a consortium to establish a common syllabus with the aim of graduating students with shared values who will meet the needs and cultural expectations of their communities.

Concretely the following steps will be taken to produce such graduates:

(1) the three universities will employ expert educational staff who will exchange information to further improve the educational level of the participating institutions, detect common educational challenges, and collaborate on research; (2) the participating universities will press forward to create educational guidelines, reform their educational content, and use Peer-Review to improve continually the educational system and create graduates with refined and deep knowledge; (3). The three universities will offer joint lectures, joint workshops, and individual tutorials. In addition to the academic content it is also planned to offer field seminars and internships thus students will experience first-hand, and learn how to accommodate, cross-cultural differences; (4) Graduates will possess leadership qualities and have experience engaging with problems facing modern society. In conclusion, graduates will have international vision who can respond to the needs of society and industry as well as communication skills in "Asiancracy" – they will be leaders who share the common Asian values to lead government and civil organizations.

- 4) Cooperative System and Roles of Participating Universities
- Submit copy of 'Letter of Intent for Cooperation' etc.

Jilin University has wide and deep exchanges with universities in Japan and Korea. It has quite a lot of talented experts being proficient at Japanese and Korean Language and studies. Sungkyunkwan University is the oldest university in Korea and is the representative for leading study into Korean culture as well as research in modern Korean society. Therefore, the three universities have a deepening and great mutual interdisciplinary understanding and shared Asian values. From this background each participating university will take care of the mutual educational system and financial support.

#### 5) Framework for credit transfer, grading, degree conferral

The three participating universities will consider a common basis of education beginning with lecture content, lecture time, and evaluation methods. In addition, in order to put into place continual improvement, the double degree and dual degree system shall not rely upon only the guidance of the issuing universities but the input of all the participants. Above all, the introduction of a Peer-Review system will maintain educational quality while allowing for the mutual exchange of educational experience.

It is necessary to match their evaluation systems; Korean universities use a relative grading system while Japanese and Chinese universities use an absolute grading system.

#### 6) Student Support (Tuition waivers, counseling, internships etc.)

There is already an agreement between Okayama University - Jilin University - Sungkyunkwan University for the mutual exemption of affected students' tuition fees.

Three universities have advisors for foreign students in place and Health Service Centers. Those who participate in this program can use these services. The universities will provide dormitories, share house, other living support and counseling for exchange students.

#### 7) Language Plan

Three universities have implemented foreign language training, Jilin University conducts Chinese language training, Okayama University conducts Japanese language training, and Sungkyunkwan University conducts Korean language training at their respective foreign language centers.

The language training courses for exchange students have been implemented as preparatory programs for future students for the above mentioned programs. In natural science field, English is used as the common language.

#### 8) Monitoring & Evaluation / Feedback Plan

The management of grades and the mutual recognition of credits requires a common education mechanism involving lecture hours, evaluation methods, and course content among the three universities. As well, concerning the double degree and the dual degree, rather than depending only on the input of the host universities, the views of all partners shall be incorporated into plans for bettering the teaching substance.

To maintain the quality of this project, a system will be put into place to evaluate annually the quality of all lectures related to this project by teaching staff.

#### 9) Publicity / Dissemination Plan

We aim to disseminate our accomplishment through our own website in English, Korean, Chinese and Japanese. The three universities will work together to build up and administer this system.

10) Cooperation with other institutions (local governments, NGOs, enterprises etc.) and Support from them Okayama University has already put into practice "Agora" (a means for communication between the social and industrial sectors) as a model for field seminars where key regional personnel can be developed. The participants, through the interaction of simultaneously learning by confronting the issues facing each region and developing their problem-solving skills, will become leaders in their regions. Also this project will establish internships for exchange students with regional industries, especially those involved in the natural sciences. Sungkyunkwan University has already established close relationships with Korean leading companies such as Samsung group and is ready to utilize these for this program. Jilin University will build a regional network to cooperate with other universities, regional enterprises and administrative institutions.

#### 4. Initiatives and Progress of Program

#### 1) Objectives and Implementation

At Okayama University, collaborative learning that incorporates the high degree of mobility and multilingualism of students is made possible by promotion of this Japanese, Chinese and Korean cooperative educational development with its ideal of achieving Common Good, based on our partnership with Jilin University in China and Sungkyunkwan University in Korea, in the Campus Asia Program, "Program for Core Human Resources Development: For the Achievement of Common Good (Bonum Commune) and a Re-evaluation of Classical Culture in East Asia," that commenced in the academic year of 2011. For active exchanges among Japanese, Chinese and Korean students, long-term and short-term student exchanges, summer schools for nanobiotechnology and autumn schools, hands-on workshops in natural science field and so on are held to promote diversity of the program by the entire Okayama University academic system. As a distinctive initiative for cooperative educational development, compilation of Common Textbooks to be used by the three partner universities of Japan, China and Korea, classes based on Community Based Learning (CBL) with its concept of campuses in regional areas as well as Problem Based Learning, and pioneering initiatives such as active learning type classes incorporating multiple languages have been developed. Asiancrats (leaders from community administration and private organizations who contribute to the Common Good of Asia) who are people with a broad international outlook while being well-versed in regional culture and traditionally well-educated; medical professionals who can take the lead in community-based health care; candidates to become core executives of corporations who can take the lead in collaboration between Japan, China and Korea in all areas of technological R&D, production and sales; and people who can show leadership in tackling the issues facing modern society including the environment, energy

and recycling; these are the actual kind of human resources we aim to develop.

In regard to the educational system, various experimental classes have been carried out thus far with an aim toward constructing an effective international cooperative education system. Finally, however, experiments so far seem to be converging into an "Education System for Global Liberal Arts in East Asia." In this system in particular, Jilin University in China has been responsible for education about Mutual Benefits and Traditional Culture, Sungkyunkwan University in Korea has been responsible for education about Traditional Thought and Classical Literature, while Okayama University in Japan has been responsible for education about Common Good and Modern East Asia Studies. Also, systems have been created for the transfer of credits for a wide range of approved subjects as well as for the conferring of credits for short-term exchange studies. Furthermore, by placing emphasis on language classes at each university, both outbound and inbound students have been able to acquire high-level language skills at the university of their exchange studies. Students are able to carry out study or research in their special field of study at their study-destination in various languages including the local language, their own native language, particularly English in natural science and medical science field. At Okayama University, for the CAMPUS Asia Program (CAP) in undergraduate and graduate school courses, educational programs suited to each area have been developed together with a Common Good educational program for shared use in the university as a whole. At Jilin University, independent classes and programs have been developed for CAP. At Sungkyunkwan University, as well as the intensive courses on East Asian Traditional Thought and Classical Literature which form the foundation for the program, active learning initiatives including fieldwork have also been developed.

In regard to cultivation of human resources, this has been carried out from a long-term perspective. As well as predeparture guidance given to long-term exchange students, and guidance for improving skills for long-term exchange students (development of multilingual seminars focusing on discussion, continuation of guidance for improving language skills, support of students' own initiatives for CAP activities, and so on), a system has been created so that students can participate in CAP continuously during their college life. Among these students are those who continue on to graduate school, obtain employment in the national public service or as teachers and so on. Slowly, we are fostering the growth of people who can support and be the driving force of communities in the future.

#### 2) Cooperation Advantages of Academic Program

In this program, in order to make it easier to understand the outlook for actual methods and processes in deepening mutual understanding by studying about "the Common Good," as indicated in the First Monitoring, a review was done of the joint educational courses that had been implemented thus far and they were reorganized into a concept named the Education System for Global Liberal Arts in East Asia. Jilin University developed lectures representative of the areas of history, culture and common good such as "Mutual Benefits of East Asia" and "Correlations between the Chinese, Japanese and Korean Languages and that Cultural Inheritance." Sungkyunkwan University developed lectures representative of the areas of East Asian Traditional Thought and Classical Literature such as "Introduction to Classical Literature of East Asia" and "Mutual Understanding and the

Culture of Chinese Characters in East Asia." Okayama University developed lectures representative of the areas of Common Good and the history of East Asia and contemporary East Asia such as "Society and the Tripartite Relations of Japan, China and Korea" and "Multilingual Seminar on the Common Good." Moreover, the three universities each held field work sessions in local communities. In the natural sciences and medical fields, the cooperation between the programs under the idea of Common Good was enhanced.

At the same time, use of textbooks was promoted through research meetings for compiling textbooks on Common Good, summer schools and multilingual seminars on education for Common Good. The CAMPUS Asia students studied on the bases of these achievements through the multi-language classes and field works.

#### 3) Student Support

Student administration offices of the three universities collaborated with one another to promote support for students in their campus life, education and research.

Persons in charge of student support talked to outbound students regularly via Skype as well as requiring students to submit a report at the end of each month so they could grasp how the students were progressing in the program and in their campus life. Sungkyunkwan University operates a Language and Culture Community for tri-nation cultural exchanges and to improve linguistic skills of the students.

In regard to accommodation, the operation of share houses promotes the mutual support of exchange students and their academic and research progress as well as fostering mutual understanding. The aim of share houses is for Japanese, Chinese and Korean students to experience living together and building up the kind of relationships where they can have joint discussions based upon their mutual understanding of each other's lifestyles, culture and sense of values. Share houses also serve as a venue for exchanges with students apart from the share house occupants and through such exchanges, the number of students involved in the program has increased. Therefore, a synergistic effect for the program is achieved with both the educational purpose and PR.

In addition, a system was established for exchange activities by students from the three countries that emphasizes the students' autonomy. Specifically this refers to activities such as the alumni association for CAP students, a student club, publishing of the student newspaper HARESIA, and student workshops. All of these activities are managed by the students' initiative and form the foundation for the mutual support system between students.

The CAP alumni association enables students who became friends during the program to continue to have exchanges even after they have finished participating in the program and functions as a way for the younger generation to connect Japanese, Chinese and Korean societies. Students who have finished the program transmit information via social networking services and provide support for students new to the program.

The CAMPUS Asia Club provides support for students participating in the program, carries out PR for CAP, participates in university and community events, and so on.

#### 4) Added-value of the collaborative program (Outcomes)

One of the outcomes of the program is "the fostering of human resources with Common Good as the central pillar." Specifically this means that deep discussions were held on common issues at regional conferences and field

work in each country, after first learning about the basic tradition, thought, history, languages and so on, of Japan, China and Korea. Furthermore, a new subject titled the Common Good Education Multilingual Seminar, which was set up in the 2014 academic year, has made it possible to establish an educational method for connecting deeper understanding of Common Good with drawing out the awareness of mutual understanding and underlying harmony of Japanese, Chinese and Korean students. A report on the outcomes of this subject, which uses multiple languages (Japanese, Chinese, Korean and English) as a new method in international liberal arts education, was given at the fourth conference of the Japan Association of International Liberal Arts held on March 14, 2015.

One of the outcomes of the joint program has been the attempt to come up with a new approach with unique methods by using the same textbooks on Common Good created through the collaboration of teachers of the three universities. The textbooks could be said to represent a compilation of the outcomes of research exchanges in Japan, China and Korea about the Common Good of East Asia as well as the outcomes of the program as reflected by discussions among the students, in the process of compiling the textbooks. Through actually using the textbooks in the liberal arts education course here at Okayama University, the foundations have been strengthened for further developing Common Good education as practical wisdom education for all the students in the university.

Conferring of double degrees and preparations for joint degrees are another outcome of the joint program. This has enhanced the common subjects of the three universities in Japan, China and Korea, and led to strengthening of cooperative relationships between educational staff. Starting from the joint education program, preparations are being made toward the conferral of joint degrees as an academic degree. Okayama University is already implementing double degrees with Jilin University in master and doctoral programs, with Sungkyunkwan University in pharmacology studies and in humanities and social science studies, while we have concluded an agreement for double degrees with Sungkyunkwan University has in materials science, enabling a deepening of academic exchanges. This will be developed into joint degrees in the future.

Furthermore, preparations for the establishment of a joint international graduate school are another major outcome of the joint program. With the double degree and joint degree program as a base, in order to further develop the establishment of a joint graduate school, chancellors and vice-chancellors of the three universities reached a joint decision for their future concept after the program finishes in May 2017 and have decided on the concrete framework for an investigative committee regarding this program.

#### 5) Internal Quality Assurance Quality Assurance

Creation and use of the Common Textbooks, and the establishment of a joint international graduate school are two items that can be raised in regard to Quality Assurance.

Currently, sectional groups in the Education for the Common Good Research Group include the Tradition and Thought Group, History Group, Culture of Chinese Characters Group, and the Economics Group. Each group decides on its own theme and carries out meetings to review the creation of the Common Textbooks and ultimately publishes a series of Common Good Textbooks to be used in common with Japan, China and Korea. The use of these textbooks for lectures, summer schools and so on, will realize joint education of a high quality.

Moreover, by changing the entire university's exchange program thus far to a structure supported by graduate

course credits through the establishment of a joint international graduate school, a system is completed wherein degrees can be conferred by systematically completing the curriculum. Okayama University's Graduate School of Humanities and Social Sciences, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Graduate School of Natural Science and Technology, and Graduate School of Education will be integrated with a view to the establishment of the Japan-China-Korea Joint International Graduate School. Jilin University's School of International and Public Affairs and Sungkyunkwan University's Institute of China Studies have already concluded an agreement and a cooperative relationship has been constructed. Okayama University has begun preparations for establishing the Joint International Graduate School through its participation in Jilin University's School of International and Public Affairs program.

For the summarization and evaluation of the effectiveness and quality of the program in the administration stage of the program, representatives from the three universities have been meeting on a regular basis for administrative meetings. At these meetings, information regarding the administrative situation and any issues that need addressing are reported and plans are drawn up jointly for the next stage of the program. The three universities evaluate the program from the perspective of international standards and the development of educational staff, enabling maintenance of the quality of the program and the quality of the educational staff participating in the program.

Other strategies include the adoption of a peer evaluation system, learning about each other's experiences in education, and guaranteeing the quality of the curriculum. At departments in the university, the administration of CAP and education are regarded as an important part of university education and student training so the curriculum for administration of CAP has been made permanent, realizing processing of the administration, clarifying further the details of the program content, thus guaranteeing quality. Each educational institute works independently with the Vice-Chancellors having overall responsibility for monitoring the quality of the program. An organization system to administrate the curriculum was created and the departments in charge of international exchange monitor the program's curriculum and special lectures together with each educational bureau and department. Students also evaluate their teachers and classes. The program's administrative section sorts through feedback regarding those evaluations and CAP'S educational content overall, adjusting the educational program content, teaching methods and so on.

#### 6) Possibilities and Challenges of an Education System for Global Liberal Arts in East Asia

The content and appropriateness of the phrase "East Asian Style Global Liberal Arts Education" as suggested by Okayama University's CAMPUS Asia Program is an issue needful of further discussion. In human society, peace is a universal concept. Thinking about how this concept is prescribed in East Asian society from images, laws, international affairs, against a social backdrop or through everyday methods; how history is perceived and studied in regard to wars; considering all of this from the perspective of the Common Good could be said to be the liberal education that forms a foundation for the fostering of human resources in East Asia. Looking at the philosophical pursuit of this concept of the Common Good of East Asia not from the viewpoint of researchers but in the setting of liberal arts education, adoption itself of the concept "the Common Good" may seem difficult at first glance. However, it was seen as a catalyst for drawing out the underlying awareness of the Common Good existing in

students. Creation of dynamic classrooms achieved through the high mobility of students means providing a place of learning where it is possible to promote mutual understanding in East Asia. Creating this dynamic learning space by students' mobility is the role that higher education institutions should assume and is also a prerequisite necessary for East Asian style global liberal arts education.

#### 4. The intermediate evaluation and improvements

The following points were indicated in the intermediate evaluation.

- 1. Students in various areas need to be presented with a clear view of concrete methods and processes for focusing on the common sense of values "the Common Good," together with what will be carried out, how far it will be taken within the period the activity is being implemented, as well as the manner of evaluation. These items must be clarified promptly.
- 2. Clarification is necessary as to what kind of program can be created from the combination of each special field and the "Common Good," how they interact, and what kind of outcomes can occur from synergistic effects.
- 3. Steady progress is required under the cooperation of the three universities of Japan, China and Korea toward publication of the Common Textbooks.
- 4. In order to create a quality-assured system for credit transfer, the discrepancies between different faculties within Okayama University need to be resolved and the overall system for the three universities needs to be completed. After these systems have been rejigged, a concrete road map needs to be set forward for planning the establishment of an international joint graduate school.

In regard to the above points, the following improvements have been made.

1. In regard to education about the "Common Good," enhancement of lectures about the "Common Good" (which is the pivotal point), summer schools based on education about the "Common Good" as well as approaches to the "Common Good" in a new format, have been carried out. Issues common to East Asia and various issues that local communities are facing in each country were presented and practical wisdom study was carried out in PBL and CBL format. Some examples of topics that were dealt with through desk work and field work in the communities near the campus include: restoration of the public finances of the Takahashi area by Hokoku Yamada; environmental pollution issues in the Mizushima area; Confucianism education at Shizutani School; Joseon missions to Japan in the Ushimado area; conservation of historical culture in Yakage town; Kurashiki historical quarter of Machiya Trust; Western learning of Tsuyama; town planning of Okayama; Sogenji Temple's Buddhist Thought; the issue of plastic surgery as an industry in the Gangnam district; and a Toyota factory observation tour that touched on issues surrounding Japanese-Chinese joint enterprises, etc. A shared understanding and a collaborative consciousness was created through presentations by discussion groups. Lastly, awareness of the issues involved was summarized under the ideal of the Common Good. This approach facilitated a smoother understanding by the students and had the effect of enabling the students to grasp the

- Common Good as issues close to them. The outcomes of education for the Common Good are evident in presentations at student forums, and in booklets of essays written by students. (These can be seen on websites and in booklets of essays.)
- 2. In regard to collaboration between the various areas of expertise and education about the "Common Good," the type of education to be constructed is one where basically while increasing specialization of their various areas of expertise, at the same time students should acquire a viewpoint that is well informed about the "Common Good" in East Asia and qualities fitting as professionals.
  - Specifically, a carefully planned kind of education was carried out that matched the themes of the different areas and liberal arts. In the nano-biotechnology course, students thought about the "Common Good" through considering views of life and death in East Asia while for the Humanities and Social Sciences discussion was held about conservation of natural environments and the development of industry with field work in the Mizushima Industrial Zone. At the same time, at multilingual seminars, summer schools and regional conferences, groups of students always consisted of those studying scientific subjects and also the humanities, and group work was of interdisciplinary style so that classes would be stimulating and the students could make new discoveries through one another. In addition, the postgraduate students majoring natural science field share a concept of the "Common Good" in East Asia through several summer and winter international workshops wherein the contemporary research and new idea aiming at interdisciplinary approach are exchanged by using English as the common language.
- 3. For the publishing of the Common Textbooks by the three universities of Japan, China and Korea, textbooks in the three fields of economics, traditional thought and the culture of Chinese characters have either been published or preparations are ready for them to be published. Teachers from the three universities wrote the manuscripts in each field. For economics, CAMPUS ASIA Common Textbook *Higashi Ajia no Keizai Kyoryoku to Kyotsu Rieki* [Economic Cooperation and Common Interest in East Asia] (by Fukuro Shuppan in 2015) was published. In the field of traditional thought, a textbook has been completed for use in the university and it will be published after being used in multilingual seminars and details are worked out. These textbooks will be translated and published in Chinese and Korean so that they can be used effectively in Japan, China and Korea.
- 4. For the establishment of a credit transfer system that is quality-assured, visits were made to the Jilin University and Sungkyunkwan University in May 2015 and consultations were held about firstly, establishing a joint international graduate school at Jilin University's School of International and Public Affairs; and secondly, further expanding this to include Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, and Natural Science and Technology studies. For the present, each of the three universities will conduct preparations for starting up the system. Specifically, items to be advanced include making a framework for the mutual exchange of students together with the obtaining of degrees, enhancing subjects for common education, adopting a learning agreement, and concluding an agreement for joint degrees with a view to later including double degrees.

With these improvements as a foundation, we aim to tackle intensively the realization of a program with the following distinctive characteristics.

#### · Establishment of "Education System for Global Liberal Arts in East Asia"

Summer schools, short-term language seminars, Chinese-Korean workshops, creation of Common Textbooks, holding of lecture meetings on the "Common Good," nano-biotechnology course, etc. - advance the systemization of all of the above-mentioned programs into the Education System for Global Liberal Arts in East Asia.

#### • Pilot program classes for the realization of practical wisdom (Phronesis) education

Student forums, "regional conferences", "machinaka (=downtown) campus" set up in the central part of town, Chinese-Korean workshops, etc., by holding many classes with active learning as a base that actually go out into communities in the region (Community Based Learning: CBL), and by establishing issues in common with East Asia (Problem Based Learning: PBL) in these classes, make up a format that deepens discussions and mutual understanding. These are carried out in experimental type of classes such as "multilingual seminars", etc.

#### · Making a framework for the sustainable development of the program

Preparations are being advanced for the program thus far to be expanded to incorporate an international joint graduate school. Also, preparations are being advanced for similar initiatives in the university (for example, Okayama University's North East China Universities Platform Graduate Student Exchange Program O-NECUS) to be incorporated and to expand the program. As the program will be of content suitable for conferring degrees, other post graduate courses in the three universities are starting to conclude agreements to confer double degrees. A system for continuing student exchanges is being set up spontaneously by the students such as the CAMPUS ASIA student club and the alumni association, and carrying out activities.

#### 5. Objective Achievement

Through the cooperation of Okayama University, Jilin University and Sungkyunkwan University which form the base universities of the program in East Asia, the Program for Core Human Resources Development: For the Achievement of Common Good and Re-evaluation of Classical Culture in East Asia aims to foster young leaders well-versed in regional culture and with a broad international perspective who can contribute to the development of all of East Asia in accordance with the needs of each region.

Discussions have been held repeatedly as to how the three universities view "well-versed in regional culture and with a broad international perspective who can contribute to the development of all of East Asia." The recent tensions and discord in East Asia were taken to be a phenomenon resulting from a weakening of the Chinese character and Confucian culture that has continued as a long tradition in East Asia, due to the modernization of each country. The universities agreed on the need to foster core human resources who can create a cultural cooperative spirit in East Asia.

In regard to the construction of a common education system, the three universities have formed a consortium

wherein a comprehensive system for education implemented jointly for undergraduate and postgraduate students will enable credit transfers, joint classes, double degree education (obtaining degrees simultaneously at two universities), joint degree education (multiple universities confer a degree jointly) and so on. In the monitoring carried out in Korea last time, agreements for double degrees and joint degrees had not been concluded and therefore the evaluation given was that no sufficient judgement could be made as to the concrete realization of the outcomes. However, in spring 2015 the agreement was concluded with partner universities for the double degree program and one of the outcome criteria has been set.

For the future, in East Asia the three universities are aiming to cultivate the Common Good supported by excellent education and knowledge of culture in East Asia, to foster the development of core human resources who can be leaders in local communities, and to make bases for a network of human resources exchanges.

The next generation of regional core personnel who are to be fostered by the cooperation of the three universities in this program will Asiancrats who are well-versed in traditional culture. Asiancrats are those who contribute to the common good of Asia such as leaders in community administration and private organizations, medical professionals who take the lead in community-based health care, candidates who have a global perspective and will become core executives of corporations to take the lead in collaboration in business between Japan, China and Korea, and people who can show leadership in tackling various common issues that East Asia is facing.

In order to achieve this goal, construction of a Model for Education System for Global Liberal Arts in East Asia has been attempted. Currently, a collaborative education system by the three universities has been set up and original types of education have been developed focusing on the fields of expertise of each university. As well as original subjects for CAP being set up at each of the three universities, the writing, translation and publication of Common Textbooks is progressing steadily.

In regard to Common Good education, education to draw out the students' underlying awareness of the Common Good is being carried out. Core human resources for the East Asian region are being fostered by drawing out the Japanese, Chinese and Korean students' underlying awareness of the Common Good through a process of mutual recognition in active learning. In that, importance is placed on acquiring the local language and a type of active learning classes has been developed that uses multiple languages, including English. As well as implementing the existing machinaka (=downtown) campus, from the academic year 2015 a Multilingual Common Good Seminar has been newly set up as a subject in the Liberal Arts education course for the entire university. Holding multilingual classes, not just in Japanese or Chinese (or the common language of English), means that exchange students from China or Korea and Japanese students who have returned after studying in China or Korea, are able to hold deeper discussions beyond the area of language acquisition. That mechanism was adopted for a summer school of a much bigger scale. Nearly seventy students, including those from universities other than those in the agreement this academic year, participated in a model of this type of class, doing desk work and field work in groups. Basically, education was set up that enabled students to further specialize in their various areas of expertise, and at the same time acquire a viewpoint that is well informed about East Asia and the "Common Good" and qualities fitting as professionals. In the nano-biotechnology course, students thought about the "Common Good" through considering views of life and death in East Asia while for the Humanities and Social Sciences discussion was

held about conservation of natural environments and the development of industry with field work in the Mizushima Industrial Zone. A carefully planned kind of education was carried out that matched the themes of the different areas. At the same time, at multilingual seminars, summer schools and at regional conferences, groups of students always consisted of those studying scientific subjects and also the humanities, and group work was of interdisciplinary style so that classes would be stimulating and the students could make new discoveries through one another.

Students who participated in the program last year took part in a presentation "Realizing the Common Good and an Education System for Global Liberal Arts in East Asia" at a conference held by the Japan Association of Liberal Arts. This was one of the outcomes of Common Good education.

http://jaila.org/activity/taikai20150314/rep20150314.html

"What is Peace, as seen from the Common Good?" Yuri Tokunaga and Dongsook Kim (Excerpt)

Tokunaga and Kim took up the concept of 'peace' for common interests, or the Common Good, and examined how well-versed in culture and knowledgeable the people who live in East Asia as a Chinese character culture area need to be in order to coexist. Japan, China and Korea share the culture of Chinese characters and formed a Chinese character culture area. Even nowadays, there are many common words in East Asia. However, the concept behind the word made of Chinese characters may not entirely match from country to country. If this point is overlooked, misunderstandings may occur in mutual understanding. It was decided to consider whether Chinese character words that were originally shared in the Chinese character culture area could not be used again as an effective tool in mutual understanding. Under the theme "What is Peace, as seen from the Common Good?" the Chinese characters for peace were chosen as characters existing within the Common Good of East Asia and especially as a translation that was created in the Meiji Period (1868-1912) and possibilities about this were examined. In making a relative comparison of the Chinese characters of peace in Japan and Korea, similar points and points of difference can be raised. While Chinese characters are a useful tool for words in the Chinese character culture area, different nuances can sometimes have a major impact for historical issues or social and political issues, even leading to being the cause of a worsening in relations between countries in the cultural area. Those of us living in East Asia need to cultivate ourselves to understand such cultural differences. In order to share a common foundation in this Chinese character culture area that embraces East Asia, we may revert to 'peace' as having the meaning of 'harmony,' which was originally our shared understanding. In the future, when considering relations in East Asia, adoption of 'harmony' as a keyword could be extremely significant.

## 6. Organization and Administration

At Okayama University, Jilin University and Sungkyunkwan University, there is a CAMPUS Asia office which plans and carries out activities at each university.

At Okayama University, the vice dean of the relative departments, or an equivalent representative, make up the CAMPUS Asia Program Promotion Committee, which is the highest decision-making body. Every day

administration is carried out by the teaching staff who actually carry out the activities and Project Team Meetings are the responsibility of the faculty staff of the CAMPUS Asia Program Promotion Office. Implementation of the program is the responsibility of the CAMPUS Asia Program Promotion Office. Under the Project Team Meetings, there are five working groups which handle the following special areas: Student Support; Promotion of Language Education; Common Good Education; Development of a Common Academic Affairs system; and Planning of a Joint Degree System (See Diagram 6-1).

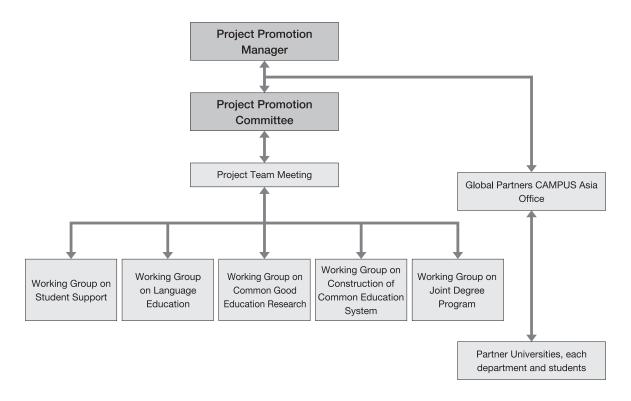
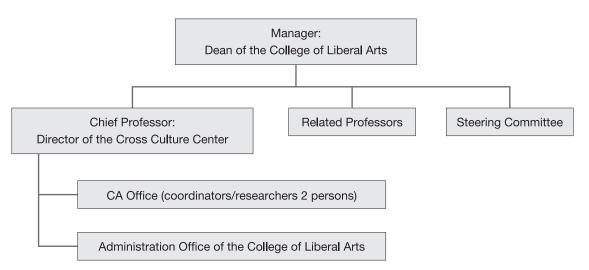


Diagram 6-1 Okayama University CAMPUS Asia Program Implementation System

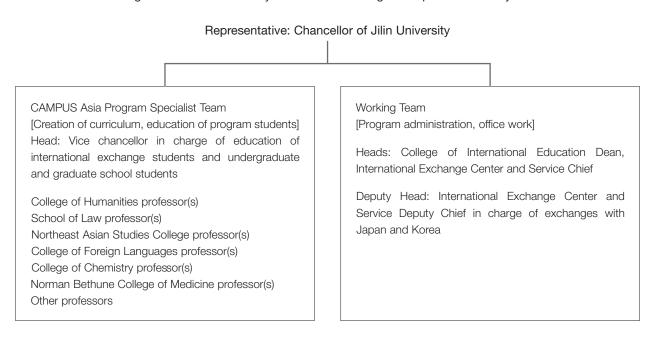
At Sungkyunkwan University, the Dean of the College of Liberal Arts is the program manager while the professor in charge (Head of the Center for Cross-Culture Studies) has the position of consultant. This constitutes the decision and policy-making body. Two of the staff members of the office are researchers who are fluent in Japanese and Chinese, and everyday duties both inside and outside the university, such as communications and administration of the students, are carried out. As an advisory body regarding preparation for compiling the textbooks and for administration, there is an administrative committee made up of several professors from the College of Liberal Arts and the College of Confucian Studies and Eastern Philosophy (See Diagram 6-2).

Diagram 6-2 Sungkyunkwan University CAMPUS Asia Program Implementation System



At Jilin University, a specialist team for the CAMPUS Asia Program and a working team have been set up for the smooth administration of the program. The vice chancellor is head of the specialist team for the CAMPUS Asia Program and is in charge of international exchanges and undergraduate and postgraduate student education. Professors from the College of Humanities, School of Law, Northeast Asian Studies College, College of Foreign Languages, College of Chemistry, and the Norman Bethune College of Medicine are members and play an important role for the curriculum as well as education of the participating students. The dean of the College of International Education is head of the working team together with the chief of the International Exchange and Service Center while the deputy chief of the center, in charge of exchanges with Japan and Korea, is deputy head of the working team and is responsible for administration of the program and office work (See Diagram 6-3).

Diagram 6-3 Jilin University CAMPUS Asia Program Implementation System



The three universities are in close communication on a daily basis via email, SNS, etc., and are proceeding with the program in a collaborative manner. The universities also hold tripartite meetings on a regular basis (1-2 times per year) where they each report on outcomes and issues, each university undergoes review by its two partner universities, and discuss problems they dealt with in the past or program content which they intend to carry out jointly in the future. Minutes from the tripartite meetings and reports and materials drawn up by the member universities are shared at all times and these contribute to revision of the syllabi, implementation of joint programs and student support.

#### 7. Curriculum Integration

Currently, the curriculum for undergraduates focuses on Common Good education, language education and global liberal arts education (See Diagram 7-1). For graduate students, the guidance system in place is based on the student's particular interest and their master's thesis, and doctoral thesis themes.

Education System for Global Liberal Arts in East Asia Types and methods of education \*Lectures \*Seminars \*Workshops \*Summer School \*Regional Conferences \*Student Forums \*Season's Schools of Natural Sciences \*Nano-biotechnology Courses **(Classic & Tradition)** [Common Good] (Global studies) Okayama University Jilin University Sungkyunkwan University \*Multi-lingual seminar on the \*Common Benefit of East Asia \*Classic Literature in East Asia "Common Good" in East Asia \*Measure of Global Justice \*Introduction to Classics in East Asia \*Relationship between Japan, Korea, \*Relationship between China-the \*East -Asian Civilization recognizably China and Society United of America and Integration of related to Chinese characters \*Megaregions and regional Cultures East Asia \*Other lectures and active learning \*Other lectures and active learning programs \*Other lectures and active learning programs programs

Diagram 7-1 Merged Curriculum System for the Three Universities

In regard to the system for lectures, each university has created original courses focusing on their areas of expertise. Also at the same time, we are cooperating in the creation and implementation of programs such as the nano-biotechnology course and the summer schools. Distinctive initiatives include: Okayama University's Multilingual Seminars (debate-style classes that take place in Japanese, Chinese, Korean and English); Jilin University's School of International and Public Affairs lectures; and Sungkyunkwan University's series of special lectures and combined linguistic and cultural activities.

For example at Sungkyunkwan University, as well as the establishment of classes by teachers who are experts on East-Asian classical studies (Korean contemporary and classical literature, and Chinese classical literature), for areas that are thought to be lacking, in other words to increase the minimum basic level and also supplement combined linguistic and cultural activities, efforts are made to convey current concerns and the levels of discussions through a series of special lectures by leading Korean academic scholars who are invited to speak to the students. In the monitoring, it was pointed out that there is a large burden on inbound students from their language classes and lectures in their field of interest. There definitely seems to be that disinclination. However, for students whose Korean language ability is falling, if those students request it we advise that in the first semester they concentrate on language studies and in the second semester, they take courses in their field of interest. For graduate students, if their Korean language ability is strong, very often they do not take language classes so that kind of burden is not thought to be so heavy for them. However, as they may devote themselves entirely to their special field, they must also participate in combined linguistic and cultural activities and the series of special lectures, and are expected to come into broad contact with Korean culture. At international academic conferences held by the CAMPUS Asia Program, graduate students participate as interpreters and translators and so that they can come into contact with the latest results of leading academics.

Through each university setting up its own program, the benefits for exchange students to study at the universities are heightened. Also, cooperation in the common program and double degrees, etc., brings about a relationship of trust among teaching staff and has formed the foundation for common education (an international joint graduate school based on joint degrees) in the future.

#### 8. Academic Staff and Teaching

One of the distinctive characteristics of the dispatching operation is an increase in the number of CAMPUS Asia Program exchange students who study abroad in China and Korea, Japan and China, and Japan and Korea. In the beginning, common education concentrated on fostering professionals who have studied abroad in one of the partnership countries. However, after the comments in the mid-term report, attention is now focused on cultivating multilingual students experienced in overseas exchanges in both partnership countries. As a result, out of the twenty students from Okayama University who participated in the CAMPUS Asia Program in 2013 and 2014, nine experienced exchanges in both Korea and China. Sungkyunkwan University also promotes this rotating style of overseas exchanges. The number of such students may still be low but one Korean student has been studying abroad long-term since the 2013 academic year and after finishing long-term study in China, has come for short-term study in Japan.

Another distinctive characteristic is that the system for acquiring language ability at each of the universities in the

CAMPUS Asia Program has stabilized and the language level of the students has improved noticeably. As written below, for example at Okayama University, students who were at beginner's level were able to pass practically the highest level in certifying examinations before returning to their home countries. The Okayama University program is concentrating on language studies in the local language. This means promoting the development of ways to foster multilingual human resources such as not just classes at languages schools in the place of study but through all facets of life including multilingual seminars for Common Good education, regional conferences and living in share houses. The results of this are shown in the data below. Students who were not able to speak the local language were able to pass practically the highest level in certifying examinations one year later (Tables 8-1, 8-2).

Table 8-1 Exchange Students in Academic Year 2013

Country dispatched to (Period)	Student	Language level before being dispatched	Language level after being dispatched
China, Jilin University (1 year)	A-M	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	B-F	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	C-F	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	D-M	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	E-F	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	F-F	Beginner's level	TOPIK 5th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	G-F	Beginner's level	TOPIK 5th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	H-M	Not yet completed	TOPIK 4th Grade (Intermediate level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	I-F	Beginner's level	TOPIK 5th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	J-F	Beginner's level	TOPIK 6th Grade (Advanced level)

Table 8-2 Exchange Students in Academic Year 2014

Country dispatched to (Period)	Student	Language level before being dispatched	Language level after being dispatched
China, Jilin University (1 year)	A-F	Intermediate level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	В-М	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	C-F	Beginner's level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	D-F	Intermediate level	HSK Level 6 (Advanced level)
China, Jilin University (1 year)	E-M	Not yet completed	Under examination
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	F-F	Beginner's level	TOPIK 5th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	G-F	Intermediate level	TOPIK 6th Grade (Advanced level) Recipient of language center prize for excellent results
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	H-F	Beginner's level	TOPIK 6th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	I-F	Beginner's level	TOPIK 5th Grade (Advanced level)
Korea, Sungkyunkwan University (1 year)	J-F	Beginner's level	TOPIK 6th Grade (Advanced level) First prize in speech contest

In the case of Sungkyunkwan University, initially for classes conducted in Korean, it was difficult for Japanese exchange students (especially) to understand the content. However, as shown in the tables above, with each succeeding year the students' language ability continues to improve and the classes are more and more fulfilling. Nearly all Sungkyunkwan University students dispatched to Japan obtain JLPT Level 1 while students dispatched to China obtain HSK 6th Grade after their return. Most of the students already have intermediate or higher language ability when they are dispatched but there have been cases when a student at beginner's level has attained HSK 6th Grade. Also, students who studied in Japan have published articles in academic journals about surveys for their research which they built up while in Japan. In some cases, their research was highly appraised enabling them to receive grants to return to Japan (Kyoto University, Doshisha University).

In the monitoring, comments were made that as it was difficult to achieve expected effects higher than exchange study programs, it was necessary to promote the double degrees for the firm establishment of the program and the fostering of core regional human resources. In spring of the academic year 2015, agreement was concluded for a double degree program with Okayama University and Jilin University, and this established the base aiming for outcomes with even higher standards. (Sungkyunkwan University)

Every year, the Korean Council for Education holds an essay contest about experiences in the CAMPUS Asia Program. The Sungkyunkwan University enterprise gave out one prize for the best essay and three encouragement prizes in the academic year 2012 while in the academic year 2013 it gave out four prizes for excellent essays and one encouragement prize. However, these prize-winning students were all students who had been dispatched by Sungkyunkwan University. For the academic year 2014 contest, of the 38 successful contestants, eight were CAMPUS Asia Program exchange students from Okayama University, Jilin University and Sungkyunkwan University. The student who received the top prize was from China (See Table 2-2-3). Previously there were foreign students who wrote their essay in English and won a prize but this time the prizewinner deserves special mention as the essay was written in Korean and is the result of collaboration between intensive pre-departure language classes and language education carried out at the place the student exchanged studied at. The outcomes of education for the Common Good are very clear in the content of the essays written by the prizewinners (For specific education examples, see the syllabus in Table 8-4).

In the monitoring comments were made about the need to adopt a system for testing language and humanities skills, and establish an active support system. However, from these outcomes (Sungkyunkwan University) the effectiveness of student instruction delivered through the cooperation between the three universities in this program has been corroborated to a certain degree.

Table 8-3 Prizewinners from the 3 Universities in the 2014 CAMPUS Asia Program Experiences Essay Contest

University	Name	Affiliated university	Essay title	Category
Sungkyunkwan University	FAN Huijie	Jilin University	CAMPUS Asia that enabled me to grow *Written in Korean	First prize
Sungkyunkwan University	LIM Ji Won	Sungkyunkwan University	I want to talk about the China that I saw	Excellent
Sungkyunkwan University	NAM Hae In	Sungkyunkwan University	Aiming for a complete life	Excellent
Sungkyunkwan University	LEE Jung Min	Sungkyunkwan University	How to get close to other people	Excellent
Sungkyunkwan University	KIM Hee Jin	Sungkyunkwan University	The China of my eye	Excellent
Sungkyunkwan University	XIE Jiao	Sungkyunkwan University	The Good as seen through CAMPUS Asia	Encouragement
Sungkyunkwan University	Anna Oogaki	Okayama University	My experience in the CAMPUS Asia Program *Written in Korean	Encouragement
Sungkyunkwan University	PARK Jung Hye	Jilin University	Seeking contributions for the CAMPUS Asia Program Experience Essay	Encouragement

Table 8-4 Concrete Examples of Common Good Education in Okayama University (2014-15)

#### A The Common Good: East Asian Regional Integration

Numbering code	ULAZ0LAFZ201N
Course title	The Common Good: East Asian Regional Integration
Semester / Quarter	Special lecture
Number of credits	2 credits (90 min.×15)
Day	Summer School
Period	1
Target students	Students enrolled for the 2015 CAMPUS Asia summer school program
Required / elective	Compulsory elective
Instructor	Kim Dong Kwang et al.
Affiliation	Center for Global Partnerships and Education
Contact information	dkkim@okayama-u.ac.jp
Office hours	By appointment
Course description	In this course taught by a team of academics from China, Japan, and Korea, we will examine some of the key issues that stand in the way to integrating the East Asian countries into a tightly-knitted community. Despite their differences in the issues of identity, colonial settlement, and contemporary politics involving nation states and territories, East Asian countries are cooperating — better in the economic than in the political areas although cooperation in the latter is also taking place. But the economic and political reality of the contemporary world is calling for a formation of a more systematic community in the region. Guided by Charles Taylor's notion of "social imaginary," a common understanding that makes possible common practices and a widely shared sense of legitimacy among human beings, this course is an exercise in imagining an East Asian Community that may enjoy a widely shared sense of legitimacy among the peoples of the countries in the East Asian region.

Goals	Upon successful completion of this course, students are expected to be able to:  1. Identify some of the conceptual, historical, legal, political and technical issues that stand in the way to integrating East Asian countries into a regional community.  2. Understand the significance of an integrated East Asian Community for a peaceful and prosperous coexistence of the countries in the East Asian region.  3. Imagine in their own ways an East Asian Community which is desirable and durable.
Lesson plans	<ul> <li>01 Extracurricular Activity (Visit to Kurashiki Bikan Historical Quarter &amp; Inujima Island)</li> <li>02 Extracurricular Activity (Visit to Shizutani School)</li> <li>03 Extracurricular Activity (Visit to Sogen-ji Temple)</li> <li>04 Why do People Migrate?: Patterns of Global Migration (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>05 Can People Migrate?: Government Policies and Politics (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>06 Legal Systems of East Asian Countries (Prof. Kungang Li)</li> <li>07 Can We Live Together?: Towards Peaceful Co-existence (Prof. Naomi Hosoda)</li> <li>08 Japanese Foreign Policy toward East Asian countries (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>09 Transnational Women's Movement in East Asia (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>10 Common Good or Common Interest? (Prof. Dong Kwang Kim)</li> <li>11 Who are Japanese? (Prof. Kimiko Osawa)</li> <li>12 Asian Values: Pro and Contra (Prof. Dong Kwang Kim)</li> <li>13 The Commons and Differences of East Asian Laws: From the Perspectives of Constitution Law, Company law and Labor Law (Prof. Kungang Li)</li> <li>14 The Future East Asian Laws (Prof. Kungang Li)</li> <li>15 The Imaginary of the East Asian Community (Prof. Dong Kwang Kim)</li> </ul>
Information regarding preparation, review and related subjects	To read texts and other handouts in advance for each session.
Teaching style, equipment used	Lecture, discussion
Textbook	(Prof. Hosoda) Stephen Castles, Hein de Haas and Mark J. Miller. 2013. The Age of Migration, 5th Edition. Russell King, Richard Black, Michael Collyer, Anthony Fielding, and Ronald Skeldon. 2010. The Atlas of Human Migration: Global Patterns of People on the Move. (Prof. Li) Selections from Introduction to Law and Legal Systems, by Frank August Schubert, Wadsworths, 2010 Selections from Poly-Ling Tan (ed.), Asian Legal Systems, Butterworths, 1997 Zhongqiu Zhang, From Chinese Legal System to East Asian Laws Legal Tradition and Changes of East Asia and the Development Trend, in Symposium of International Academic Research on Chinese Legal System (p118-125); (Prof. Kim) Kim, Dae Jung (1994). Is Culture Destiny: The Myth of Asia's Anti-Democratic Values (A Response to Lee Kuan Yew). Foreign Affairs, 73(6), 189-194. Selections from Aristotle's Politics and Nichomachean Ethics. Selections from the Proceedings of a Conference "'Asian Values' and Democracy in Asia" held on 28 March 1997 at Hamamatsu, Shizuoka, Japan as Part of the First Shizuoka Asia-Pacific Forum: The Future of the Asia-Pacific Region. Taylor, Charles (2004). What is a "social imaginary"? In Modern Social Imaginary (pp. 23-30). Duke University. Durham, NC / London: Duke University Press. Zakaria, Fareed (1994). Culture Is Destiny: A Conversation with Lee Kuan Yew. Foreign Affairs, 73(2), 109-126.
Reference books	CAMPUS Asia textbooks and handouts to be distributed in advance or in classroom.
1101010100 20010	

Prerequisites	None, but a prior reading of the texts below would be helpful.	
Comments / Caution on course	<ul> <li>* Diploma subject</li> <li>1. Dates: Two weeks in August 2015 Number of credits: Four Details will be given during the month of June.</li> <li>2. No requirement for this course is imposed. Note that taking only one course is not permitted, students must register for both No. 1 and 2, and participate in the full two-week course.</li> </ul>	

### B Common Good - The Tripartite Relationship between Japan-China-Korea and Their Societies

	The impartite Helatierierip between dapair erima Norda and Their decicles
Numbering code	ULAZ0LAFZ200N
Course title	Common Good - The Tripartite Relationship between Japan-China-Korea and Their Societies
Semester / Quarter	Special lecture
Number of credits	2 credits (90 min.×15)
Day	Summer School
Period	1
Target students	Students enrolled for the 2015 CAMPUS Asia summer school program
Required / elective	Compulsory elective
Instructor	BAI Rongxun et al.
Affiliation	Center for Global Partnerships and Education
Contact information	bai-rx@cc.okayama-u.ac.jp
Office hours	By appointment
Course description	This is an intensive summer school course which will be held in August 2015. It is hosted by the Campus Asia Promotion Office, the Center for Global Partnerships and Education, Okayama University. Undergraduate and graduate students from three universities will participate in this course: Okayama university, Jilin University in China, and Sungkyunkwan University in Korea. This course is intended for participants from these three universities. Fourteen instructors from the universities in Japan, China, and Korea will give lectures. The course lasts for two weeks. Students will study the themes of No. 1 for the first week, and No. 2 for the second week. Each session of No. 1 and 2 consists of 15 lectures (90 minutes per lecture), for a total of 30 lectures. In total, four credits are granted.
Goals	The three universities of Okayama University, Jilin University, and Sungkyunkwan University have accepted inter-university exchange students, and organized inter-university courses with the goal of fostering internationally oriented human resources in east Asia. This intensive course is held as part of our efforts toward achieving that goal. It is aimed at deepening the mutual understanding of each country's culture, through exchanges of undergraduate and graduate students of the universities from the three countries, Japan, China, and Korea. It is also aimed at acquiring extensive knowledge through learning specialized knowledge in various fields, and at fostering the ability to think with an international perspective about the past, present and future of east Asia multilaterally.
Lesson plans	No. 1 (First week) It consists of the following three themes: Theory of justice and common-wealth: economic cooperation between the three countries of Japan, China and Korea and east Asia: Cultural exchanges in east Asia.  1 Commonalities in the theory of justice: Comparison between the East and the West I 2 Commonalities in the theory of justice: Comparison between the East and the West II 3 What common-wealth is I 4 What common-wealth is II 5 History and society of Okayama described in documentation 6 Current state of Japan's economy and east Asia I 7 Current state of Japan's economy and dust Asia II 8 Bilateral economic cooperation between Japan and China, and Japan and Korea, and their problems I

Lesson plans	<ul> <li>9 Bilateral economic cooperation between Japan and China, and Japan and Korea, and their problems II (Visit companies, such as Mitsubishi Motors' factory)</li> <li>10 Economic cooperation and future prospects of east Asia in the 21st century I (Field work)</li> <li>11 Economic cooperation and future prospects of east Asia in the 21st century II (Field work)</li> <li>12 Development of commonalities of Chinese character cultural sphere in East Asia I</li> <li>13 Development of commonalities of Chinese character cultural sphere in East Asia II</li> <li>14 The environment of east Asia analyzed by interpretation of snow II</li> <li>15 The environment of east Asia analyzed by interpretation of snow II</li> </ul>
Information regarding preparation, review and related subjects	Instruction will be provided in class.
Teaching style, equipment used	Regularly lectures will be given. Handouts of the outline of lectures and historical materials of documentations will be distributed in class. Presentation using Power Point might be given.
Textbook	CAMPUS Asia textbook series
Reference books	CAMPUS Asia textbook series
Academic assessment	Evaluation will be basically performed in a comprehensive manner based on attendance, presentation, reports, and others. The basic evaluation ratio is as follows: Attendance 35%, presentation 20%, reports 45%. The theme of reports will be given in class.
Relation to research activity	The university teachers from the three countries of Japan, China, and Korea will give lectures based on the achievement of their educational practices and research.
Prerequisites	None, but a prior reading of the texts above would be helpful
Comments / Caution on course	<ul> <li>* Diploma subject</li> <li>1. Dates: Two weeks in August 2015 Number of credits: Four Details will be given during the month of June.</li> <li>2. No requirement for this course is imposed. Note that taking only one course is not permitted, students must register for both Course No. 1 and 2, and participate in the full two-week course.</li> </ul>

## C Multi-lingual seminar on the "Common Good" in East Asia

Numbering code	LAAA3LAZZ400N
Course title	Multi-lingual seminar on the "Common Good" in East Asia
Semester / Quarter	First semester
Number of credits	2 credits (90 min.×15)
Day	Thu
Period	2
Target students	CAMPUS Asia Program students and others
Required / elective	Compulsory elective
Instructor	Mayumi Ono
Affiliation	Center for Global Partnerships and Education
Contact information	mayumiono@okayama-u.ac.jp
Office hours	Tuesday 14:30-16:00, Thursday 16:15-17:45 (appointment needed)
Course description	This is a class of the CAMPUS Asia Program. Students will discuss and make presentations on the topics of contemporary socio-cultural issues, medical and technological problems in East Asia. The class will be carried out on a multi-lingual base.
Goals	The goal of this course is to acquire basic skills to discuss on a multi- — lingual base, how it is possible to solve the facing problems like similar social problems or common international affairs.

Lesson plans	<ol> <li>Introduction</li> <li>Masaru Araki: Common Good in East Asia (1)</li> <li>Masaru Araki: Common Good in East Asia (2)</li> <li>Masahiro Taguchi: Whether globalization brings public benefit and welfare for East Asia? (1)</li> <li>Masahiro Taguchi: Whether globalization brings public benefit and welfare for East Asia? (2)</li> <li>Seiji Tsuji: Controversy over the languages in East Asia (1)</li> <li>Seiji Tsuji: Controversy over the languages in East Asia (2)</li> <li>Zhang Hong: Jurisprudence in East Asia</li> <li>Yasushi Nishihara: The Importance of Natural Science Education</li> <li>Hitoshi Nagatsuka, Satoshi Hirohata: Common Good in East Asia from the view of Medical Science, Health Sciences and the view of life and death</li> <li>Presentations, Group works</li> <li>Presentations, Group works</li> <li>Presentations, Group works</li> <li>Final presentations</li> </ol>
Information regarding preparation, review and related subjects	Refer to the literature and materials related to the themes. Prepare to present your opinions.
Teaching style, equipment used	Lectures, multi-lingual based discussion and presentations
Textbook	CAMPUS Asia textbook series
Reference books	CAMPUS Asia textbook series
Academic assessment	Attendance 30 points Presentation 30 points A Short Paper 40 points
Relation to research activity	The university lecturers related with the CAMPUS Asia Program will give lectures based on the achievement of their educational practices and research.
Prerequisites	None, but a prior reading of the texts above would be helpful
Comments / Caution on course	In group practice, students are expected to actively communicate and dialogue with other students.

### 9. Students Admission

In order to heighten the quality of students registering for long-term study abroad, various preparatory programs have been arranged. Program that have credits include CAMPUS Asia lectures by full-time teaching staff, Chinese and Korean workshops, and summer schools. The reasoning is that participation in these programs by students raises their motivation and they can participate in the CAMPUS Asia Program long-term exchange study with an awareness of their goals.

In the case of Sungkyunkwan University, recruitment of students is not always easy. Some reasons are that the interest of many students lies in the West or there are no Japanese courses; there are relatively few students studying languages; there are China studies courses but it may cause competition with other student exchange programs in China, and so on. Even so, as the number of students who participate in the CAMPUS Asia Program increases, the program becomes better known within the school and more students are becoming interested in studying abroad

through the CAMPUS Asia Program. Initially, the Korean program focused more on long-term than short-term study abroad. However, during the short-term exchange with Okayama University, some students started to become interested in long-term exchange study, or it was finished as a single stay but students from Jilin University wished to change from short-term training to long-term exchange study. Finally, awareness arose of the importance of long-term study abroad. From the aspect of fostering human resources, and to distinguish the program from other ordinary exchange programs, it is necessary to link both short-term and long-term exchanges in the future.

In the case of Okayama University, activities carried out by the students themselves such as the CA club, the share house and the CA student newspaper, play a major role in widely disseminating information about CAMPUS Asia Program activities to students.

The distinguishing feature of inbound and outbound students of the three universities is the high mobility of the students. For example with Okayama University as a base, so far 183 students have come to the university for short-term and long-term study while 275 students have been dispatched for short-term and long-term study abroad. Although relations between China, Korea and Japan are going through a tough time now, the relations between the three universities are extremely friendly and students are being accepted according to plan. The relationship of trust that has been fostered thus far forms the foundation for this outcome.

Inbound students consist of both undergraduates and graduate students. Apart from the global liberal arts and fieldwork which are conducted together, students concentrate on their own fields of interest and follow their own separate schedules in that respect. In the future, these programs will be amalgamated into the international joint graduate school and it is intended to set up a program that will confer degrees with highly assured quality.

For PR, a wide range of media are employed to recruit students and introduce activities to students such as operation of a detailed website, use of social networking services, introducing the program's activities on Facebook, and advertising through student circles etc.

Students who have participated in the CAMPUS Asia Program come from all areas and include undergraduates and graduate students. From data collected on various programs from the start of the program until now, we can see that the concept to include the entire university in the program is actually progressing well. For example, students at Okayama University who have participated in exchange studies, workshops, and summer schools, number 197 in the humanities and social sciences, 89 in the natural sciences and medical, dentistry and pharmaceutical fields while graduate students number 7 in the humanities and social sciences, and 78 in the natural sciences and medical, dentistry and pharmaceutical fields.

In the monitoring, comments were made about the obscurity of the outcomes and realization of the judgement criteria because no joint or multiple degrees were adopted. In spring this year, we concluded an agreement regarding double degrees (master degrees) with Okayama University and Jilin University and in the future we expect to be able to recruit talented graduate students for the program. (Sungkyunkwan University)

# 10. Support for Learning and Living

Initiatives to support outbound students included education to improve language ability pre-departure and after returning from abroad, enhancement of short-term programs in collaboration with local communities, holding of Chinese and Korean workshops to find students who may wish to study abroad, organization of a system for the smooth transfer of credits for subjects studied during study abroad, adopting a system of monthly reports and distance learning using iPads.

For inbound students, initiatives were implemented for a fulfilling student life including enrichment and systemization of the CAMPUS Asia subjects, the holding of workshops beyond the campus and in collaboration with local communities, exchanges with CAMPUS Asia students from other universities, placement of student partners and academic tutors, student club support, strengthening of language education support, improvement of share houses and participation in community activities. A support system fulfilling from both aspects of study and student life, was put in place. At Sungkyunkwan University, a system was established where academic tutors for Campus Asia inbound students received five volunteer credits.

In regard to support for the students' everyday life, due to improvements in the share house, the quality of support improved. Japanese, Chinese and Korean students have been able to build up the kind of relationships where they have discussions with one another, built on a foundation of understanding each other's sense of values, every day customs and culture through sharing everyday life together. A resident assistant, who is Japanese, carried out support for the students' campus life and study.

In the share house management, a point deserving special mention is that the concept of the Common Good played a major role. In the student forum which has been held twice yearly from 2014, occupants of the share house gave a joint presentation on "The Common Good of the Share House." In that report, for the Japanese, Chinese and Korean students to enable their communal living go smoothly, they found the meaning of the keyword 'the Common Good' as in the Common Good just as a plan, the Common Good in culture, the Common Good in study, and the Common Good in communal living. The Japanese, Chinese and Korean students met each other halfway and always considered things from the standpoint of the others, respecting each other's viewpoints. They learned how to do these things by experiencing it in their actual lives. A regular event of the Okayama University CAMPUS Asia has developed out of The Common Good in the share house — "Understanding the Common Good through Food." The most important outcome from the share house management is that the students have discovered for themselves that the base for coexistence in East Asia comes from the food culture where they all sit around the same table and extend their hospitality to each other and enjoy food together in their communal living in the share house.

At Sungkyunkwan University, support for inbound and outbound students in their study and everyday life is as follows. By operating an educational program for language and culture targeted at outbound students, our support enables the students to adapt quickly in Japan and China. After the students are dispatched, communication is carried out on a regular basis by emails and social networking services such as Facebook, and efforts are made to deal with any inconveniences the students experience in their study or everyday life during their study abroad. After the

students return to Korea, study meetings are held focusing on related themes (reading and discussion meetings for Self-Help, Chinese classical and contemporary literature study meetings), and the students have consultations with teaching staff and researchers regarding their career courses. For inbound students, following consultation with the university administration, they have been exempted from paying for accommodation in the halls of residence and for language classes thus securing stability for their basic everyday life and for study. Each semester, required courses for inbound CAMPUS Asia students are set up - "East Asian Classical Literature Core Courses" (three courses). Aside from these regular classes, students are taught about trends in Korean academic culture through a series of special lectures with East Asian history, literature and thought as the themes. They are actively encouraged to participate in learning outside of class such as in linguistic and cultural communities, trips related to the university's liberal arts courses, summer schools (ISS), and attending academic conferences and meetings to report on outcomes. Support is also given to improve adaptation to life in Korea, and improvement of classes and study outcomes, through consultations with the coordinator(s), regular meetings with education research associates, the one-on-one tutoring method and so on. In particular, through selective allocation of instructing professors to graduate students, guidance is given on research themes that match the individual student and this has been well received by the students. Each year, in winter and summer, inbound students from Japan, China and Korea are dispatched and accepted through the short-term student exchange program. The costs related to this, securing of facilities and so on, are supported by the CAMPUS Asia Program and the university. By having a short-term and a long-term system, students are able to experience all three countries and this plays a role in differentiating it from other exchange programs.

At Jilin University, four staff members from the International Exchange and Service Center and the College of International Education are in charge of consultations and guidance for the participating students. A system with students as assistants was adopted and they cooperate to help students from Japan and Korea get used to student life at Jilin University quickly. Thus an environment has been set up where students can come in contact with the language and culture of China, Japan and Korea. Also, as extra-curricular activities for the students, trips were organized to visit companies, museums and the Imperial Palace of the Manchu State as well as get-togethers with Chinese students and the exchange students. Currently, a circle for CAMPUS Asia Program students has been made on the social networking service Wechat so that communications between students and also between students and the university can be carried out smoothly.

### 11. Student Satisfaction

Student satisfaction is verified from the students' reports and essays about their impressions. These are made up in to a booklet and published, and at the same time, some of them are put on the website.

Student Forum, Okayama University CAMPUS Asia, published yearly.

Chinese and Korean Workshops, Okayama University CAMPUS Asia, published yearly.

CAMPUS Asia Study Abroad Experiences, Sungkyunkwan University CAMPUS Asia, published yearly.

Jilin University CAMPUS Asia Program Report 2013, Jilin University CAMPUS Asia, published yearly.

Performance Report 2012, Okayama University CAMPUS Asia Secretariat, March 2013.

The large number of students who continue to participate in introductory Chinese and Korean workshops, language programs aimed at long-term study abroad, and summer schools that form the foundation for the Common Good education, show that they are very satisfied with each of the programs.

At Okayama University, activities such as the CAMPUS Asia alumni association, students club, share house and CAMPUS Asia students newspaper, are proof of the active participation by students in CAMPUS Asia activities. All of these activities are managed at the students' initiative.

For Sungkyunkwan University, comments were made in the monitoring that efforts were needed to improve problem areas, based on surveys on education and the level of satisfaction with life that are carried out periodically. In the light of this, our program group is verifying student satisfaction by surveys (questionnaires) on student satisfaction, student outcome reports, creation of personal accounts of experiences in the CAMPUS Asia Program and publishing of collections of these accounts, and holding regular meetings to report on outcomes.

Through the student satisfaction surveys (questionnaires), an analysis is done on the quantitative degree of student satisfaction, and students are asked for items that they wish to be improved. The qualitative degree of student satisfaction is reported in the student outcome report and also meetings to report on outcomes are held regularly. From this, verification of student satisfaction can be done in both directions between the students of the CAMPUS Asia and the CAMPUS Asia secretariat (teachers, researchers, research associates, etc.), and feedback is provided on that. From these methods, we have verified the level of student satisfaction relating to regular classes, other non-regular classes held in the local community, support for students' everyday life (residence halls and noncurricular guidance), extra-curricular activities and so on. We found the level to be high. By regularly publishing and distributing collections of accounts of the students' experiences, we were able to share content related to the student satisfaction over a wide area as well as ask about content related to this. In particular, the competition held by the Korean Council for University Education for essays about student experiences in the CAMPUS Asia we were able to take first prize and many other prizes. External verification of student satisfaction was expressed in an objective format.

# 12. Credit Transfer and Degree Awarding

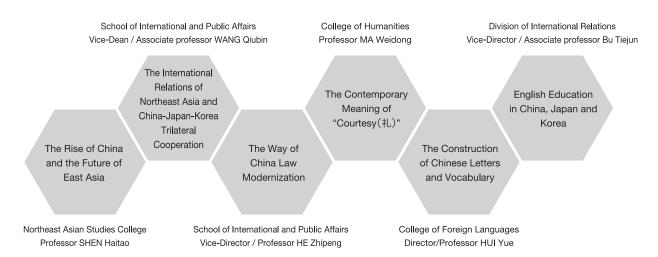
In regard to creating a system for credit transfer with assured quality in a structured manner, efforts are being made to cooperate in creating a system for the curriculum, with the creation of the Education System for Global Liberal Arts in East Asia as the purpose. Concretely, each university is holding lectures divided up in the following manner (See Table 12-1, Diagram 12-1, Table 12-2, Table 12-3).

Table 12-1 Okayama University CAMPUS Asia Subjects System

Okayama University (Education for the Common Good)	Content	Number of subjects		
Liberal Arts subjects	Subjects unique to the CAMPUS Asia	21 subjects		
Major (undergraduate)	CAMPUS Asia titled course of subjects chosen from already existing subjects	Approx. 40 subjects		
Major (graduate school)	CAMPUS Asia titled course of subjects chosen from already existing subjects	Approx. 25 subjects		
Japanese language classes	CAMPUS Asia titled course of Japanese language subjects chosen from already existing subjects	Approx. 20 subjects		
(for the cyllabus please see http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.in/naws.info/3050)				

(for the syllabus please see http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp/news\_info/3950)

Diagram 12-1 Jilin University 2014 CAMPUS Asia Lecture System



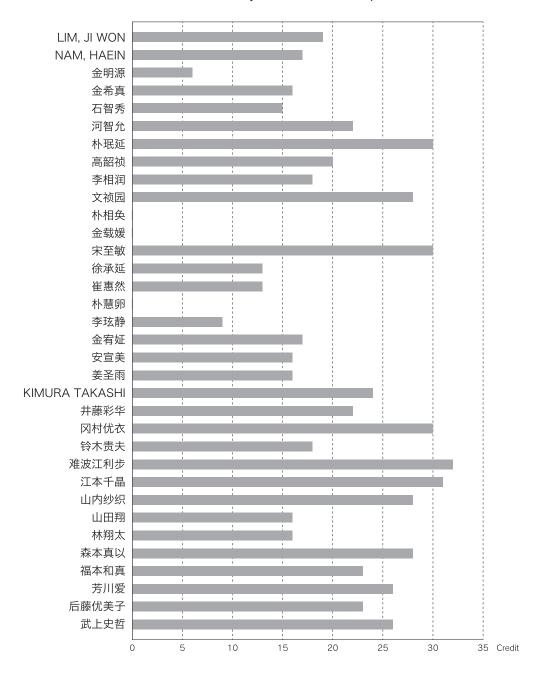


Table 12-2 Jilin University CAMPUS Asia - Acquisition of Credits

Jilin University CAMPUS Asia Lecture Series

Subjects unique to the CAMPUS Asia

6 subjects

Majors: Economy, law, history, Chinese language and culture, archaeology, etc.

Multiple subjects

Chinese language subjects \*Subjects chosen from existing subjects of the

College of Foreign Languages, Chinese intensive reading, listening, conversation, etc. Multiple subjects

Table 12-3 Sungkyunkwan University CAMPUS Asia Subjects System

Subjects unique to the CAMPUS Asia 3 + 5 subjects Majors Multiple

#### East Asian Classics, Core course, Lecture period

Course Title	Professor in charge	Period	Target students
Modern Classics of East Asia	HUANG Gaode	2014 Second term	COMPULSORY attendance for CA exchange students.  OPTIONAL course for Humanities and Social Sciences students
Mutual Understand- ing in East Asia and Chinese Characters Civilizations	JIN Longtai	2014 Second term	COMPULSORY attendance for CA exchange students.  OPTIONAL course for Humanities and Social Sciences students
An Introduction to East Asian Classics	HAN Yong gui	2014 Second term	COMPULSORY attendance for CA exchange students.  OPTIONAL course for Humanities and Social Sciences students

#### Special Lectures of CAMPUS Asia on subjects of East Asian History, Literature and Ideology

Theme	Lecturer	Date	Target students
Interpretation of the Analects of Confucius in East Asia: Differences and Similarities	JIN Longtai	April 30 Renwen building Room Shi xi zhai	CAMPUS Asia accepted students and concerned students
Visiting the cultural remains of Seoul Bukchon Hanok Village	HAN Yong gui	June 20 Seoul Bukchon Hanok Village	CAMPUS Asia accepted students and concerned students
Korean civil society and civic activities	ZHENG Xuanbai	September 24 Renwen building Room 31508A	CAMPUS Asia accepted students and concerned students
The causes of historical disputes between Korea-China-Japan and views of the problem	LI Xinche	October 22 Renwen building Room 31508A	CAMPUS Asia accepted students and concerned students
The influence of Confucianism on Modern Korean, Chinese and Japanese Societies	SHIN Jung-eun	November 26 Renwen building Room 31508A	CAMPUS Asia accepted students and concerned students

In the case of Sungkyunkwan University, recognition of credits gained by study abroad is left up to the discretionary decision of the dean of the faculty to which the student belongs. Because of conditions regarding students' majors, generalizations cannot be made about the situation regarding credit acquisition. However, the CAMPUS Asia Program enterprise is making efforts so that as many credits as possible are recognized.

In the case of Okayama University, after some trial and error, efforts have been made so that as many subjects as possible can be taken reciprocally. For example, by recognizing already existing subjects as CAMPUS Asia titled course subjects, a mechanism was created so that exchange students can acquire even more credits reciprocally, even

if those unique CAMPUS Asia titled course subjects are different to lectures in the faculties the students belong to (Okayama University). Also, by having each university be responsible for certain educational content, students are able to take groups of lectures that are original and appealing. Credit recognition has also been done for specially established courses. Concretely this refers to nano-biotechnology courses (Okayama University), summer schools (Japanese, done cooperatively by the three universities), summer schools (English, done cooperatively by the three universities, scheduled to be held in 2015), Chinese and Korean workshops (Okayama University, done cooperatively by the three universities), and autumn schools (done cooperatively by the three universities, \*scheduled to be held in 2015).

Nano-biotechnology course in Okayama University was organized independently for the medical sciences students of Jilin University and Sungkyunkwan University, because of the tight curriculum at home university. Besides this course, workshops and hospital visits were prepared for students of Okayama University. Nano-biotechnology course started from 2013 and Okayama University accepted totally 30 short-term students and 7 long-term students and postgraduate students.

In the case of Sungkyunkwan University, the Academy of East Asian Studies has many subjects related to East Asia and we tell students who come to graduate school about these subjects so they can actively attend the lectures.

In regard to the conferment of degrees, as CAMPUS Asia students have not been registered in a faculty as regular students, system-wise it was not possible to confer degrees. However, in March 2015 Sungkyunkwan University and Okayama University, and in May 2015 Sungkyunkwan University and Jilin University, have concluded agreements for the conferment of double degrees. We are also looking at establishing joint degrees. Okayama University and Jilin University already concluded an agreement in December 2007 regarding double degrees and therefore, agreements are now complete among the three universities.

In May 2015, meetings were held in Changchun (Jilin University) and Seoul (Sungkyunkwan University). Discussions were carried out about firstly, establishing a joint international graduate school in Jilin University's School of International and Public Affairs playing a central role; and secondly, further expanding this to include Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, and Natural Science studies. For the time being, each university will carry out preparations for creating a system for those two items. Concretely, this includes creating a framework for mutual student exchanges that will include acquisition of degrees, enhancement of Common Good education subjects, adopting a learning agreement, and concluding an agreement about double degrees with a view to including joint degrees in the future.

## 13. Self-Assessment

In regard to quality assurance of education, a systematic framework has been put together through the compilation of Japanese, Chinese and Korean Common Textbooks, concluding of an agreement for exchanges with degrees, and peer evaluation by meetings of the joint administrative offices of the three universities.

### · Compilation of the Japanese, Chinese and Korean Common Textbooks

For quality assurance of education, joint meetings were held regularly for review of the compilation of the textbooks and preparations for the Common Textbooks have been advanced. Common Textbooks have been published, or preparations for publishing made, for three areas - economics, traditional thought and Chinese character culture. In each of the three areas teachers from the three universities wrote the manuscripts themselves. For economics, the CAMPUS ASIA Common Textbook *Higashi Ajia no Keizai Kyoryoku to Kyotsu Rieki* [Economic Cooperation and Common Interest in East Asia] (by Fukuro Shuppan in 2015) was published. For traditional thought, the textbook for use in the university has been completed and it will be published after being used in multilingual seminars, etc., and details are worked out. These textbooks will be translated and published in Chinese and Korean so that they can be used effectively in Japan, China and Korea.

### · Concluding of agreements for exchanges with degrees

The important point about quality assurance in education is the conferment of degrees. In order to secure the continuance of CAMPUS Asia and also quality assurance, it is important to ensure that the departments (undergraduate and graduate) take on a chief role in the program the roles played by the program and the undergraduate universities and graduate schools are vital. To achieve that purpose, the three universities have proceeded with concluding agreements for academia and student exchanges, and the double degree agreements.

Okayama University and Jilin University have already concluded a double degree agreement.

The Jilin University School of International and Public Affairs and the Sungkyunkwan University China Research Institute have already concluded a reciprocal exchange agreement.

In 2014, the Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences concluded a double degree agreement with Sungkyunkwan University School of Pharmacy.

In 2015, the Okayama University Graduate School of Humanities and Social Sciences concluded a double degree agreement with the Sungkyunkwan University College of Social Sciences.

## • Peer evaluation by meetings of the joint administrative offices of the three universities

The three universities hold meetings of the administrative staff regularly and presentations are given on the initiatives and issues of each university. Discussions are held and peer evaluation is done.

In the monitoring done in Korea, requests were made for the activation of the administration committee for quality management and further collaboration between academic conferences and the CAMPUS Asia Program. Currently, the administration committee is involved in the compilation of Common Textbooks, as mentioned above, and is in charge of writing textbooks and learning materials that assure the quality of education. For academic conferences too, CAMPUS Asia students take part in doing the interpreting and translation work, making the conferences a place for exchanges and education as well. In the future, there is a plan to make the conferences a venue for academic exchanges between researchers and people involved in the CAMPUS Asia Program from the three universities.

In the spring of 2015, Okayama University, Jilin University and Sungkyunkwan University concluded agreements for double degrees establishing a foundation for even more excellent outcomes.

# 14. Quality Continuous improvement

In order to improve the quality of education even further, the three universities are vigorously attempting to bring about improvements from the aspects of creating a credit transfer system that is quality assured in a structured manner, creating a road map for the establishment for a joint international graduate school, and combining already existing courses.

### · Creation of a credit transfer system that is quality assured in a structured manner

Aiming for the creation of an Education System for Global Liberal Arts in East Asia, as well as improving the subjects and class content continuously at each university, it is necessary to complete the system so that the structure is more systematic. To that end, administrative meetings of the three universities should not just be about administrative issues but need to be changed to high-level CAMPUS Asia tri-nation joint meetings in which teaching staff can also participate and discuss education content, etc. Also, the establishment of common subjects to use the textbooks that were jointly written and also credit transfers should be carried out smoothly.

#### · Creation of a road map for the establishment for a joint international graduate school

In the humanities and social sciences, a goal has been set for the establishment of a joint international graduate school with the Jilin University School of International and Public Affairs playing a central role.

In the medical, dentistry and pharmaceutical sciences, nano-biotechnology showed a very good outcome. Especially a relationship of mutual trust has been fostered among the teachers and a path for mutual cooperation in research and education has been forged. This course will be changed to a course for nurturing young doctors and the strengthening of mutual cooperation will enable the fostering of human resources. Okayama University will accept 16 interns from the hospital of Jilin University beginning from October 2015. Jilin University and Okayama University are planning to establish double degree program in the field of medical sciences after the end of the Nano-biotechnology Course.

In the natural sciences, mutual understanding through international workshops (summer and winter) has been fostered among the teachers and a path for mutual cooperation in research and education has been forged. In the field of materials science, a double degree agreement is scheduled in anticipation of the joint international graduate school.

### · Combining of already existing courses

After the subsidized program finishes, in order for the CAMPUS Asia Program to proceed smoothly, it is intended to combine the Okayama University – North East China Universities Platform 'Graduate' Student

Exchange Program (O-NECUS), a collaborative program between Okayama University and five universities in the north-eastern area of China including double degrees, with the CAMPUS Asia Program. We intend to develop exchange programs with East Asia over an even wider range than before.

In the future, it is intended to develop the double degrees into joint degrees. Currently, due to systems in place, joint degrees cannot be carried out in Japan, China or Korea. Firstly, joint education within the double degree framework needs to be practically realized and while improving any issues that may occur then, after the system is improved between the three countries, preparations will be made for a smooth changeover to a joint degree system.

The research meetings for compilation of the Common Textbooks by Okayama University, the lectures given at Jilin University's School of International and Public Affairs and the series of lectures at Sungkyunkwan University and classical literature academic conferences should be linked with the CAMPUS Asia Program to create a venue for the people involved in these ventures to get together. In integrating them, it is anticipated to hold symposiums where presentations can be given on the outcomes of each of these items.

(February 2016)







森 本 真 以 MORIMOTO MAI 2013年3月~2014年2月 中国・吉林大学留学

韓国 • 成均館大学校留学



山 内 沙 織
YAMAUCHI SAORI
2013年3月~2014年2月
中国・吉林大学留学

中国・吉林大学留学





猪原千愛 INOHARA CHIAKI 2013年3月~2014年2月 韓国 • 成均館大学校留学



市川友紀 ICHIKAWA YUKI 2013年3月~2014年2月 韓国 • 成均館大学校留学



木 村 崇 志 KIMURA TAKASHI 2014年3月~2014年8月 中国·吉林大学留学



井 藤 彩 華 ITO SAYAKA 2014年3月~2015年2月 中国·吉林大学留学



岡村優衣 OKAMURA YUI 2014年3月~2015年2月 中国·吉林大学留学



大 垣 杏 花 OGAKI ANNA 2014年3月~2015年2月 韓国,成均館大学校留学



植 村 安友美 UEMURA AYUMI 2014年3月~2015年2月 韓国 • 成均館大学校留学



黒 瀬 加那子 KUROSE KANAKO 2015年3月~2016年2月 中国·吉林大学留学

川 野 瑞 双 KAWANO MIZUKI 2014年9月~2015年8月 韓国・成均館大学校留学

和



## 執筆者一覧

荒木 勝 岡山大学副学長・理事(社会貢献・国際担当)、 キャンパス・アジア構想責任者、キャンパス・アジア事業推進委員会委員長

田口 雅弘 岡山大学学長補佐、キャンパス・アジア事業推進委員会副委員長、 キャンパス・アジアプログラムマネージャー、 大学院社会文化科学研究科(経済学系)教授

西原 康師 岡山大学学長補佐、キャンパス・アジアプログラムサブマネージャー、 大学院自然科学研究科(理学系)教授

長塚 仁 キャンパス・アジアプログラムサブマネージャー、 大学院医歯薬学総合研究科(歯学系)教授

那須 保友 岡山大学副理事、岡山大学病院副病院長、 大学院医歯薬学総合研究科教授

辻 星児 大学院社会文化科学研究科(文学系)教授

黒崎 勇二 大学院医歯薬学総合研究科(薬学系)教授

金 惠 淑 大学院医歯薬学総合研究科(薬学系)准教授

廣畑 聡 岡山大学学長補佐、グローバル・パートナーズ副センター長、 キャンパス・アジアプログラムコーディネーター、 大学院医歯薬学総合研究科(保健学系)教授

白 榮 勛 キャンパス・アジアプログラムコーディネーター、 グローバル・パートナーズ准教授(キャンパス・アジア専任教員)

云 洪凌 グローバル・パートナーズ プログラム・オフィサー(キャンパス・アジア事務局)

増田 鈴子 グローバル・パートナーズ アシスタント(キャンパス・アジア事務局)

### キャンパス・アジア事業 総括成果報告書

The Five-Year Experience and a New Horizon for Cooperation

### 2016年3月20日発行

編集 田口 雅弘、云 洪凌、増田 鈴子(キャンパス・アジア事務局)

発行 岡山大学 キャンパス・アジア事務局 〒700-8530 岡山市北区津島中2丁目1番1号 TEL 086-251-8532 岡山大学グローバル・パートナーズ キャンパス・アジア事務局 http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp

印刷 株式会社 中野コロタイプ 〒701-2142 岡山市北区玉柏390 TEL 086-229-3366 FAX 086-229-3456 http://nakano-collo.co.jp



平成23年度大学の世界展開力強化事業

【タイプA:キャンパス・アジア中核拠点形成支援】I:日中韓のトライアングル交流事業「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」